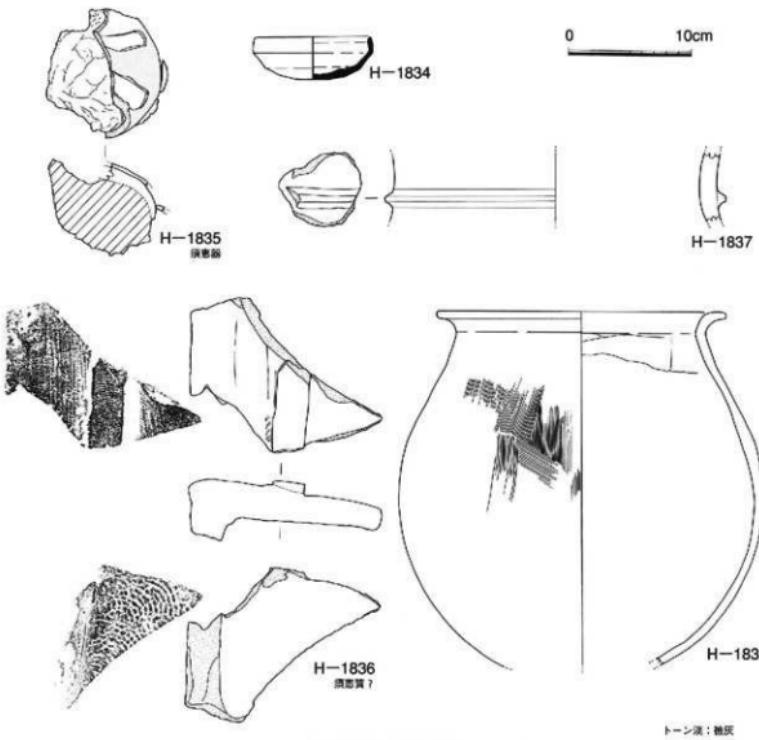


第202図 H区 南壁出土遺物③

トーン法：柱底



その他包含層出土遺物
第203図 H区 包含層出土遺物

⑤ H区南壁・その他の出土遺物

以上がH区からの出土遺物の概要であるが、H区では調査終了後、埋め戻しまでの間しばらくシートにて調査区内の保護を行っていた。ところが、H区の南壁の一部が崩落してしまい、現地での安全性を考慮して南壁の一部を人力によって整形し跡地内の保護に努めた。その結果、予想外の大量の遺物がH区の南壁で出土した。ここではこれらの出土遺物の概要をまとめて述べておく。

H-1796～1833がH区南壁出土遺物である。H-1796・1807・1808は壺Hの蓋と身とが溶着したものである。H-1796は約30%残、身の外面に甕片？と思われる別の須恵器片が溶着し、そのためか壺Hの身も凹んでいる。H-1807・1808は細片で復元は困難、壺Hの蓋の肩部に身が溶着している。

H-1797～1802は壺Hの蓋である。H-1797は30%残、稜線では沈線の重なりが見られ、天井部に工具痕と思われる条痕が残る。H-1798は30%残で外面に別の須恵器片が溶着している。H-1799は

20%残、天井部の調整はケズリである。H-1800は50%残、(復)口径12.2cm、器高4.2cmを測る。H-1801は60%残、(復)口径13.6cm、器高4.6cmを測る。H-1802はほぼ完形、口径13.8cm、器高4.2cmを測る、やや軟質で色調は白灰色を呈している。

H-1803~1806は壺IIの身である。II-1803は30%残、外面に灰を被り調整は不明瞭である。H-1804は40%残で底部調整はナデである。H-1805は30%残、外面に被灰する。H-1806は30%残、底部調整はナデか。

H-1809は壺F蓋の溶着資料である。蓋は輪状つまみにかえりの有するもので蓋同士が二個体分溶着している。

H-1810・1811は壺Fの身である。H-1810は50%残、底部調整はナデでX印のヘラ記号を施す。H-1811は30%残、底部調整は被灰し不明瞭、ナデか。

H-1812は壺Aで25%残、(復)口径は12.2cm、器高3.6cmと器高が低い壺である、口縁端部はわずかにくびれている。

H-1813は壺Aの重ね焼きで少なくとも七重は重ねてある、下から五段までは壺Aで口縁端部もくびれるもの、最も下の壺の切り離しは糸切りである、上二段は底部が極めて水平なので平底の壺や壺であろうか、溶着した上に細片なので詳細は不明である。

H-1814~1816は高壺である。H-1814は70%残であるが壺部上面を欠損している、一段二方向からの三角透かしを施している。H-1815は75%残、皿状の扁平な壺部に短く透かしの無い脚を付す、壺部内面(見込み)は被灰によって円形に変色しているので重ね焼きの痕跡と考えられる。II-1816は脚片、軟質で焼成は悪く灰白色を呈している。

H-1817・1818は壺である。II-1817は長頸壺(壺K)の頭部で、頸部に施した凹線が重なっている。H-1818は壺の底部、もしくは大型の壺か。

H-1819・1820は提瓶である。何れも小片で内外面がタタキ調整である。

H-1821・1822は甕Aの破片で頭部の接合痕跡が分かる。H-1822は甕Cの破片で体部の内外面はタタキ調整である。

H-1823は土馬である、須恵質で脚と尻尾を欠損する、最大長14.2cm、脚底面からタテガミまでの高さは9.5cmを測る、裸馬で男性器の表現があるが、日・口等の顔部表現は無い。

H-1824~1831は須恵器片転用の置台である。H-1824~1828は蓋片を転用したもので円形の剥離痕や被灰などが見られる、H-1829はかえりを有する壺Fの蓋を転用したもので、円形の剥離痕があり二次焼成が激しい。II-1830も同じくかえりを有する壺F蓋を転用したもので、径7cm程度の円形の剥離痕と被灰と共に見られる。H-1831は重ね焼きをした壺Fの蓋外面に、円形の剥離痕が三重ほど確認できる、重ね焼きの失敗品を少なくとも二回~三回は置台として転用しているようである。

H-1832は窯道具か、ナデ・オサエ等により雑に製作されているが、細片のため全形は不明である。

H-1833は土師器で土製支脚の細片である。

H-1834~1838はH区から出土したその他の遺物で、トレンチや廐土等、出土地点が不明瞭なものである。H-1834は70%残、口径9.4cm、器高3.4cmの小型の壺で外面全体に被釉している。H-1835

は坏Hの蓋とその他の須恵器片、および窓壁片とが溶着した資料で、蓋には白灰を被っている。H-1836は還元炎焼成で器種不明、内面に同心文の当て具痕が残り、外面は貼りつけによる扁平な突帶がある。胸尾か？ H-1837はH区の灰原から出土した円筒埴輪片である、焼成は普通であるが風化が著しく、ハケメ等の調整は不明、比較的のしっかりした1.4cm幅の貼り付け突帶を持つ、微細片な為、岡の復元径の妥当性は低い。H-1838はH区の灰原から出土した土師器甕で口径23.3cm、残高29.0cmを測る、調整は外面がハケメ、内面はケズリであるが風化が見られる。

H-2区 遺構と遺物

(藤原 哲)

H-2区はH区の東部に位置する、調査面積は66m²である。調査地は西隣に山津1号窯が、北西で立会調査時に山津2・3号窯が、南東に山津4号窯がそれぞれ検出されており、山津地域において最も窓跡が密集する地点に該当する(第293図)。H-2区は調査前、福穂を下すための小さな小屋が建てられており、北側(道路側)から南(コンクリート敷きの小道)に向かって急激に落ちた地形を示していた。

ただし、こういった状況も近・現代の道路工事や小屋建設時にかなり改変・盛上を受けたようで、調査によってもビニールや瓦等を含む最大80cmの盛土を検出した。先に述べたように、盛土の上にも調査開始直前にバラスによって水平に盛土が行われていた。

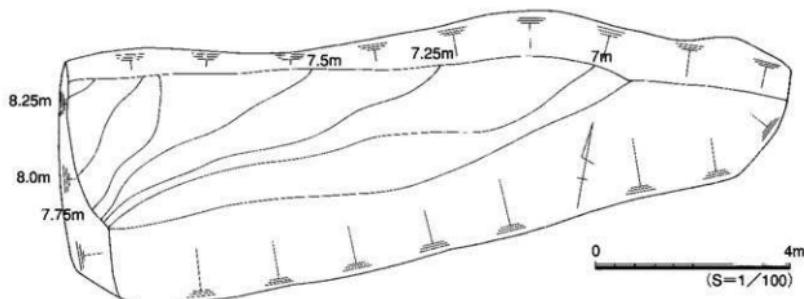
バラス・盛土を撤去した後の遺跡地内は、概ね北西に高く、西にはややゆるやかに、南には急激に落ち込んでいく地形であった(第204図)。そのため、H-2区の旧地形は、北の和久羅山から南の中海に向かって急激に落ち込む丘陵端部にあたり、基本的に上記のような高低を示していたと思われる。

H-2区の基本層序は以下の通りである。調査区内には標高8.3m~8.9mまで道路高に合せたバラスが敷かれており、北側は薄く15cm前後、南側は地形に応じて厚くなり最大180cmもバラスが敷かれていた(第205図・①層)。その下にもビニールや瓦が検出された盛土がみられるが、地権者の言によれば、戦後に小屋を造成する時に水平にしたものだということであった。(②~⑦層)。

その下には層厚20~50cmの暗茶褐色のシルト層が見られる(⑧層)。これは西端で高く(標高8.5m)、西側で急激に落ち込み、中央以東は標高7.8m前後で水平堆積している。この層からは須恵器片等が検出されたが、新しいものでは底部が回転糸切りで切り離された8世紀代の坏類がある。同層はある定点では旧表土を形成していたかもしれない。

それより(標高7.5m)以下は赤茶褐色の砂質土が最大1mほど堆積しており、地山面(黄色シルト)に至る。この包含層は赤く焼け締まったような砂質土で須恵器・礫が多く含まれていた(⑨~⑩層)。ブロック層や炭層等によって細かく分層を行ったが識別が困難で、基本的には単層と考えてもよいであろう。出土遺物も概ね山津Ⅱ期(7世紀中~後半)で時期的に大きな年代差は認められない。また、特筆すべきこととして、須恵器に混じって窓壁の塊が大量に出土したことが挙げられる。いずれも現位置を保っているものではなく、窓壁の破片も辺1~5cm程度の小さな破片が極めて多かった(第1表)。

H-2区では特に明瞭な遺構は検出されていない。当初窓壁が大量に出土し、特に赤茶褐色の砂質



第204図 H-2区 バラス・盛土撤去後等高線図

十層の中央西側では70×45cm、70×40cm大の極めて大きな窯壁が2つ並んで出土した。検出時には窯跡の存在も想定して調査を実施した。しかし調査の結果、この窯壁の大塊は現位置を保っておらず、地山面より10~120cmほど浮いた状況であった。またその他にも窯壁片を多量に検出したものの、拳大程の小さなものばかりで、遺構としての窯体は検出出来なかった。

窯壁片が含まれている埋土からは須恵器が比較的多く検出できたが、埋上そのものは赤く焼けたような赤茶褐色の砂礫・もしくは砂質土で通常の灰原で見られるような黒色炭層の堆積は少なかった。そのため、同層（第205図・⑭~⑯層）は灰原等に見られるような窯からの掻出し行為の結果で堆積したものとは性格を異にしていると考えられた。唯一、調査区南西の隅に黒褐色で炭を多く含む堆積層が見られ（第205図・⑮~⑯層）、これは元来が灰原の一帯であった可能性を指摘することが出来る。

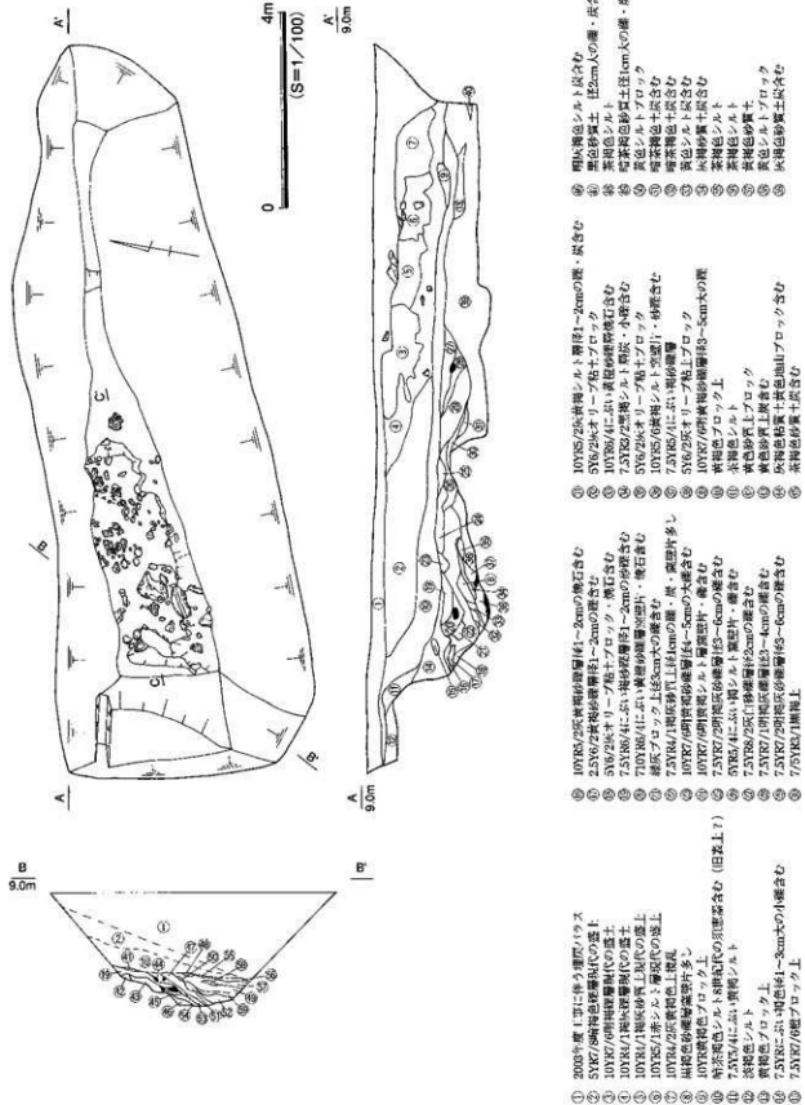
一方、調査区西端では表土直下（G L-10cm）で地山を検出している。この調査区西端から約1.5m東へ向かった地点で急激な落ちが認められ、赤茶褐色層はこの落ちの下に堆積している（第205図・⑭~⑯層）。落ちの落差は2mほどあり、人為的な切り込みも想定したが、明らかに人為的な痕跡を確認することは出来なかった。

赤茶褐色層に窯壁片・須恵器が集中して認められたのは調査区内でも特に西半分で（第205図・⑭~⑯層）、東側は分層が困難な明黄褐色の砂礫層である（第205図・⑬層）。当初、明黄褐色の砂礫層は地山と考えたが同層より須恵器・炭・窯壁などが僅かであるが出土している。とはいっても、上層の堆積状況や、出土遺物の多寡など、調査区西側とは明確な相違が認められた。

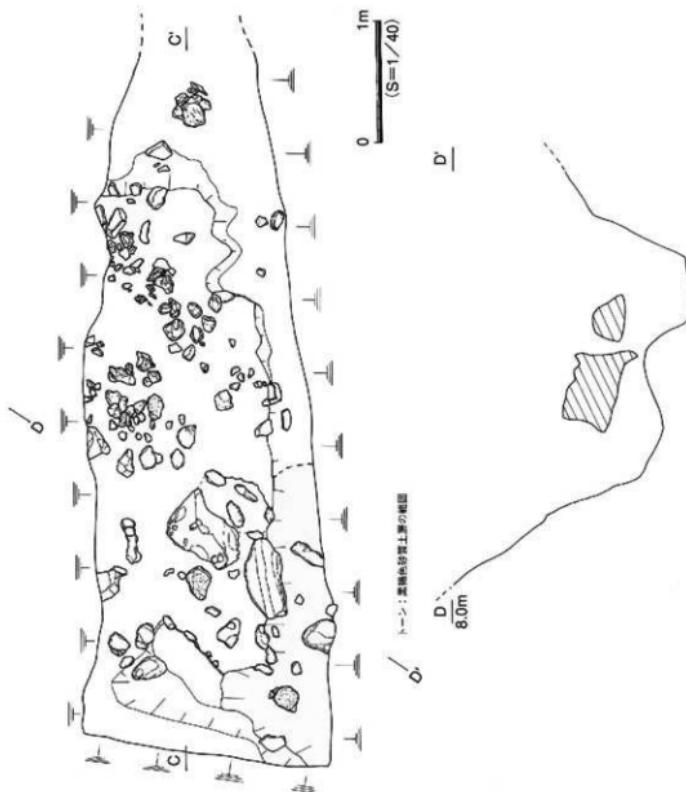
H-2区の出土遺物は以下の通りである。

H-1839~1847は盛土下の暗茶褐色土出土遺物である、同層は第205図の②~⑦層に該当する。

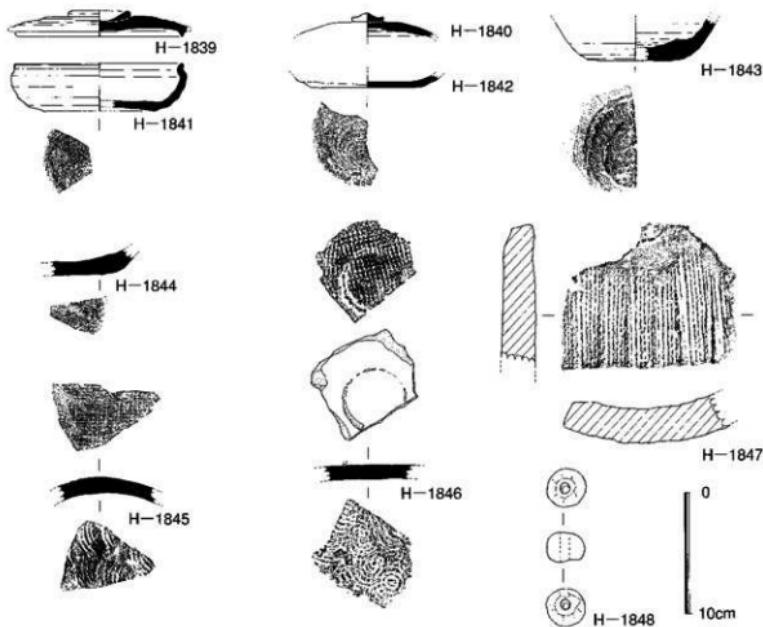
H-1839~1840は蓋である。H-1839は輪状つまみを付したかえりを有する壺Fの蓋で、50%残、（復）口径13.5cm、器高2.1cmを測る。H-1840はつまみ部分の破片で、扁平な擬宝珠状のつまみを付している、外面に被灰する。H-1841は塊Aで底部の切り離しは糸切りである。H-1842・1843は底部片、H-1842の底部切り離しは糸切り、II-1843はヘラ切りでH-1843の底部周辺はT工具によると思われる条痕が残る。H-1844は壺の底部片か、半底の網片で内面にヘラ記号を記してある。H-



第205図 H-2区 平・断面図（断面黒塗は窓壁片）



第206図 H-2区 烟壁片・須恵器出土状況



第207図 H-2区（盛土下）暗茶褐色土出土遺物

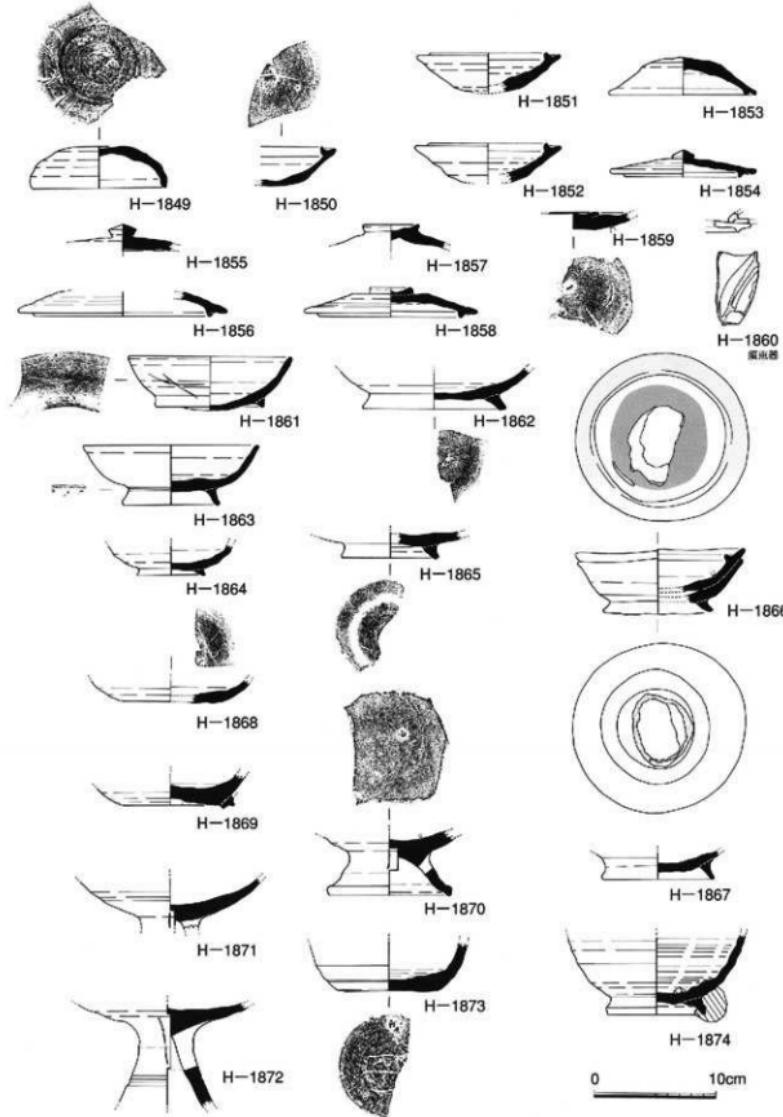
H-1845は窓か、内外タタキ調整でヘラ記号を記す。H-1846は瓦片を転用した置台で、外側に径5cmの小さな円形の剥離痕が残る。H-1847は平瓦、厚さは3.0cmを測る、調整は凸面が織目、凹面はナデである、焼成は古く明黄褐色を呈している。H-1848は十玉の完形品、幅3.2cm、高さ2.5cm、孔径0.8cmを測る、非還元炎焼成で明黄褐色を呈している。

H-1849～1898は明茶褐色出土遺物である、同層は第205図の⑩～⑬層に該当する。

H-1849～1852は坏Hである。H-1849は30%残、（復）口径11.0cm、器高3.4cmの小型の蓋で稜は無段、天井の調整はナデである。H-1850は細片で復元できないが小型の身であろう、内面にヘラ記号を記す。H-1851は25%残、小型の坏Hの身で外面に被灰している。H-1852も（復）口径が9.6cmを測り、H-1851と同じく小型の坏Hの身である。

H-1853は75%残、口径10.0cm、器高3.0cmを測る、天井の調整はケズリで外面に被灰する、かえりのある蓋として実測したが坏Hの身かもしれない。

H-1854～1858は蓋である。H-1854は坏Gの蓋、30%残で（復）口径9.4cm、器高2.2cmを測る、



第208図 H-2区 明茶褐色焼土出土遺物①

トーン底：褐色
トーン面：金色

小さな宝珠つまみを付している。H-1855はつまみ片、小さな宝珠つまみに外面側が被灰している。H-1856はかえり部分の小片で、H-1857は輪状のつまみ片である。H-1858は60%残、口径11.6cm、器高2.4cmを測る、天井には広い幅でケズリが見られる。H-1859は輪状つまみの小片で内面に別の須恵器の剥離痕が残っている。H-1860はかえり部分の微細片で二個体分が溶着している。

H-1861～1867は壺F、又は高台片である。H-1861は25%残、歪みがあり体部外面にX印のヘラ記号を記す。H-1862は高台片、底部調整はナデでヘラ記号を記してある。H-1863は壺F、60%残で底部はヘラ切りでナデ調整、高台は貼り付けであるが貼り付け部分の接点付近に僅かな凹みがある。H-1864は高台片、0.5cm高い低い高台で底部の調整はナデである。H-1865も高台の小片で底部にヘラ記号を記す。H-1866は壺Fの溶着資料で、溶着しているものは歪んでいるが、小さなかえりのようなものが確認できるので壺Fの蓋であろうか、中央部分は欠損（意図的なものかどうか不明）しており、その外側で重ね焼き痕と思われる円形の変色が見られる。H-1867は高台片、底部の調整はケズリで貼り付け高台を付す。

H-1868は無高台の底部にヘラ記号を付し、H-1869は外面にかえりのある蓋？が溶着している。

H-1870～1872は高壺、若しくは脚片である。H-1870は脚高が3.5cmの短い脚で透かしを施している。壺部内面に重ね焼き痕と思われる微かな須恵器の剥離痕が残る。H-1871は高壺の壺部～脚部にかけての破片である。H-1872は長脚二段の高壺で上段が切り込み、下段が方形？透かしである。

H-1873・1874は壺である。H-1873は平底の底部で底面調整はヘラケズリを施し、ヘラ記号を記している。H-1874は壺の底部片で、窓壁片が付着している。

H-1875は壺Cである、口縁部の破片で体部は内外面タタキ調整であるが、体部外面に灰を被っており調整は不明瞭である。H-1876は壺片と思われるが、外面はタタキ痕で内面は方格状の当て具痕が残る。

H-1877は須恵質の土馬である。頭部片で耳とタテガミの表現があるが、目・口等の表現は見られない。H-1878も須恵質で土馬、体部片で腹部に凹みが見られる。

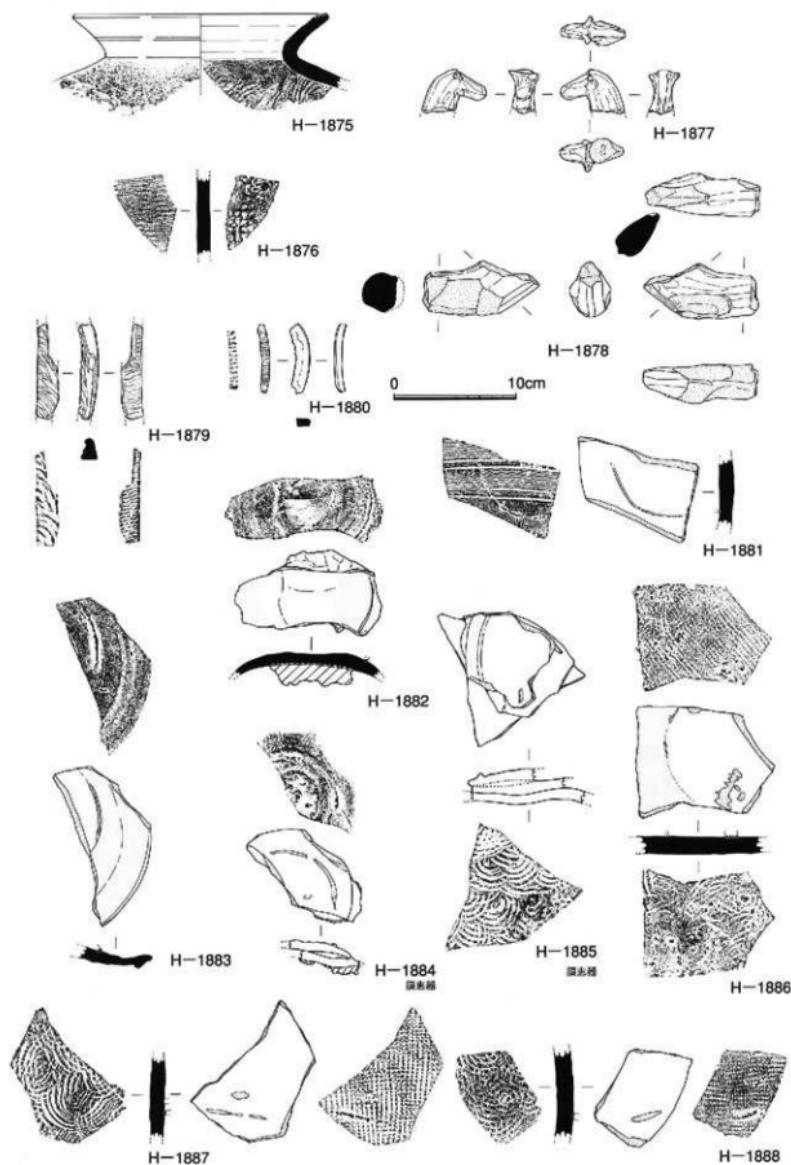
H-1879・1880は壺の切り肩転用の窓道具である。H-1879は長さ7.8cm、幅1.4cmを測り、タタキの痕跡が残る。H-1880は長さ5.6cm、幅1.1cmを測り、工具で切断したような平坦面とタタキ痕と思われる凹凸がある。

H-1881～1897は須恵器片を転用した置台である。H-1881は壺のLI縁部、H-1882は窓壁と天井部片、H-1883はかえりのある蓋片（H-1883は重ね焼き痕か）、H-1884は壺か、H-1885はかえりのある蓋と窓片、H-1886～1895は壺片である、それぞれ円形の須恵器剥離痕や被灰・変色などがあり須恵器片を転用して置台に転用しているものと考えられる。

H-1898は上陣器の壺片である。

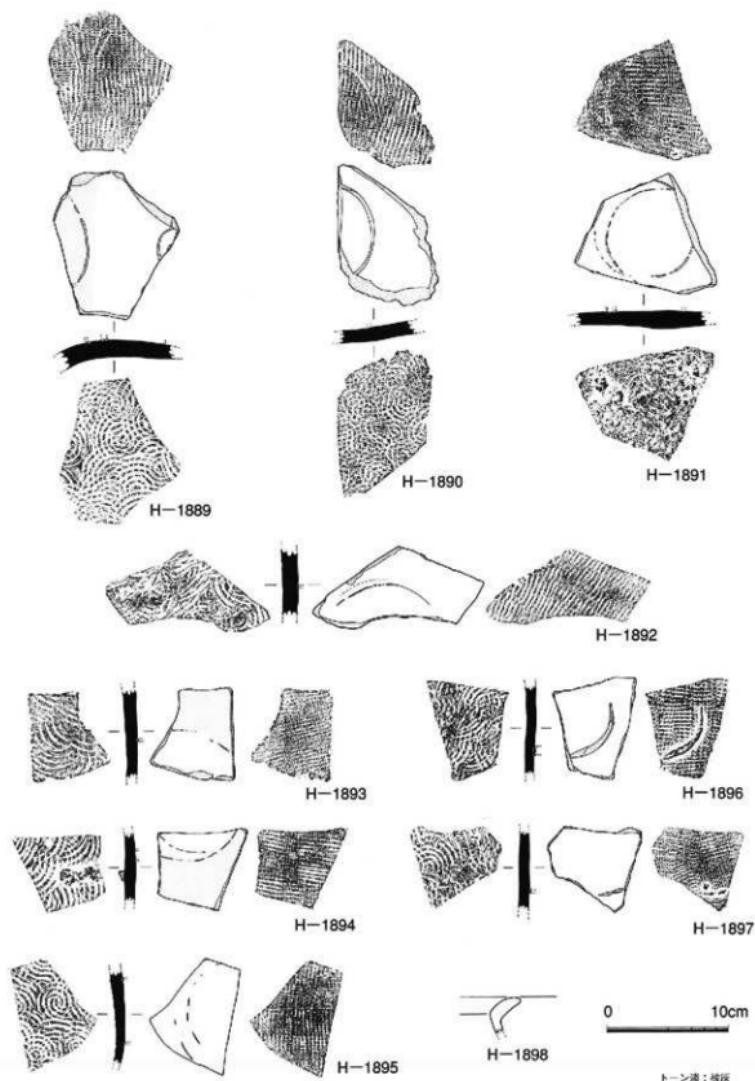
H-1899～1912は黒色（灰原）層出土遺物である、同層は第205図の⑤～⑥層に該当し、元来が灰原の一部であったと考えられる黒色の炭層である。

H-1899～1903は壺Hの蓋である。H-1899は80%残、口径10.8cm、器高3.4cmを測るがやや歪み有り、外面に部分的に釉を被る、天井内面にヘラ記号を記している。H-1900は50%残、（復）口径10.4



第209図 H-2区 明茶褐色焼土遺物②

トーン淡：強灰



第210図 H-2区 明茶褐色焼土出土遺物③

cm、器高4.1cmを測る。H-1901は20%残、天井の調整はナデである。H-1902は20%残、稜の部分に段を持つ。H-1903は大井部片で大井内面にヘラ記号があり、天井外面に別須恵器の剥離痕が残る。

H-1904～1906は坏Hの身である。H-1904は25%残、(復)口径10.0cm、器高3.5cmを測る、外面に灰を被る。H-1905は20%残、外面に部分的に灰を被る。H-1906は50%残、外面に激しく灰を被り、端部外面に別の須恵器の剥離痕が残る、底部内面にヘラ記号を記す。

H-1907・1908は蓋である、小型でかえりを持つ、坏Gの蓋か。H-1907は20%残、輪状つまみにかえりを有し、(復)口径は11.2cmを測る、外面全体に被釉する。H-1908は50%残、口径10.2cmを測り宝珠つまみを付す小型の蓋で、周辺を意図的に欠損しているような打ち欠きが見られる。

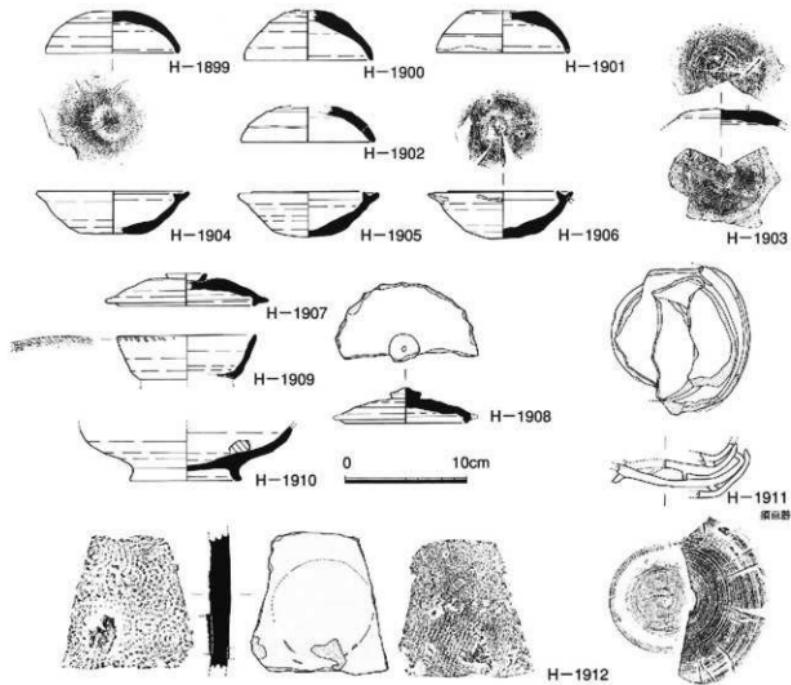
H-1909は坏か、底部以下(高台?)を欠損している、口縁端部には刻目を施す。H-1910は傷みが激しく内外面に被灰する、二次焼成であろう。H-1911は坏Fと塊Aとの重ね焼き資料である、少なくとも四重の重ね焼きが行われている。

H-1912は窯片を転用した置台で外面に径8cm程度の円形の須恵器の剥離痕が残る。

以上、H-2区の出土遺物から考えて、赤茶盛土の下にある、暗茶褐色のシルト層(第205図・⑩層)の上限は山津Ⅲ期(8世紀)代が想定できる。それ以上に新しい遺物は検出されていないので、同層は8世紀代の旧表土であるかもしれない。暗茶褐色の下に見られた赤茶褐色の砂疊・砂質土(第205図・⑪～⑬層)からは大量の窯壁片と須恵器が出土したが、出土遺物からは概ね山津Ⅱ期(7世紀中～後半)で時期的にまとまりが見られよう。灰原の可能性を指摘した調査区南西の黒褐色(炭含む)層(第205図・⑫～⑬層)も、赤茶褐色砂質土の出土遺物の時期と大きな隔たりは認められない。坏Hの割合が多いようなので若干古相であるかもしれない。

遺構・遺物の結果からH-2区の状況は次のように想定することが出来る。H-2区の東側では既に6世紀～7世紀(山津Ⅰ期)の時期に須恵器窯(山津1号窯)が築かれている。この1号窯東側と、それに接したH-2区西側は表土直下すぐには地山面が検出されており、II自然地形を部分的に残しているようである。しかし、H-2区西端より約1.5m東へ向かった地点で急激な落ちが認められ、山津Ⅱ期(7世紀中・後半)に赤茶褐色層と山津Ⅲ期(上限とする)暗茶褐色土層が堆積している。この急激な落ちは落差が2mもあり、人為的か否かは明らかに出来なかったが、出土遺物で見る限り7世紀以前には既に落ち込んでいたと考えられる。

この落ちに山津Ⅱ期(7世紀後半)頃に大量の窯壁片と須恵器が廃棄されているが、調査区南西の黒褐色(炭含む)層出土遺物など、部分的に灰原が存在した可能性はあるものの、遺物を大量に含んだ赤茶褐色層には炭層の堆積が少なく、窯の掘き出し等による(灰原状の)堆積とは性格を異にしているような状況である。出土遺物を見る限り大量の窯壁片や溶着資料、岡台のような窯道具関連の遺物から、H-2区付近に窯が存在していたことは疑い得ない。これまでの調査ではH-2区西側のH区に山津1号窯(山津Ⅰ期・6世紀末～7世紀初頭)、北西で立会調査中に同2号窯(山津Ⅱ期始め・7世紀中頃)、と同3号窯(山津Ⅲ期・8世紀中頃)、南東のJ区で同4号窯(山津Ⅲa期・8世紀初頭)が調査されているが、H-2区で見られた7世紀後半代の窯が現在では確認されておらず、恐らくH-2区北側付近にこれまで調査されたものとは別の窯が存在したものと推定される。



第211図 H-2区 黒色（灰原）層出土遺物

特にH-2区の調査では赤く焼けたような赤茶褐色の砂質土が大量の窯壁片と共に出土し、かつ、須恵器の年代幅が比較的山津Ⅱ期（7世紀中・後半）でまとまりがあるため、H-2区で検出された大量の窯壁片は、付近にあった7世紀後半の窯を人為的に破壊して、それが破棄されたものではないであろうか。

H-2区南東にあるJ区の山津4号窯では、地層的にみて窯の地すべりの状況を示していた。当初、H-2区でもその可能性を考えたが、H-2区では拳大（1kg未満）の極めて小さな窯壁片が多く、地すべりというよりは、人為的に碎かれた可能性が高いと考えている。一方、近接する山津1号窯付近においては窯の廃絶後にその一部が破壊され、それ上面に7世紀後半の土坑状の堆積（S H113）や、7～8世紀に及ぶ新しい灰原の堆積も認められた。このように、H区の周辺は極めて狭い範囲にて長期間にわたって窯が築かれ続けたため、廃絶した窯を破壊するなどの行為が繰り返されたと考えられる。H-2区における窯壁片の出土は、そういう人為的な活動が背後にあるのではないだろうか。

参考までに、H-2区で出土した窯壁片の重量・総量を記しておく。

窯壁破片重量(kg)	破片数(個)	重量(kg)	%
0.01~0.10	1379	56.89	26.62
0.11~0.21	256	37.35	17.48
0.21~0.30	82	19.51	9.13
0.31~0.40	34	12.26	5.74
0.41~0.50	23	10.47	4.90
0.51~0.60	11	6.10	2.85
0.61~0.70	5	3.19	1.49
0.71~0.80	10	7.59	3.55
0.81~0.90	2	1.69	0.79
0.91~1.00	1	0.93	0.44
1.01~1.10	5	5.36	2.51
1.21~1.30	2	2.49	1.17
1.31~1.40	4	5.49	2.57
1.41~1.50	1	1.46	0.68
1.51~1.60	3	4.70	2.20
1.61~1.70	2	3.33	1.56
1.81~1.90	1	1.87	0.88
1.91~2.00	1	1.96	0.92
2.01~2.10	1	2.09	0.98
2.21~2.30	3	6.84	3.20
2.81~2.90	1	2.82	1.32
3.21~3.30	1	3.24	1.52
7.00~9.00	2	16.08	7.52
合計	1830(個体)	213.71(kg)	100(%)

第1表 H-2区 窯壁片重量表

I区 遺構

(廣瀬貴子)

I区はH区の南西の斜面に位置し、調査前は三段の烟と水田であった。

耕作土を掘削すると地山まで打ち込まれた木杭が數本検出され、この木杭は昭和30年代頃の上留めの杭であることが分かった。耕作土掘削後、上から一段目と二段目の烟をI-1区、三段日の烟をI-2区、下の水田部分をI-3区として調査を行った(第212図)。

I-1区

I-1区は表上以下地山までが耕作土のみで、遺構は検出されなかった。地山(暗緑灰シルト)の直上から糸切り痕のある無高台の坏や、輪状つまみの蓋などが出土している。

I-2区

東側のサブトレ付近までは地山面も平坦で、ほとんどが耕作土や床土の堆積であった。サブトレの土層堆積状況を見ると、地山は南に向って傾斜しており、土器が多く含む層が堆積していた。地すべり(地くずれ)の痕跡も見られた。

I-2区からは土坑四基(I-104・106・107・110)、溝状遺構四本(I-102・103・105・109)

を検出した。土坑は地山面での遺構である。I-2区における各遺構の概要は以下の通りである（第213図）。

S I 102

北西から南東に流れる溝である。甕の口縁、無高台や高台付きの壺などが出土している。

S I 103

北西から南東に流れる溝で、東側トレンチ付近では人為的に盛土をして溝の側壁を作っていた。埋土は明黄褐色砂疊層で、高台付壺、長頸壺などの細片が出土している。

S I 104

中央トレンチ付近の浅い落ち込みで埋土は明黄褐色砂疊層で、須恵器の甕片が出土している。

S I 105

残存長9.5m、幅0.8m～1.6m、深さ0.1～0.6mの北から南に流れる溝である。溝の西側側面には土留めの為と思われる石が置かれていた。石の大きさは15～45cm大で、中には60～70cm大の石も数個みられた。埋土からは高台付壺や糸切り痕のある無高台の壺、内側にかえりのある蓋などが出土し、暗緑灰色砂疊層からは瓦や塊も出土している。

堆積状況からこの溝は掘り直されたものと思われたが、掘削した限りでは、不整形で凹凸のある自然地形の上に、堆積した上を掘り込んで石を置き並べて溝にしたものと考えられる。

S I 106・107

I-2区西端の上塙でトレンチの掘削によって一部しか確認できなかった。埋土は暗緑灰色シルトと明黄白色土の混合土で、長頸壺、横瓶の口縁などが出土地してい。

S I 109

S I 102・S I 103の遺構より下から検出した、北西から南東に流れる溝である。埋土は灰色砂疊層で甕の口縁、高台付き壺、平底壺などが出土している。

S I 110

東側サブトレンチ西側の上坑である。埋土は暗黄褐色砂疊層で8世紀後半の高台付壺や無高台の壺などが出土している。

I-3区

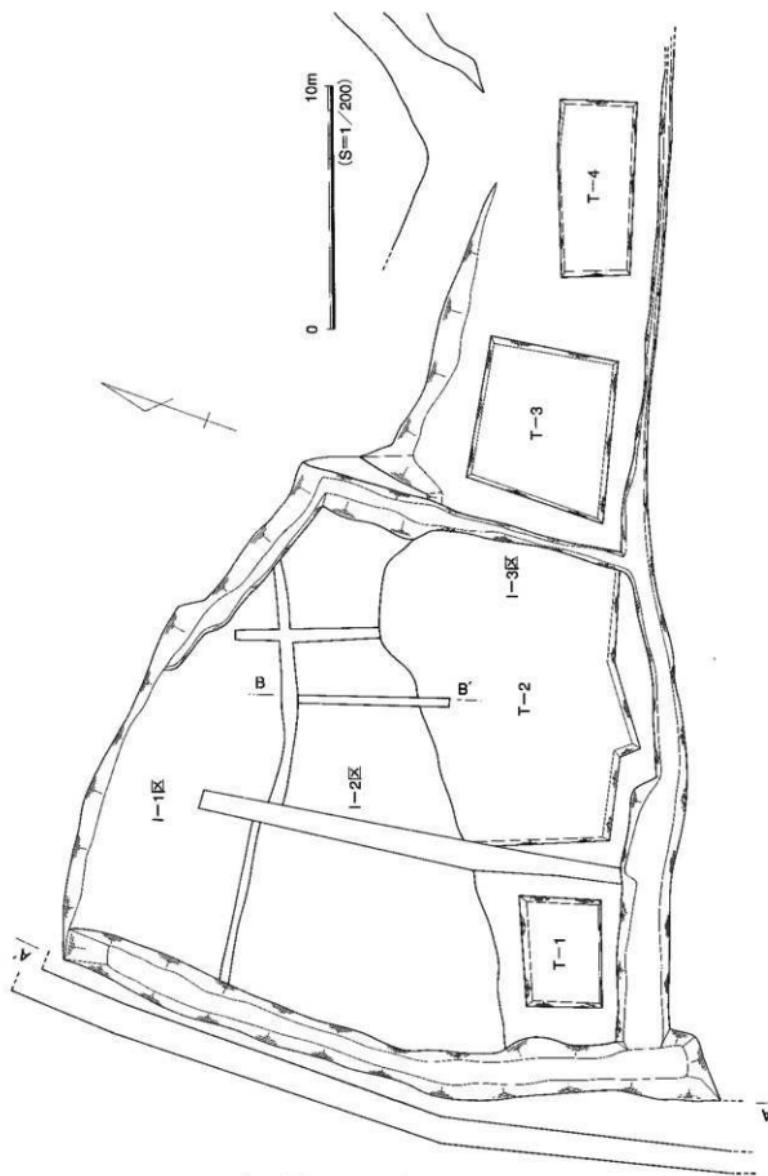
I-3区は重機で耕作土を除去し、西からT-1、T-2、T-3、T-4として調査を行った（第212図）。その結果遺構は検出されなかった。各トレンチの概要は以下の通り。

T-1

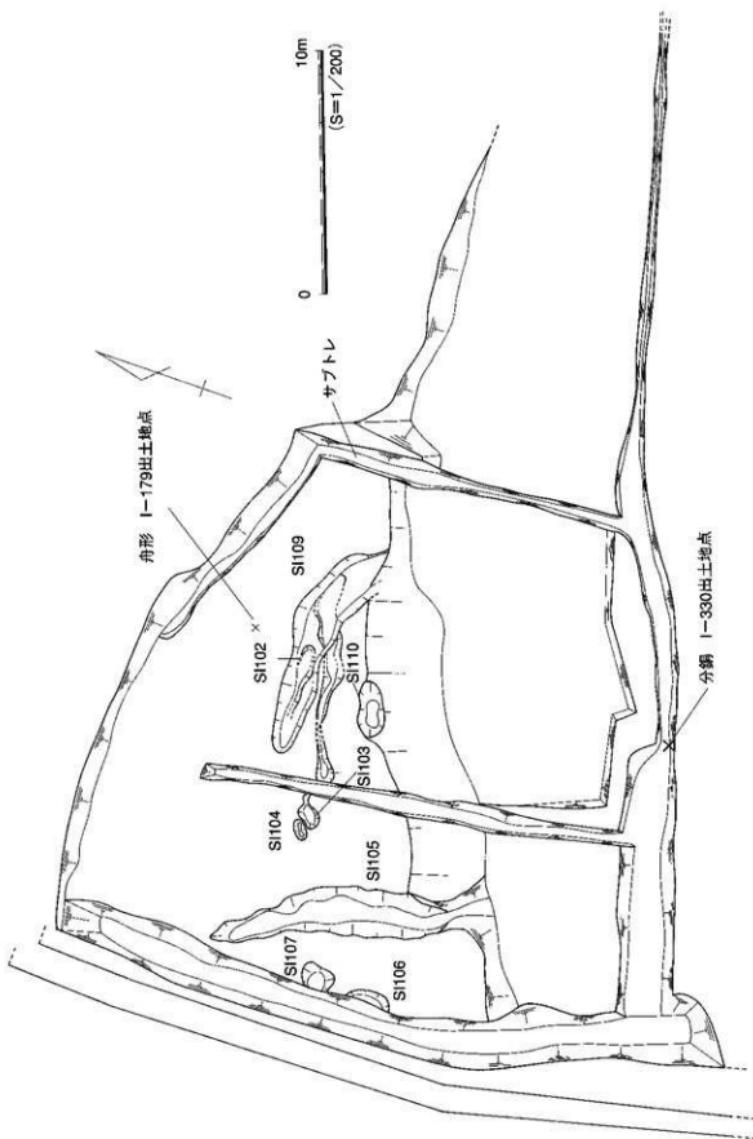
耕作土以下には茶褐色粘質土と灰色粘質土が堆積し、灰色粘質土には地山土（暗緑灰色シルト）や炭化物などが混入しており搅乱土と思われる。トレンチ北側の地山直上の上層から高台付壺や輪状つまりの蓋など8世紀代の土器の細片や6世紀末～7世紀の壺蓋、壺身も出土している。

T-2

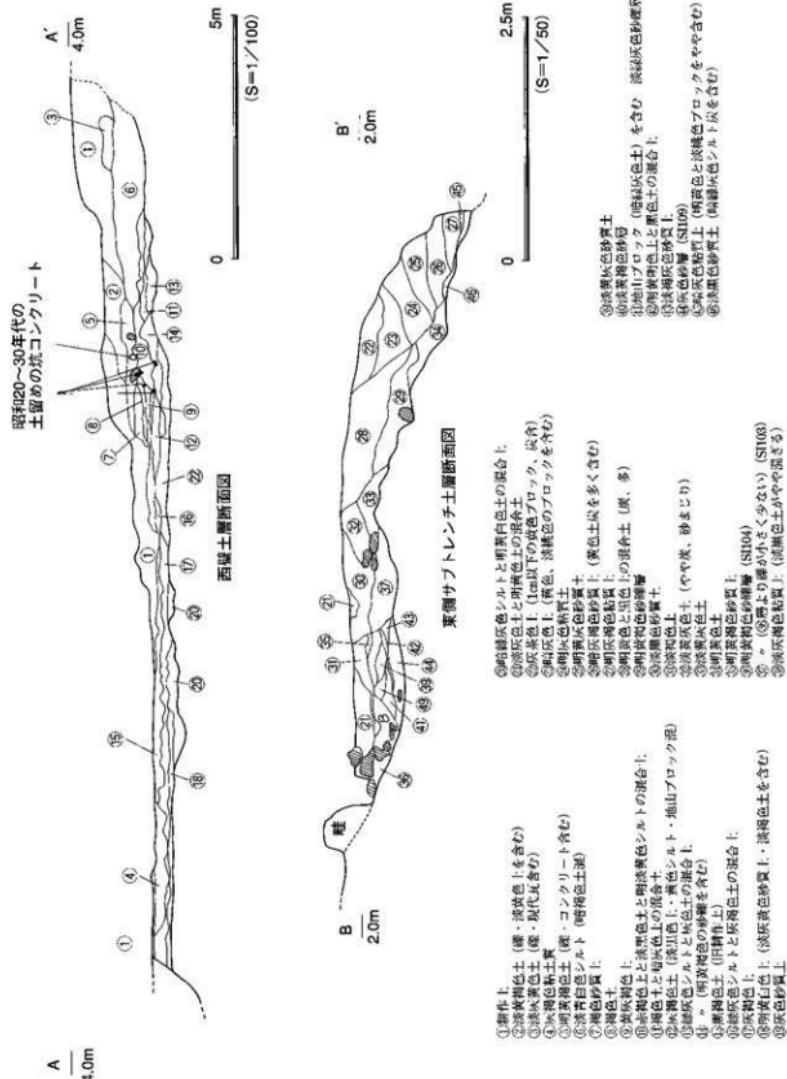
T-1と同じような土層の堆積であるが、灰色粘質土の下に暗桃色、暗黄色の粘質土を多く含む黒色土と炭化物を多く含む黒色土が堆積していた。T-1と同じ時期の遺物と共に陶磁器片も出土している。



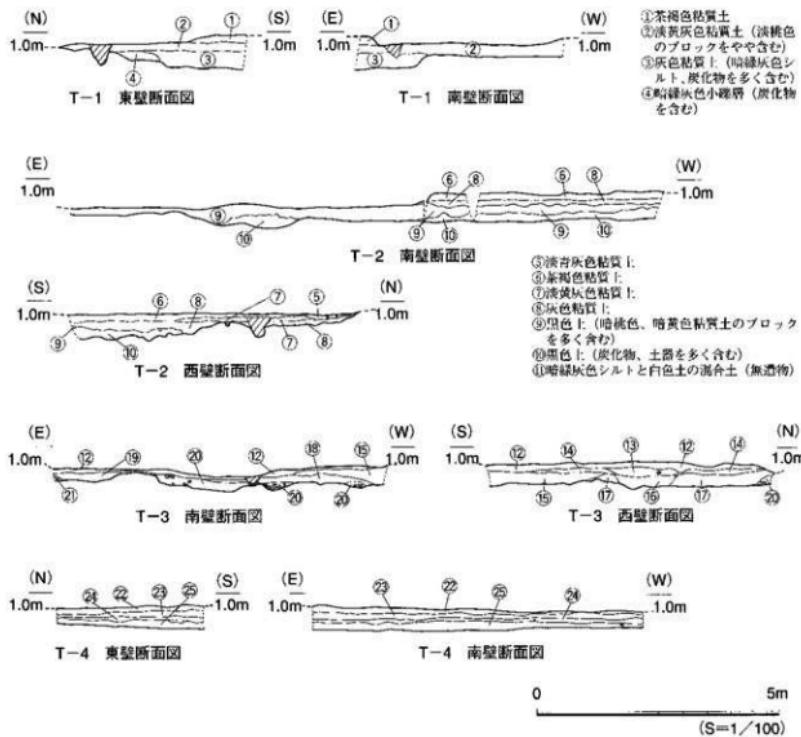
第212図 1区 調査区・トレンチ位置区



第213図 I 区 遺構配置図



第214図 I区 土層断面図



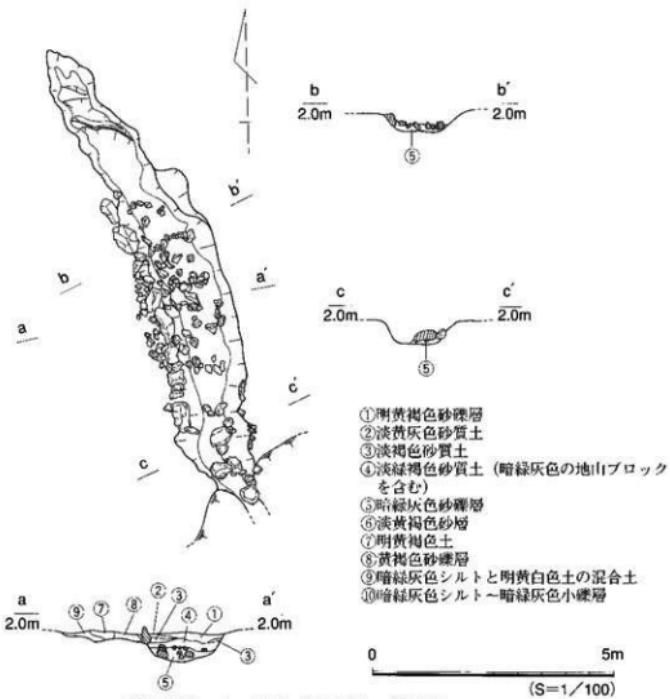
第215図 1-3区 トレンチ土層断面図

T-3

T-3には砂疊層の堆積があり、北から南に流れる自然流路の堆積であった。他のトレンチと同じ時期の遺物が出土している。

T-4

T-4 でも地山上に砂礫層の堆積が認められた。このトレーナーからも他のトレーナーと同じ時期の遺物が出土しているが、茶褐色粘質土からは陶棺片（I-255）が出土している。この陶棺片は15×12 cm、厚さ3.2cmで幅1.2cm、高さ0.7cm～0.9cmの穴窓が施されていた。



第216図 I-2区 SI105平・断面図

以上、I区の調査結果では遺構として、溝状遺構四本、土坑四基を検出した。土坑は人為的なものかどうか明確に判断できなかった。何度も精査を行ったが、溝状遺構の周辺にピットは確認できなかつた。

出土遺物は6世紀末～8世紀後半にかけてであり、8世紀代のもののが多かった。遺物の中には溶着したもの、変形したものも多くまた、窯体（窯跡）も數多く出土していることから、今年度調査された山津1～3号窯を始めとしてI区周辺には多くの窯が存在していたものと思われる。

出土遺物の中には窯関係のものや、分銅や獸脚など今までの周辺の遺跡調査であまり発見されなかった遺物もあり大変興味深く注目される。

I区 遺物

(藤原 哲)

I-1～61はI-1区出土遺物で、全て包含層から出土した遺物である。I-1～7は蓋である。I-1は25%残、(復)口径12.6cm、高さ4.3cmを測る、坏Hの蓋で稜には僅かに段がある、天井部分

の調整はナデ、外面の焼成がやや軟質で灰白色を呈している。I-2は輪状つまみを付した蓋の天井片で、ヘラ記号と思われる沈線が微かに見られる。I-4も輪状つまみを付した蓋の大井片で、つまみ内部にX印のヘラ記号を記す、また外面に白灰を被る。I-5は40%残、端部が僅かに突出する蓋で大型の宝珠つまみを付す、(復)口径14.1cm、器高3.4cmを測る、外面の調整はナデで内面には付着物が多く調整不明。I-6は細片、端部が僅かに屈曲する蓋で内面に激しい白灰を被っている、つまみ部分は欠損するが大型の宝珠つまみを付していたと考えられる。I-7は20%残、(復)口径は19.2cmを測る大型の蓋である。

I-8~12は塊である。I-8は90%残、口径9.8cm、器高3.6cmを測る、底部調整はナデである、口縁端部が内凹するので塊として実測したが、坏Gの身、又は坏Hの蓋である可能性も高い。I-9は細片で口縁部が内凹する、坏Hの蓋かもしれない。I-10は口縁部がくびれる塊Aである、15%残でやや扁平な形態、底部の切り離しは糸切りか。I-11は塊A、底部の調整は糸切り→ナデで、外面下半に黄灰を被る。I-12は20%残の塊Aである、口縁部がくびれる、底部の調整はナデである。

I-13・16は重ね焼き資料である。I-13は皿と坏?との重ね焼きの小片で、復径は困難である。I-16は無高台の皿(皿A・C)の重ね焼き資料で、少なくとも二重の皿が重なっている。

I-14は高坏の脚である。15%残で三方からの透かしか。I-15は皿C、残存部位の底部はケズっている、内面に別の須恵器の剥離痕が残る。

I-17~20は高台付きの皿である。I-17は皿D、25%残で底部の調整はナデである。I-18は皿F、20%残、底部の調整はナデである。I-19は皿B、破片で歪みが生じていると思われる、底部の切り離しは回転糸切りである。I-20は皿B、細片であるが底部に糸切り痕が残る。

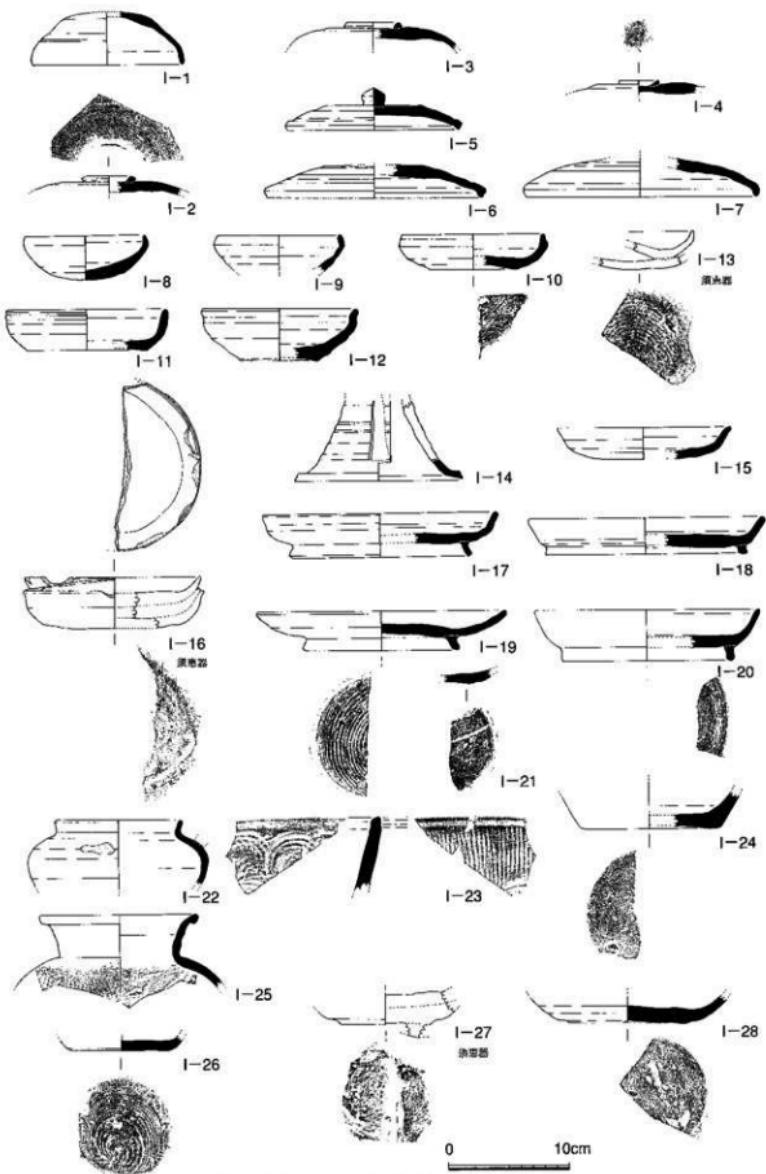
I-22・23・25は壺・鉢・甕類、何れも細片で全形は不明である。I-22は壺B、肩部に別の須恵器の剥離痕があり、同じ肩部に釉を被る。I-23は鉢、又は甕か、内外面の調整はタタキで、微細片のため全形は不明。I-25は甕か、又は壺の口縁部で、口縁端部に面を持つ。

I-21・24・26~28は底部片で、壺・坏などの底部に該当すると考えられる。I-21は底部片で内面にヘラ記号を記している。I-24の底部の切り離しは糸切りで、I-26は底部の切り離しが回転糸切りの底部片である。I-27は溶着資料で、糸切りを残す底部片に別の須恵器片が溶着している。I-28は(復)底径9.6cmを測る、やや大型の底部である。

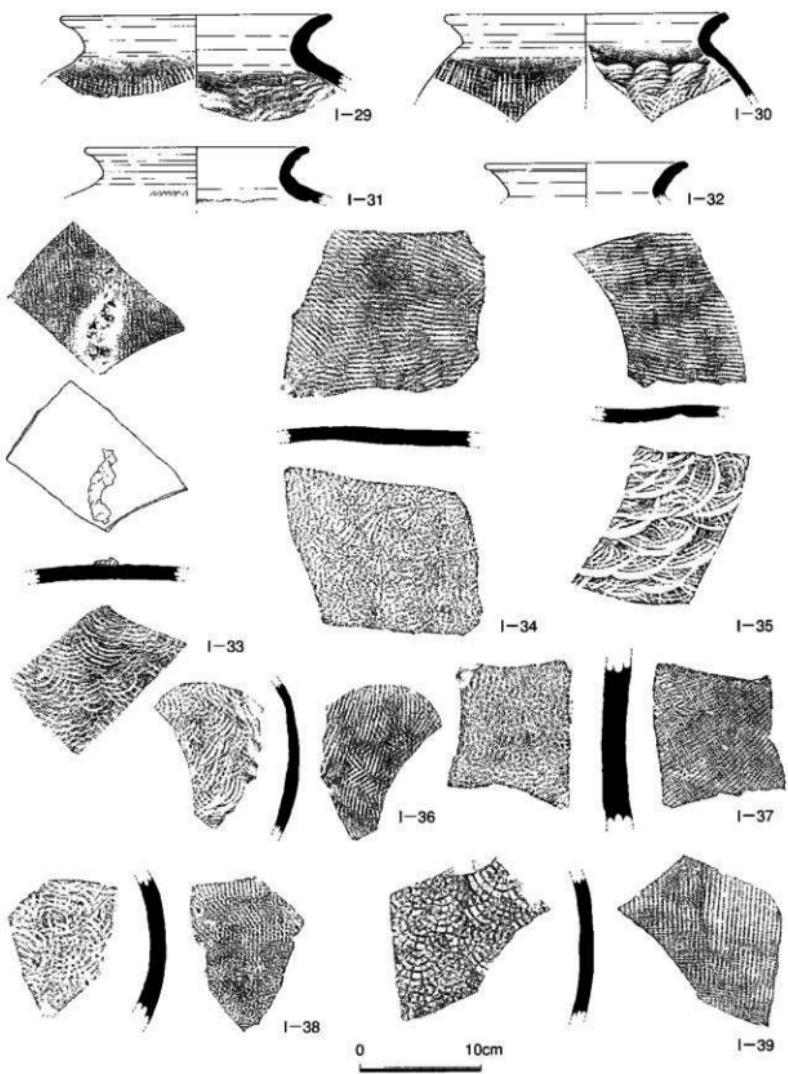
I-29~39は甕で何れも細片である。I-29は甕Cで体部の内外面調整はタタキ。I-30も内外面がタタキ調整の甕Cである。I-31・32は微細片の甕の口縁部である。I-33~39は甕片で、同心円文、青海波文、車輪文など各種の当て具痕が見られる。

I-40は甕脚、I-41は甕同士が溶着した資料である。I-42は平瓦で両面に布目痕を残す。I-43は陶器の擂鉢である、明茶褐色を呈しており、重ね焼きと思われる別の陶器の剥離痕が残る。I-44は青磁の高台片である。

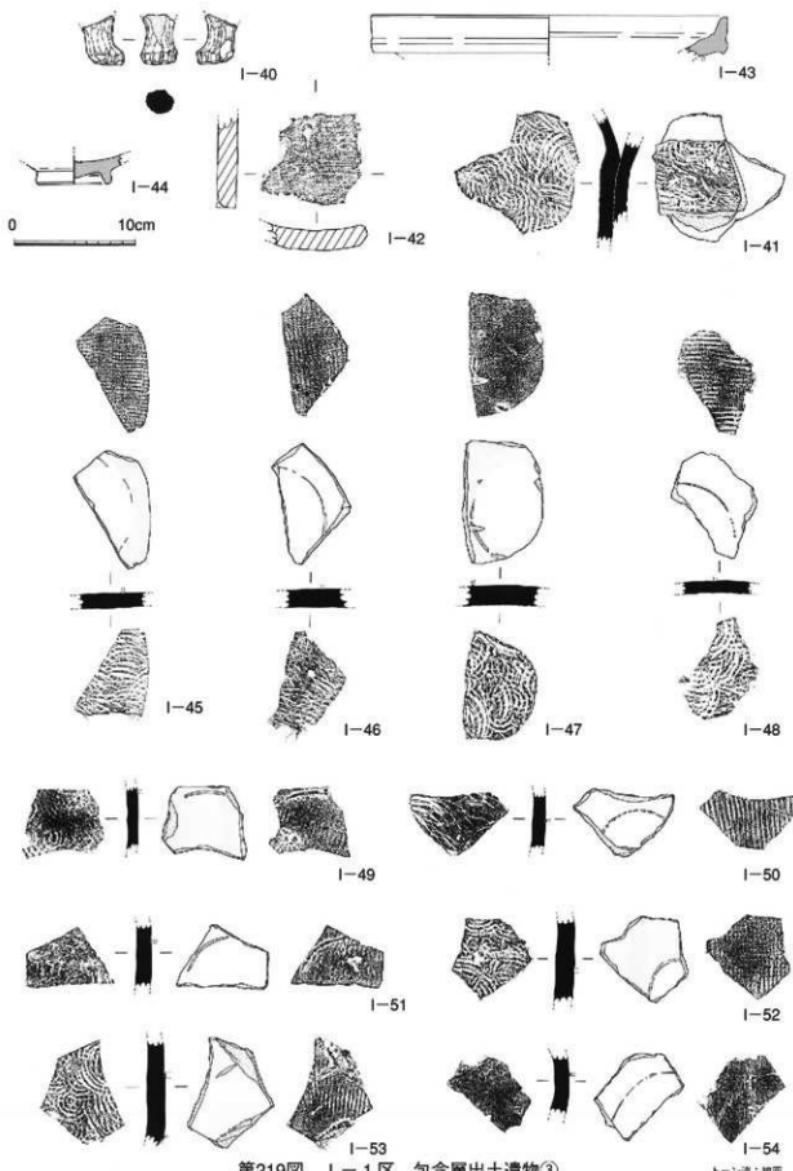
I-45~61は須恵器片を転用した置台で、何れも内外面にタタキ痕が残っているので、甕片を転用していると考えられる。最も多いのは転用の痕が別の須恵器の円形剥離痕や被灰であり、I-56を見ると剥離しているものは径8cm程度で、この剥離痕が二重に切り合っているもの(I-55)もある。



第217図 I-1区 包含層出土遺物①

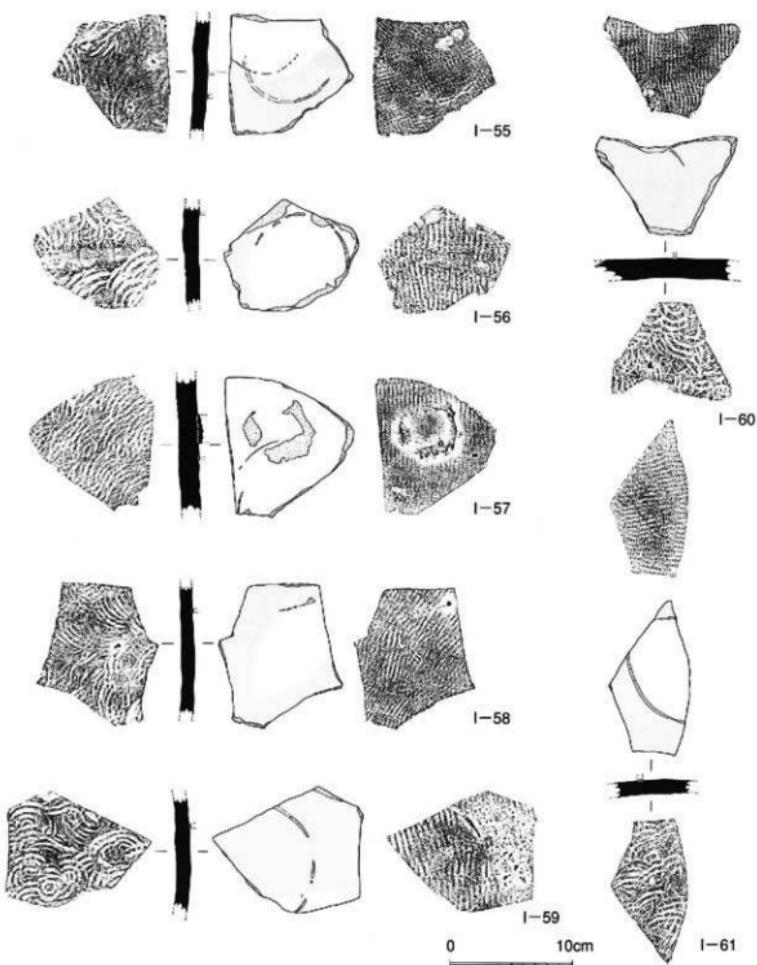


第218図 I-1区 包含層出土遺物②



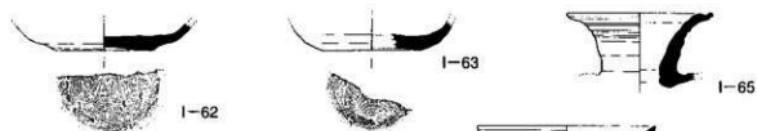
第219図 I-1区 包含層出土遺物③

トーン淡：複灰



トーン淡：被灰

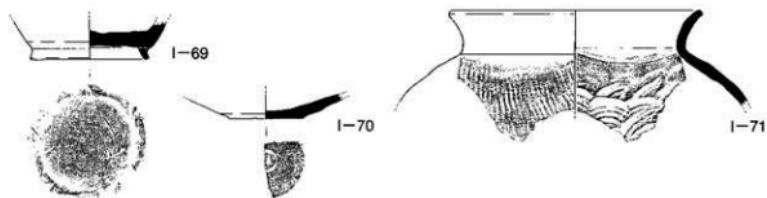
第220図 I-1区 包含層出土遺物④



I-2区・SI102出土遺物



I-2区・SI106出土遺物



I-2区・SI109出土遺物



I-2区・SI110出土遺物

第221図 I区 遺構出土遺物①

I-62~220はI-2区出土遺物である。このうち、I-62~91がI-2区の遺構出土遺物で、I-92~220がI-2区・包含層出土遺物である。

I-62~66はS I 102出土遺物である。S I 102はI-2区の東部に位置する溝状遺構で、埋土は明黄褐色砂礫層、北西から南東に流れていたと考えられる。I-62は壊か、底部の破片で糸切りの痕跡を残す。I-63は壊の底部片、底部の切り離しは回転糸切りである。I-64は皿F、20%残で（復）口径18.4cm、器高3.9cmを測る、底部の調整はナデ。I-65は蓋の口縁部、やや歪みがあるので全形は不明であるが壺M類か。I-68は甕Bの細片で、体部は内外面にタタキ調整を残す。

I-67~68はS I 106出土遺物である。S I 106はI-2区西端の十坑状遺構である。I-67は長頸壺（壺K）の頸部で、内外面に被灰している、斜め方向に向けてナデ、又はシボリ日？と思われる痕跡が残る。I-68は細片である、横瓶か、タタキの当て具痕は車輪文と思われる格子状のものである。

I-69~71はS I 109出土遺物である。S I 109はS I 102・S I 103の完掘後に検出された、北西から南東に流れる溝である。I-69は高台片で、底部の調整は糸切り→ナデである。I-70は壊か、底部の細片で全形は不明である、焼成がやや甘く底部に円弧状の痕跡が見られる。I-71は甕Cで、体部の内外面はタタキ調整、口縁内面に黄色灰を被る。

I-72・73はS I 110出土遺物である。S I 110は東側サブトレーンチ西側の土坑で、埋土は暗黄褐色砂礫層であった。I-72は皿Cである、50%残で口径14.0cm、器高2.2cmを測る、底部調整は回転糸切り→ナデで、粘土紐の接合痕が観察出来る。I-73は40%残の皿Cで口縁外側の屈曲が極めて強い、底部の切り離しは回転糸切りで、糸切りの周辺には若干、粘土が盛り上がっている。

I-74~91はS I 105出土遺物である。S I 105はI-2区西部に位置する溝状の遺構で、残存長9.5m、幅0.8m~1.6m、深さ0.1~0.6mを測る。溝の西側側面には上留めのためと思われる石が並べられていた。I-74~76は蓋である。I-74は宝珠つまみを付した天井部分の細片で、つまみ径は2.0cm、つまみ高は1.0cmを測る。I-75は端部が僅かに屈曲する蓋片である、つまみ部分は欠損しているため不明。I-76も蓋片、外面に激しく黄灰が被灰している、天井部は平坦であるが欠損しているためつまみの有無は定かではない。

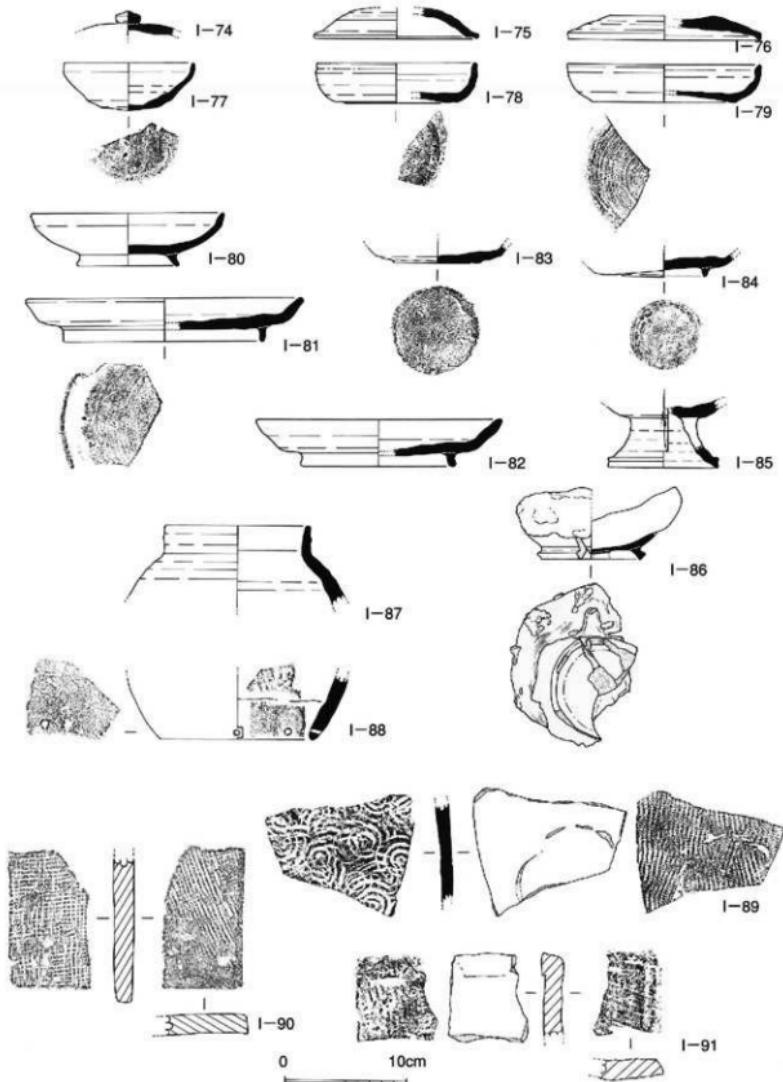
I-77は壊か、30%残で底部の調整はナデでヘラ記号を記す、壊Hの蓋、又は壊Gの身であるかもしない。

I-78・79は壊Aである。I-78は細片、底部の切り離しは糸切りで、内面に被灰している。I-79は30%残、やや歪むか、底部は糸切りによって切り離されている。

I-80は壊Fである、30%残で（復）口径15.8cm、器高4.3cm、高台径8.4cmを測る、底部の切り離しは静止糸切り→ナデである。

I-81・82は皿Dである。I-81は25%残で歪みか、底部の調整は糸切り→ナデで、内面に白灰を被っている、I-82は25%残、（復）口径20.2cm、高台径12.8cm、器高3.9cmを測る、底部の調整はナデである。

I-83・84は底部片で器種は壊か。I-83は切り離しの糸切り痕が残り、切り離し部分周辺が僅かに盛り上がっている。I-84は高台を付した底部片で歪みが強い、高台径7.0cmを測る、底部の切り離



I-2区・SI105出土遺物
第222図 I区 遺構出土遺物②

トーン塗：地灰

しは糸切り→ナデで、内面に別の須恵器片との剥離痕と思われる箇所が残っている。

I-85は高環の脚片、残存部分の觀察では一段二方向の切り込みであったと考えられる、(復) 底径は9.0cmで脚部は4.0cmと低いため、低脚の环・塊類であったかもしれない。

I-86は二次焼成を受けた高台片で、高台と大きな石、又は窯壠片とが溶着している、环は二次焼成で傷みが激しく、全面に被灰している、底部の調整は不明瞭(ナデか?)、二次焼成を受けており「粘土塊焼台」と呼称されているものと同様な使用方法が想定される。

I-87は帯、微細片なため全形は不明瞭である。I-88は瓶、微細片であるが、底部に瓶の穿孔と思われる小孔が見られる。

I-89は壺片を転用した置台で、壺片の外側(平行タタキ痕部分)に円形の別須恵器の剥離痕が残っている。

I-90は熨斗瓦か、残存長軸12.0cm、残存短軸6.9cm、厚み1.6cmを測り焼成は須恵質である。内外面はタタキ調整で製作されており、実測図の下端と右端とは一直線的な平坦面が残存している、図の上・左部分は欠損している、熨斗瓦もしくは須恵質の壺であろう。

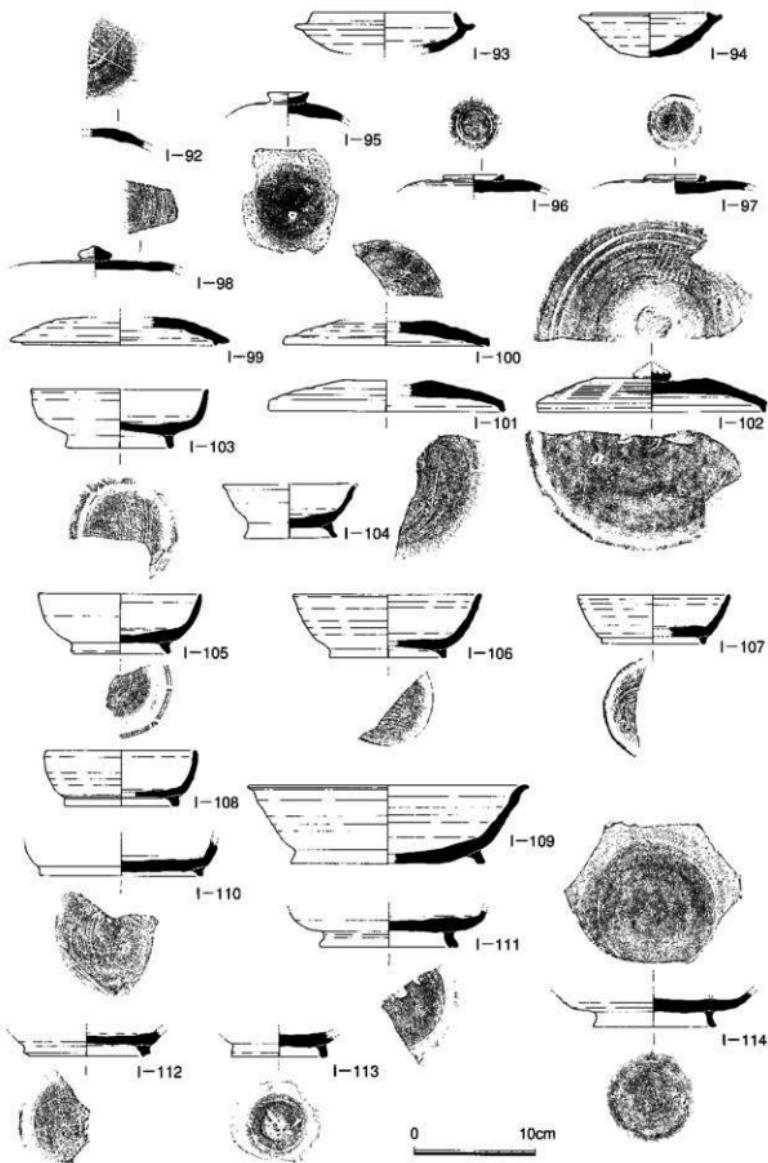
I-91は平瓦で凹面に布目を残す。

I-92~220はI-2区の包含層出土遺物である。I-92~94は环Hである。I-92は蓋片であろう、外側にはX印のヘラ記号を記している。I-93は・94は环Hの身で、I-93は15%残、外側に被灰する。I-94は30%残、底部の調整はナデで、外側に被灰している。

I-95~102は蓋である。I-95は輪状つまみを付した天井片、つまみ径は3.4cmと小型で、天井内面に別の須恵器片の剥離痕が残る。I-96は輪状つまみ片、切り離しは糸切り→ナデで、つまみ内に微かに糸切り痕が残っている。I-97もつまみ部分の細片である、つまみ内にX印のヘラ記号を記している。I-98は宝珠つまみを付した天井片である、天井部に円弧状の沈線が巡る。I-99はかえりを有する蓋の破片、つまみ部分は欠損のため不明である。I-100は30%残、天井部分は平坦で円弧状の沈線を施す、つまみ部分は欠損のため不明である。I-101は盖部が僅かに屈曲する破片で30%残、(復) 口径は19.6cmを測る大型品である、外側にヘラ記号を記す、つまみ部分は欠損のため不明。I-102は50%残、(復) 口径18.7cm、器高3.3cmを測る大型の蓋、つまみは径3.0cmの大きな宝珠形であるが一部欠損している、タタキ痕?と思われる痕跡が見られる。

I-103~109は高台付きの环である。I-103は环Fである、60%残で底部の調整は糸切り→ナデか。I-104は40%残、残存状態の良い高台部分の径は4.3cmを測る((復) 口径は7.7cm)、底部の調整はナデである。I-105は环F、底部の調整はナデでヘラ記号を施している。I-106も环F、50%残で高台の高さ0.7cmと低い、底部の調整は静止糸切り→ナデである。I-107は环Fか、环Bとしても良いほど体部が直線的に伸びる环で、体部外側にヘラ記号を記す、底部の調整は糸切り→ナデである。I-109は环Dである、25%残で(復) 口径は23.2cm、器高6.5cmを測る大型品で口縁端部が強く外方に屈曲している、底部の調整はナデである。

I-110~114は高台部分の破片である。それぞれの底部の切り離しと調整は、I-110が回転糸切りで、糸切り後にX印のヘラ記号を記している。I-111は糸切り→ナデ調整である、I-112はナ



第223図 I-2区 包含層出土遺物①

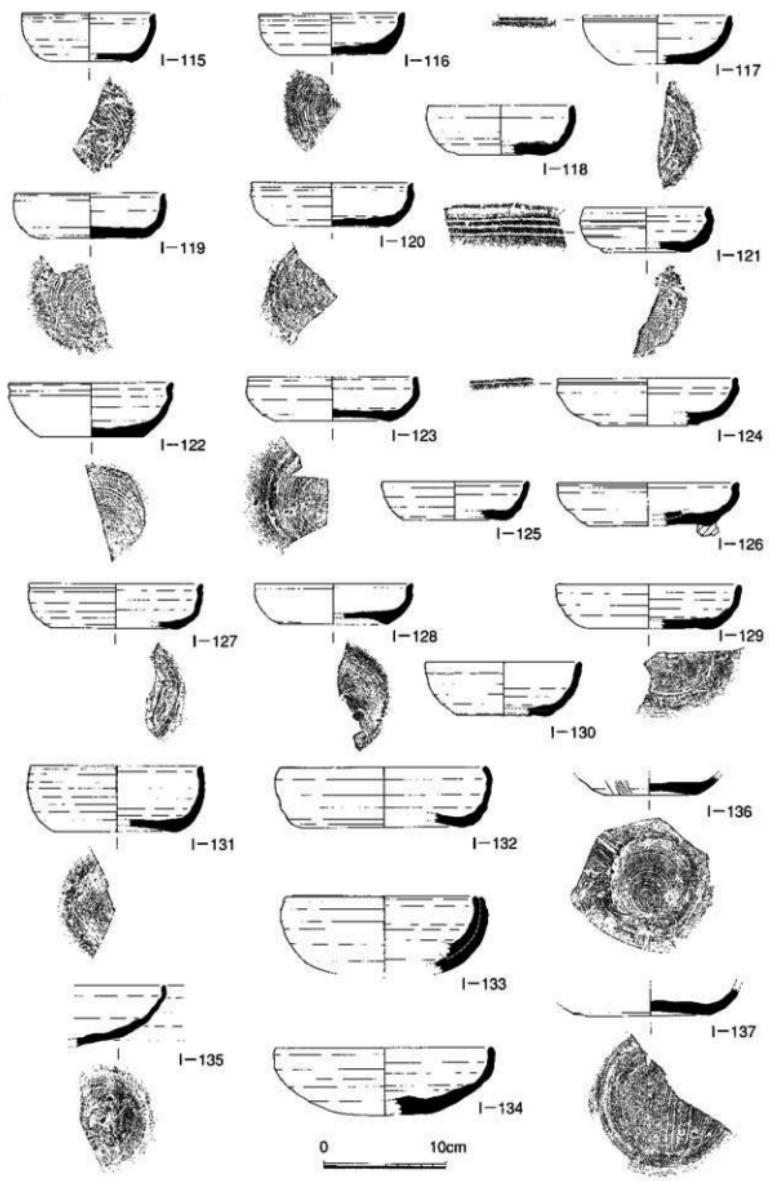
デ？ 竹答文と思われる円形の痕跡が残る。I-113はナデで、底部にヘラ記号を施す。I-114はナデ調整、内面に重ね焼きの痕跡と思われる円形の変色が見られる。

I-115～137は塊である。I-115～130が塊Aで、I-131～134が大型の塊B、I-136・137は塊と思われる底部片である。I-115は40%残、口縁端部がくびれる塊で（復）口径は10.9cm、器高3.9cmを測る、底部の切り離しは回転糸切りである。I-116は20%残、底部の調整は糸切り→ナデか。I-117は30%残、底部調整はケズリ？で、口縁端部の外側に沈線を入れて段を作っている。I-118は15%残、口縁外側はほぼ真っ直ぐで、内面に白灰と窓粒とが厚く付着している。I-119は口縁端部が僅かにくびれる、底部の切り離しは回転糸切りで、その周辺をナデしている。I-120は25%残、底部の切り離しは糸切りで工具痕？と思われる痕跡が見られる。I-121は30%残、底部の切り離しは糸切りで、切り離し周辺部の粘土が盛り上がっている、体部にやや太い沈線を二条（静止状態？）施している、口縁端部は僅かにくびれている。I-122は30%残、底部の切り離しは回転糸切りで、体部内面のナデ痕が明瞭に残る。I-123は30%残、底部の切り離しは糸切りで、底部の縁辺と中央で工具痕と思われる条痕が残る。I-124は20%残、底部の最終調整はナデで、口縁端部には沈線を一条施して段を作っている。I-125は20%残、底部の切り離しは糸切り？→ナデである、体部は回転ナデを強く施しており、ナデによる凹凸が顕著に残る。I-126は25%残でやや歪み、激しく黄灰を被っており二次焼成と思われる、底部の切り離しは被灰のため不明。I-127は30%残、口縁が強く屈曲してくびれている、底部の調整は糸切り→ナデである。I-128は30%残、底部の切り離しは糸切りで、切り離し時に底部周辺の粘土が盛り上がっている、そしてこの盛り上がり部分を工具でオサエたような条痕が残っている。I-130は25%残、（復）口径13.0cm、器高4.4cmを測り、反転復元上では塊、というより坏のような形態を示す、口縁部は極めて僅かにくびれている、焼成は非還元赤褐色を呈している。I-131～134は塊Bである。I-131は25%残で（復）口径14.1cm、器高5.4cmを測る、外側は被灰しているが回転ナデによる凹凸が良く残っている。底部の切り離しは糸切りか。I-132は15%残、（復）口径16.8cm、器高4.9cmを測る、回転ナデが強く、ナデによる凹凸が顕著である。I-133は25%残、塊Bの重ね焼き資料で現状では二個体分が溶着している。I-134は30%残、（復）口径17.8cm、器高5.5cmを測る厚手品である。

I-135は塊か、細片で復程は不可能、底部？にX印のヘラ記号を記している、塊として実測したが、蓋であるかもしれない。I-136・137は底部片で、I-136の底部の切り離しは回転糸切りである、また底部の横に工具痕（又はヘラ記号）のような五条の痕跡が見られる。I-137は底径10.0cmを測る底部片、底部の切り離しは静止糸切りである。

I-138～157は皿で、I-138～143が無高台の皿、I-144～157が高台付きの皿である。I-138・139は灯明皿（III E）で、I-138は二重の重ね焼き痕の溶着を示している、底部の切り離しは糸切りである。I-139は30%残、（復）口径11.0cm、器高2.8cmの小型品で、口縁端部が強く屈曲する、底部は回転糸切り痕が残る、焼成は不良で赤色を呈している。

I-140は30%残、小型の皿で（復）口径10.9cm、器高2.6cmを測る、底部の切り離しは静止糸切りで、体部は斜め上に直線上に伸び、口縁端部は僅かに外反する。



第224図 I-2区 包含層出土遺物②

I-141～143は皿Bである。I-141は30%残、(復)口径14.4cm、器高2.1cmを測り、底部の切り離しは糸切りである。I-142は30%残の上、歪んでいる、外面に別の須恵器片の剥離痕と、黄灰とを被っているので、置台等に転用したものであろうか。I-143は30%残、底部の切り離しは回転糸切りである。

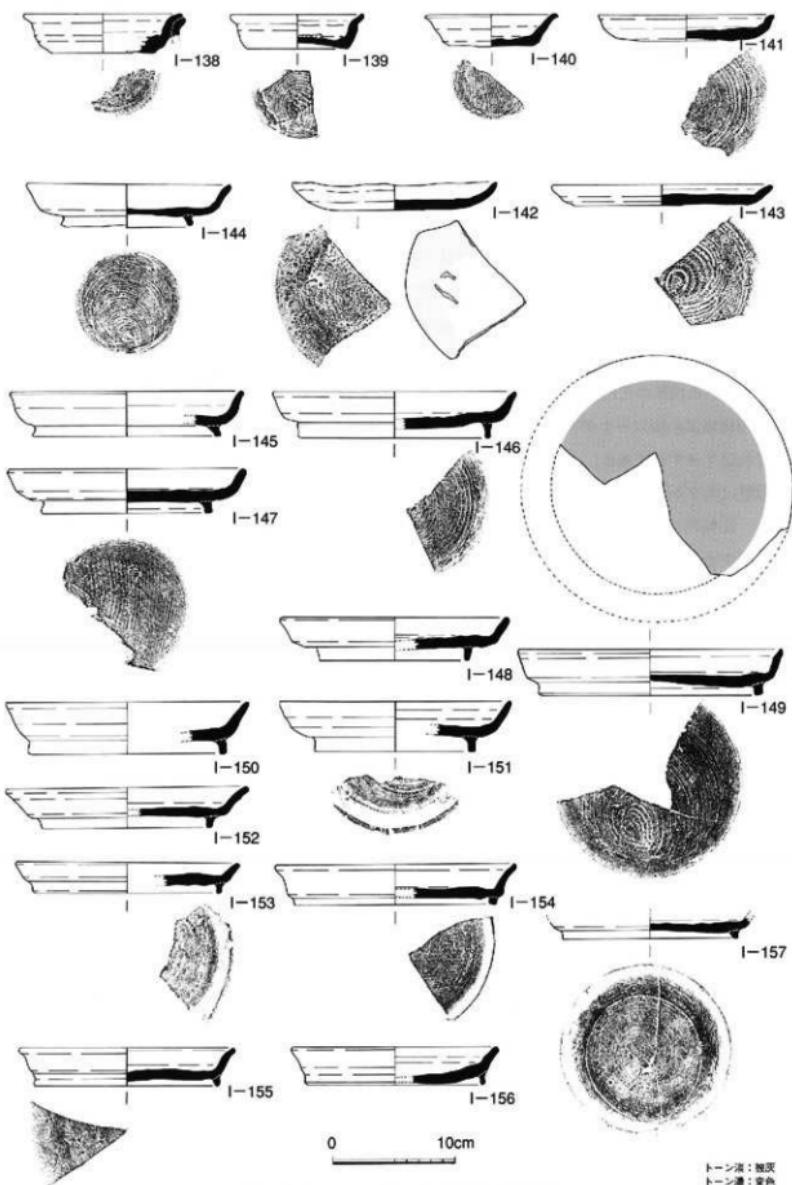
I-144は皿D、70%残であるが歪みが強い、岡上では残存部分の良好な箇所を反転復元した、(復)口径16.7cm、器高3.4cmを測り内面に被灰する、底部の切り離しは回転糸切りである。I-145は皿Bで、底部の調整はナデである。I-146は皿Bである、30%残で底部の切り離しは糸切りである。I-147も皿B、40%残で底部の切り離しは静止糸切りである。I-148は皿Dである、40%残で(復)口径18.8cm、器高3.5cmを測る、底部は糸切り痕が残り、内面には灰が被っている。I-149は皿D、60%残で口径21.8cm、器高3.8cm。高台径18.4cmを測る、底部の切り離しは回転糸切りで、内面には重ね焼きと思われる円形の変色がある。I-150は皿Fである、底部の調整はナデ。I-151は25%残の皿D、底部の調整は糸切り→ナデか。I-152は30%残、皿Dで焼成が甘く赤褐色を呈している、底部の調整は糸切り→ナデである。I-153は皿Dである、25%残でやや雑な作りであるとの感じを受ける、底部調整はナデか。I-154は皿F、30%残で底部の調整は静止糸切り→ナデである。I-155も皿Fである、20%残の細片で内外面に被灰しており、二次焼成を受けていると考えられる。I-156は20%残の皿Fで、高台部と皿部との境が不明瞭である。I-157は高台部分の完形品で、高台径14.4cmを測る、器種は高台付きの皿と思われる、底部の切り離しは回転糸切りで、底部の周辺部に円弧状の沈線があり、その外側に爪形文によると思われる刻目を一周させている。

I-158・159は脚部片である。I-158は脚高2.0cmの低脚片で、残存部には一方の切り込みが認められる、また脚内の环部底面に×印のヘラ記号を記している。I-159は(復)底径14.2cmを測る脚片、下部の沈線は途中で途切れしており、二段の透かしが認められる。

I-160～165は壺である。I-160は体部に(静止)沈線が巡らされている、壺の肩部分か。I-161は長頸壺(壺K)の破片で歪みが大きい。I-162は壺の肩部片で、肩の部分に突帯が巡っている、また外面に薄く被灰している。I-163～165は壺と思われる底部で、I-163の底部は平底、底部調整はナデである。I-164・165は高台片である。

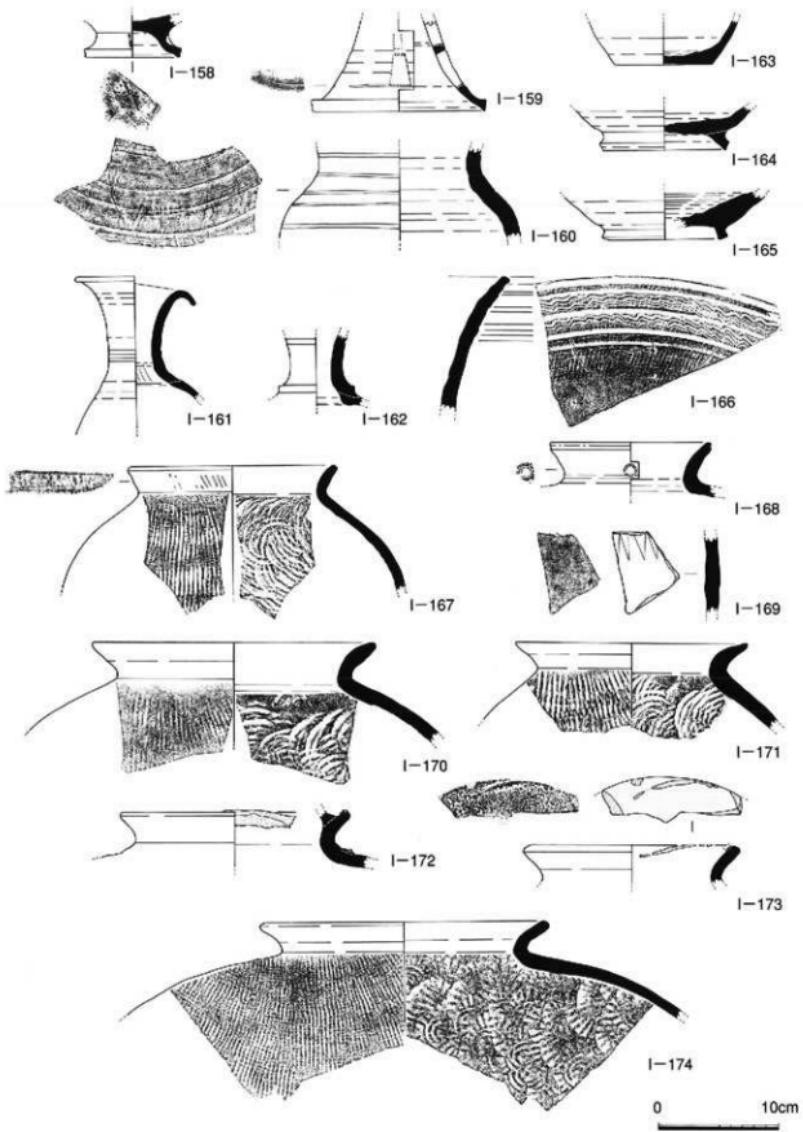
I-166～174は甕である。I-166は甕Aの破片、波状文とタタキ痕が残る。I-167は甕Cである、体部の内外面はタタキ調整で、頭部外面にもタタキ痕が残る。I-168の甕の頭部には竹管文を施している。I-169は甕片か、微細片で詳細は不明であるが、極めて細線により鋸歯文を施している。I-170・171は甕Cで(復)口径がそれぞれ23.4cm、19.2cmを測る。I-172・173は甕の重ね焼き資料で、甕の口縁部内面に、円形の別須恵器の剥離痕が残っている。I-174は(復)口径24.0cmを測る大甕Cである、体部の調整はタタキで内面の当て具が車輪文である。

I-175は器種・天地が不明な須恵器の微細片で、焼成は甘く赤褐色を呈している。I-176は車輪文の当て具痕でタタキ調整された破片で、立ち上がりが急なので瓶と考えられる。I-177も瓶と考えられる微細片である。I-178は内外面が粗いナデによって調整されている、何らかの脚片か、天地不明である。



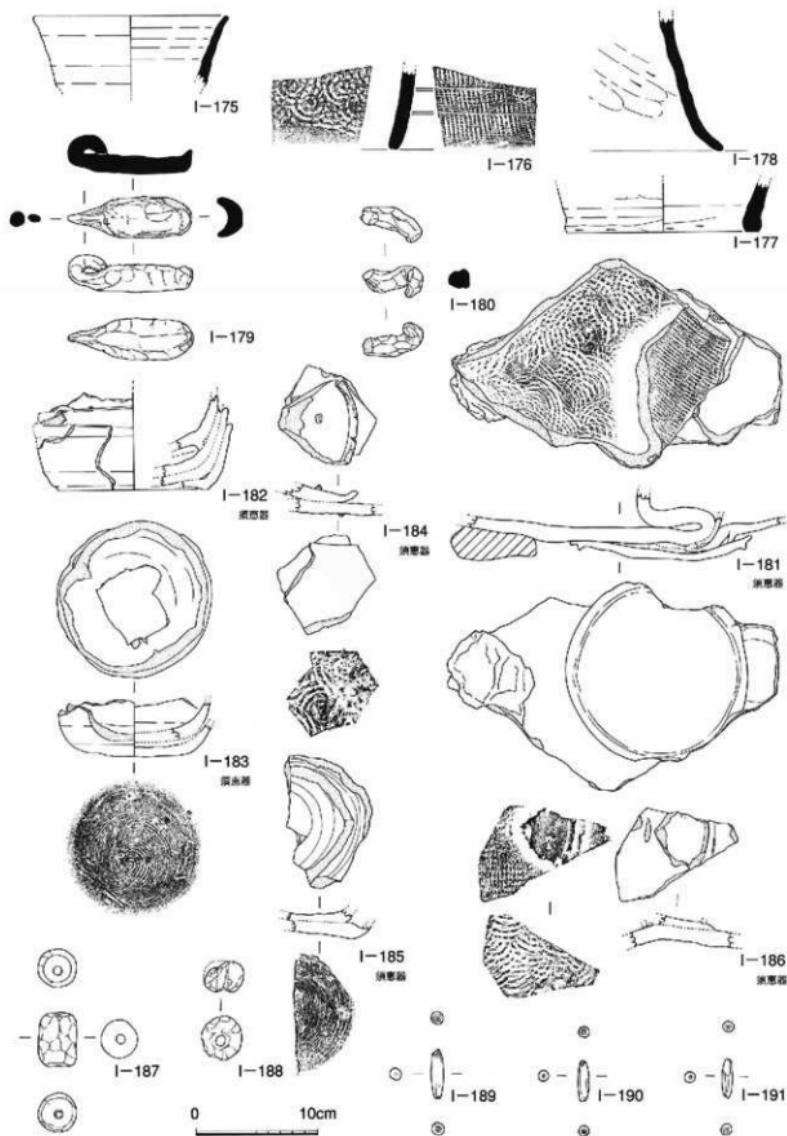
第225図 I-2区 包含層出土遺物③

トーン液：褐色
トーン液：変色



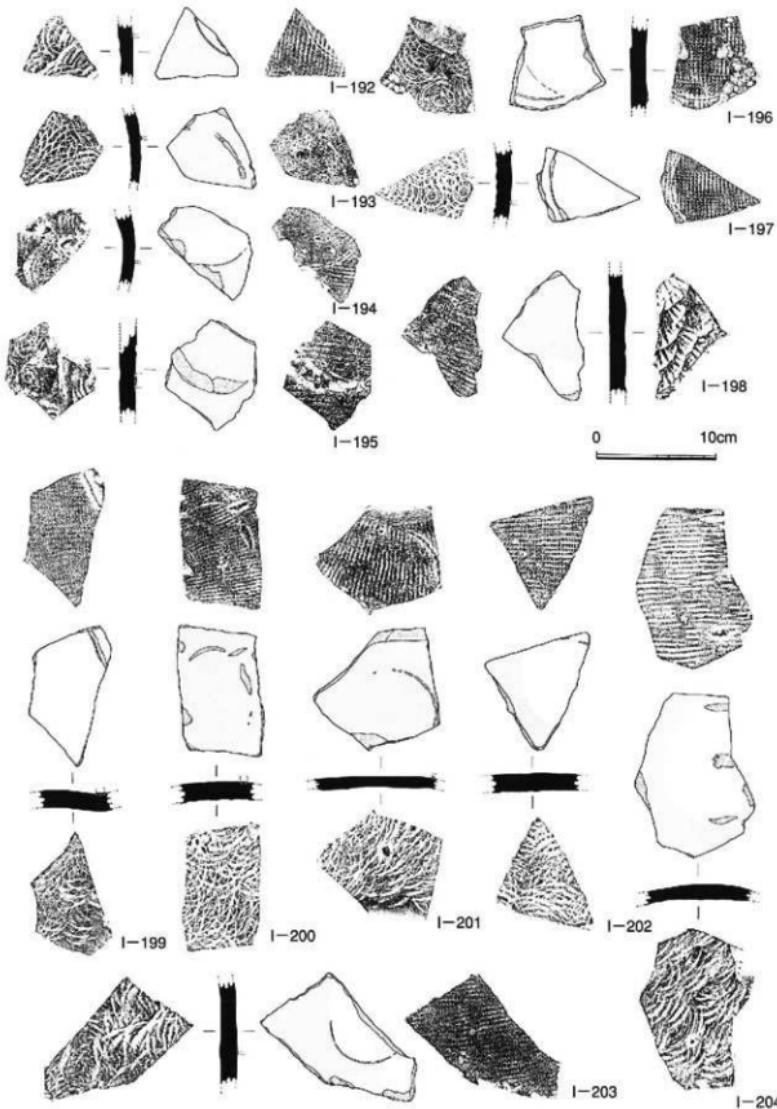
第226図 I-2区 包含層出土遺物④

トーン法：柱灰



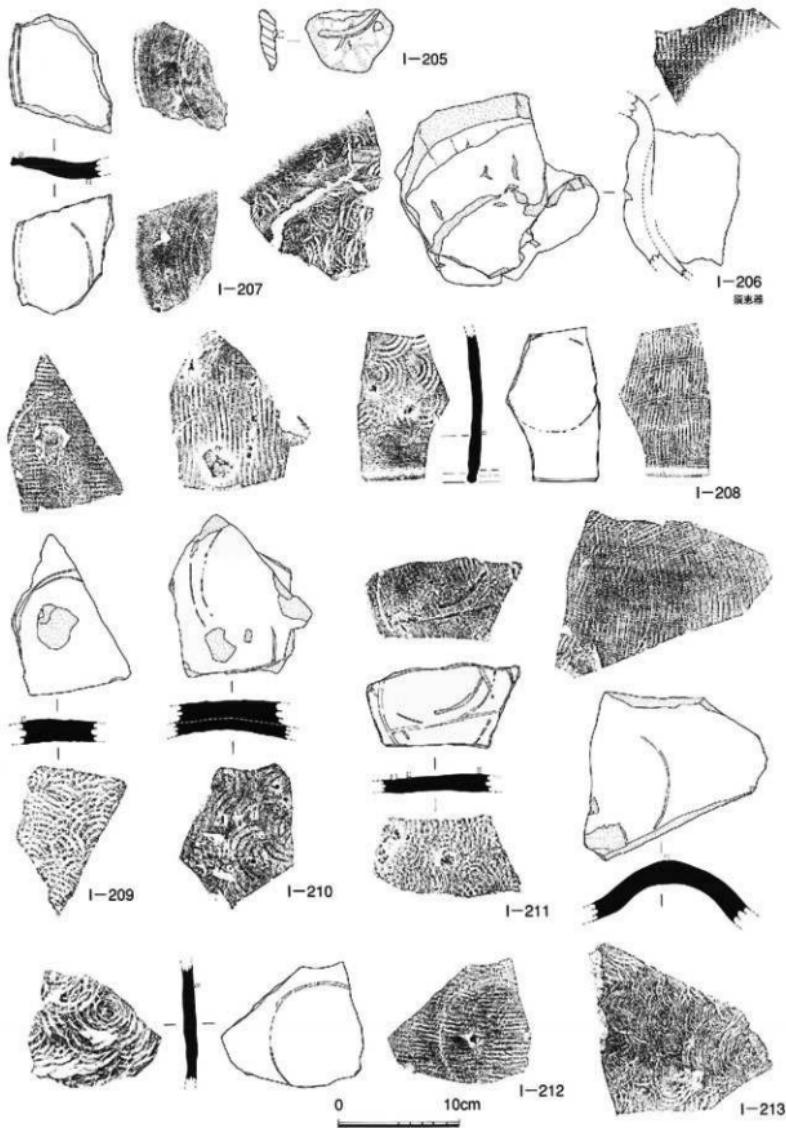
第227図 I-2区 包含層出土遺物⑤

トーン液：糖灰



第228図 I-2区 包含層出土遺物⑥

トーン塗：地灰



第229図 I-2区 包含層出土遺物⑦

トーン淡：黒灰

I-179は全体的にナデ、オサエによって整形されている、体部の断面がJ字形であるため、須恵質の船形と思われる。I-180は器種不明、須恵質で残長5.0cm、径1.7cmを測る、尻尾か。

I-181～186は溶着資料である。I-181は大甕の体部片に、かえりを有する輪状つまみの蓋、底部がヘラ切りの坏とセット関係で溶着している。I-182は塊Aの重ね焼きで、現状では四重の重なりが認められる、このうち下三つは無高台の塊Aで、最上部分の須恵器には高台を付している。I-183は塊Aの二重（以上）の重ね焼きで、底部の切り離しは回転糸切りである、上の塊の底部の中央部分（見込み）は欠損しているが、焼成後の分離時に剥離してしまったものであろう。I-184は甕片と皿？との溶着資料で、被灰と傷みが見られるため二次焼成を受けていると考えられる。I-185も重ね焼きの資料である、小片な為詳細は不明であるが回転糸切りを残す坏であろう、外外面に若干の被灰がある。I-186は甕と須恵器片との溶着資料である、須恵器片の方（実測図では上）はかえり、又は受け部と思われる突出があるので甕と坏・又は蓋との溶着資料と考えられる。

I-187は土鍾の完形品である、長さ4.5cm、幅3.0cm、孔径0.7cmを測る、焼き上がりは非還元炎焼成で黄褐色を呈するので土師質か。I-188は土師質の土玉で、I-189～191は土師質の棒状土鍾である。

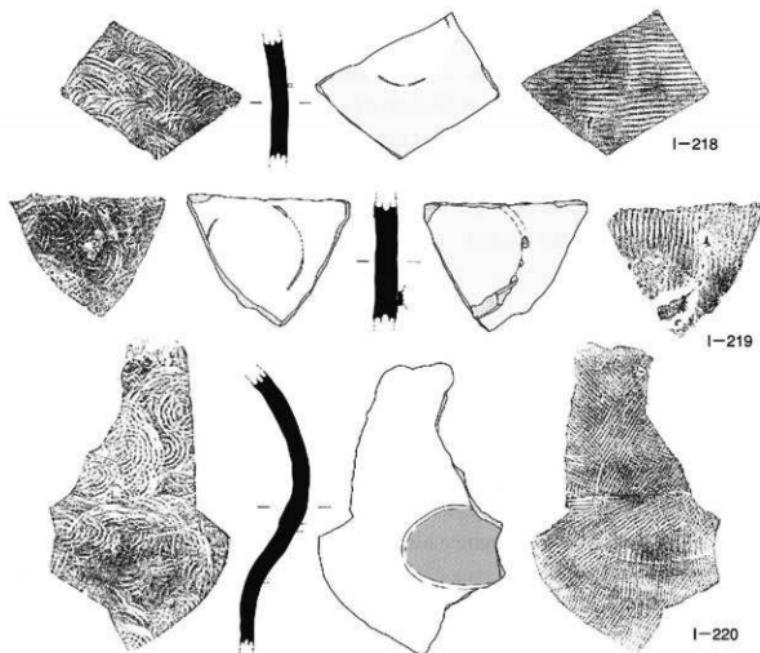
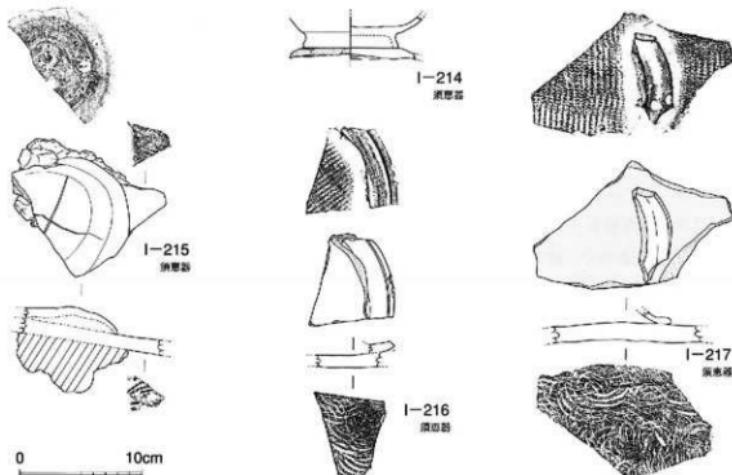
I-192～220は須恵器片を転用した置台である。大部分は甕片の転用で、円形の剥離痕、被灰、変色などで転用痕が残っている、剥離痕の規模としては径8～9cm程度の円形のものが多く、複数に転用したもの（I-211）もある。何を置いていたかの詳細は不明であるが、I-215では甕片に坏Hの蓋が溶着し、I-216・217には甕片に高环片と思われる破片が溶着している。I-214では蓋片に高台が溶着しているが、これは一時焼成の重ね焼き時のものか、置台転用の二次焼成のものであったのかは不明瞭である。甕片の転用以外では、I-205は灰がガラス化して石化したものに別の須恵器片の剥離が見られ、I-206では甕と大きな石とが溶着している、石は17cm×11cm×8cm大の規模であり被灰も認められる、また甕片は完全に変形してしまっている。I-207は屈曲のない端部の蓋片に別の須恵器の剥離痕が残っている（ただし、これは重ね焼きか転用かは不明）。I-208は脚片、又は鉢を転用している。

I-221～264はI-3区の各トレンチから出土した遺物である。I-221はI-3区・T-1の出土遺物で輪状つまみを付した天井部の小片である、調整は外側がつまみ内はナデ、つまみ外はケズリで、内面は不定方向のナデである。

I-222～241はI-3区・T-2の出土遺物である。I-222・223は坏Hと思われる細片で、I-222は蓋、I-223は薄手の坏Hの身であろう。

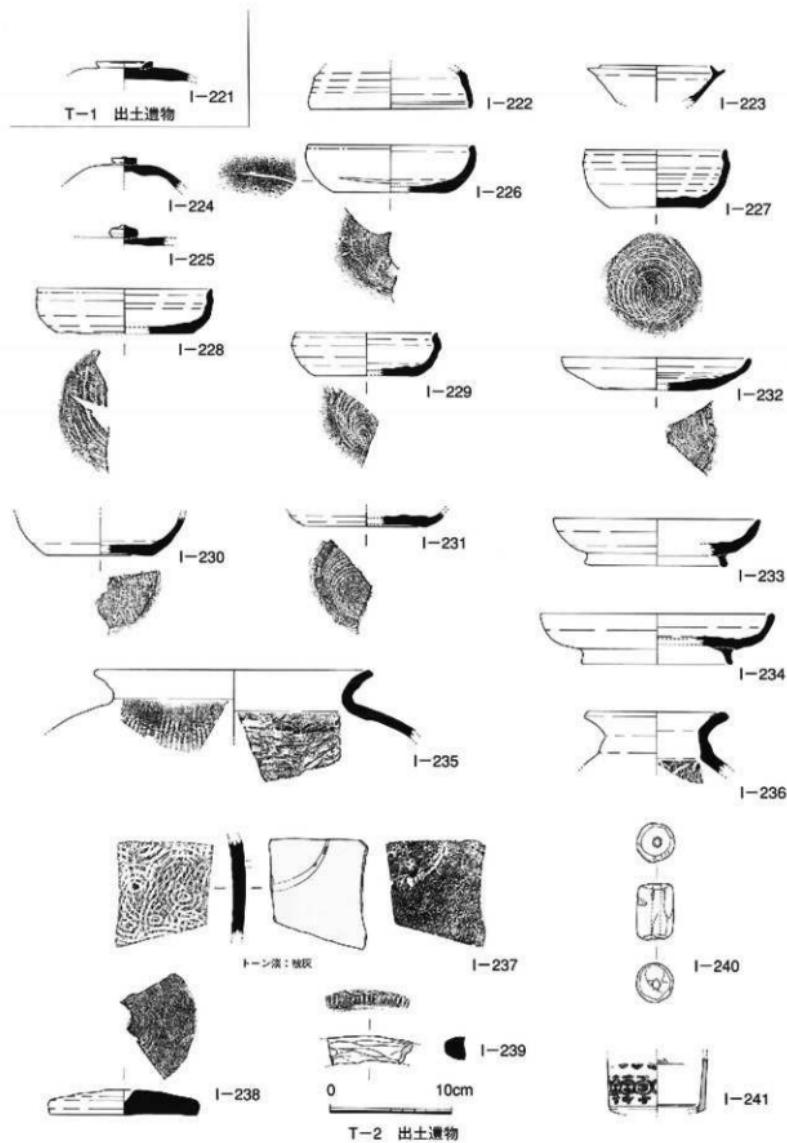
I-224・225は蓋である。I-224は厚2.0cm程度の小さなボタン状の擬宝珠つまみを付した天井片で、I-225は宝珠形のつまみ部分の破片である。

I-226～229は塊Aである。I-226は40%残、底部の切り離しは糸切りで、体部下半に沈線が引かれている。I-227は40%残、口縁部は僅かに内鴻し、底部には糸切り痕が残る。I-228は50%残、底部の切り離しは糸切りか、口縁部がくびれています。I-229は25%残、底部の調整は回転糸切りである。

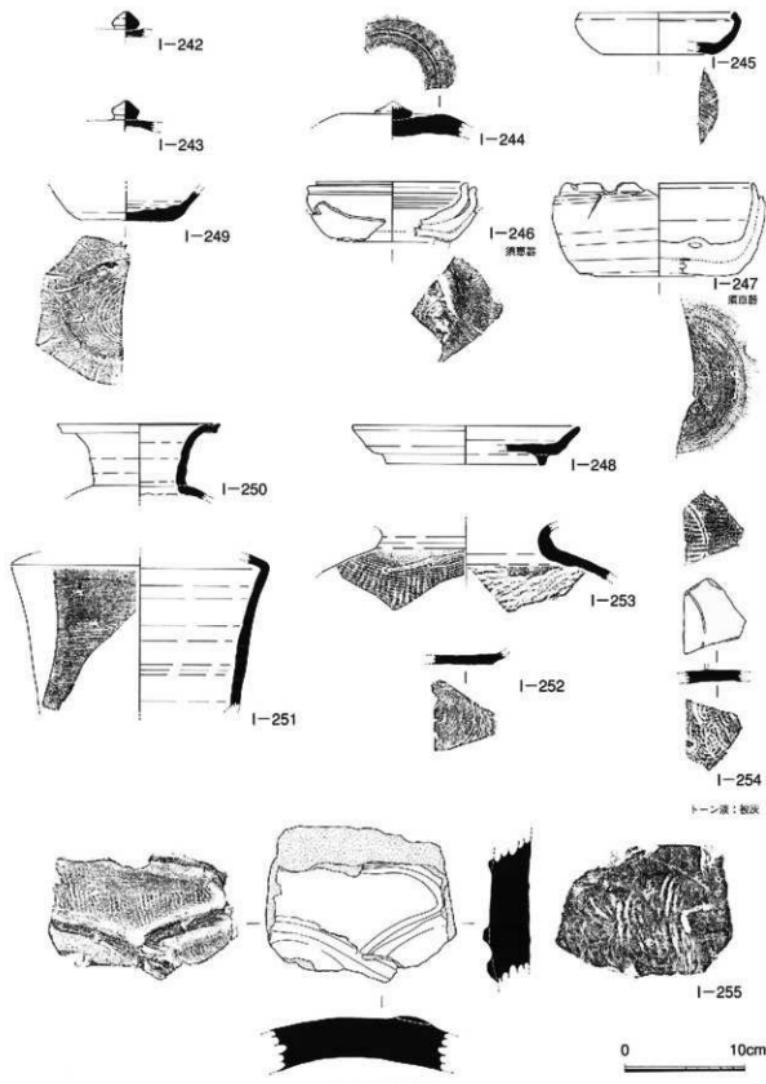


第230図 I-2区 包含層出土遺物⑧

トーン底：鍛鉄
トーン邊：空色



第231図 I-3区 トレンチ出土遺物①



第232図 I-3区 トレンチ出土遺物②

I-230・231は底部片である、I-230の底部は平底で糸切りによって切り離した後、若干ナデている。I-231の底部は回転糸切りによって切り離されており、底部周辺にはT工具によるものと思われる条痕が残っている。

I-232～234は皿、又は杯である。I-232は皿か、(復)口径15.8cm、器高2.6cmを測る、底面には糸切り痕が残る。I-233は(復)口径17.2cm、器高3.8cmを測る、高台を付しており、体部長が2.8cmと低いため、皿か杯か判断に苦しむところである。I-234は30%残、底部調整は糸切り→ナデか。

I-235は甕Cで内外面はタタキ調整、I-236は甕、又は壺である、(復)口径は12.0cmを小さめで体部の調整はタタキ、頸部はほぼ垂直に伸び、口縁付近で強く外反している。

I-237は甕片を転用したと思われる置台で、円形の剥離痕が残る。I-238は器種不明で窯道具か、最大厚み2.0cmの厚手品で中央部分が窪んでいる、(復)口径11.9cm、器高2.0を測る、実測図の下面は丁寧なナデで、上面には細い条痕が不規則に多数認められる、若干の被灰はあるが顯著な二次焼成痕は認められない。I-239は甕の切り屑を転用した窯道具で、ヘラ状工具によって切断された平坦面がある。

I-240は土師質の土鍤で、長さ4.5cm、径3.0cm、孔径0.7cmを測る。I-241は磁器の細片で(復)底径が8.0cmを測る。

I-242～255はI-3区・T-4出土遺物である。I-242～244が蓋で、I-242・243が宝珠形のつまみ片、I-244が大型の宝珠を付した天井片である、器壁が厚く、風化が著しい、天井部に円弧状の沈線が巡っている。

I-245～247は塊である。I-245は塊Aで40%残、底部の切り離しは糸切りで、口縁端部が内湾する。I-246は塊Aの重ね焼き資料で三個体分溶着しており、かつ最も外側の塊底部に別の須恵器の剥離痕が残っている。I-247も塊の重ね焼き資料で、外側の塊は(復)口径17.2cm、器高6.3cmを測る、塊Bか、底部調整はケズリで、歪みと火膨れが認められる。

I-248は皿Dで風化が著しい。I-249は底部片である、底部の切り離しは糸切り?で中央に条痕が認められる。

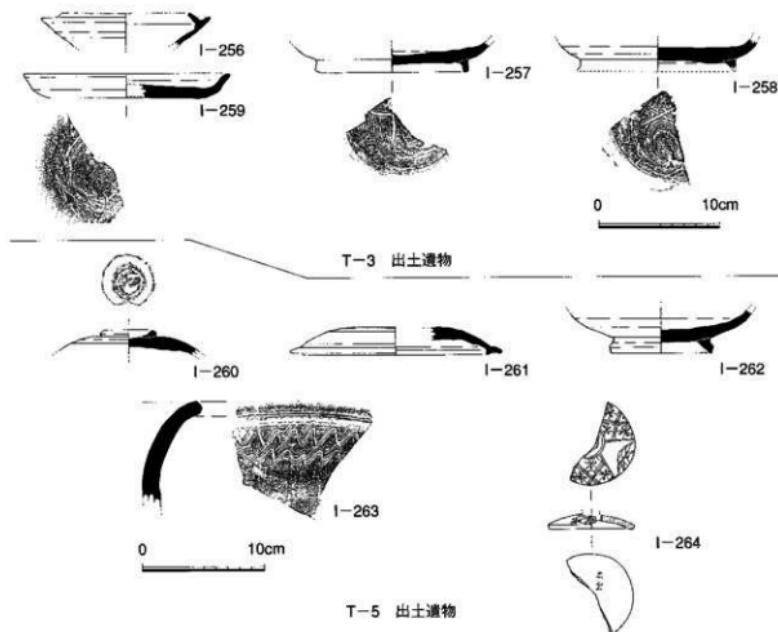
I-251は蓋Xで肩部が稜角をなす胴長の体部片、口縁部の形態は不明であるがJ-3などを見ると、I-250のような短く外反する口縁がつくと考えられる。

I-252は平底の底部片である、底部調整は糸切りで、円弧状の沈線が巡っている。I-253は甕で、I-254は甕片を転用した置台である。

I-255は陶棺片で残長12.0cm、残存幅15.5cm、厚み4.0cmを測る、体部調整はタタキで内面に同心円文当て具痕が残っている、また外面に突帯を付している。

I-256～259はI-3区・T-3出土遺物である。I-256は杯Hの身で、I-257・258は高台片である、何れも底部の切り離しは回転糸切りで、糸切り後にX印のヘラ記号を記している。I-259は皿Cで40%残、底部の切り離しは回転糸切りである。

I-260～264はI-3区・T-5出土遺物である。I-260は輪状つまみを付した天井片で、つまみ内にヘラ起こしと思われる凹凸が見られる。I-261はかえりのある蓋の細片、I-262は高台部分



第233図 I-3区 トレンチ出土遺物③

の小片で外面に被灰している。I-263は甕Aの口縁片で荒い波状文を施している。I-264は磁器の蓋で内面に「忠窯」の銘を記している。

I-265~315はその他の1区包含層出土遺物である。I-265~268は環IIである。I-265は40%残の蓋、天井部に別の須恵器の破片が接着している。I-266は50%残の身で(復)口径12.4cm、器高4.5cmを測る、外面に被灰しているが、円形の被灰していない箇所がある。I-267は25%残、I-268は10%残の環IIの身である。

I-269~271は蓋である。I-269は40%残、かえりのある蓋で輪状つまみを付す、外面に激しく緑色の灰を被っている。I-270は輪状つまみに端部が屈曲する蓋である、内面に径3.2cmの円形の剥離痕が残るが、蓋を重ね焼いた時のつまみ部分の剥離であろう。I-271は30%残の蓋である。天井部に円弧状を沈線が巡っている。

I-272は高台片である、底部は静止糸切りによって切り離されており、その周辺(高台部分ぎりぎり)で円弧状のナデ痕が二重に巡る、また、底部中央にも僅かに円弧状の痕跡が残る。

I-273~278は塊(塊A)である。I-273は25%残、底部の調整は糸切り→ナデで、底部端はナデの痕跡が比較的良く分かる。I-274は90%残であるが僅かに歪む、口径12.8cm、器高4.4cmを測り、焼成が甘く黄褐色を呈している。I-275は口縁がくびれる細片で、I-276は(復)口径が18.2cmと

やや大型の壺である。I-278は40%残、底部の切り離しは糸切りで、歪みが大きい。

I-279~287は皿で、I-279~283が無高台の皿、I-284~287が高台付きの皿である。I-279は(復)口径10.2cmと小さい器形で、灯明皿(皿E)か。I-280は30%残の皿Cである、底部の切り離しは糸切りで、内外面に重ね焼きの痕跡と思われる須恵器の溶着が残る。I-281は50%残、(復)口径15.2cm、器高13.8cmを測る、底部の切り離しは回転糸切りである。I-282は皿Aか、底部は厚く、立ち上がりはそれに比して薄手である。I-283は50%残であるが、歪みが大きい、外面に黄灰を被る、底部には回転糸切り痕が残る。

I-284は皿Fである、40%残で底部は回転糸切りによって切り離されている。I-285は皿B、25%残で高台部分に穿孔を施している、皿のこのような穿孔は今次調査例では他に類例が無い。I-286は15%残、底部の切り離しは(静止の?)糸切りである。I-287は皿の溶着資料で、細片であるが理解しやすいように図上反転復元している、現存する溶着個体数は四重で間に大型の窓壁片を挟んでいる、これが一時焼成(重ね焼き)のままであれば、高台付きの皿を重ね、その上に窓壁をかませて、坏類を重ねたものと考えられるが、蓋台等に転用して複数の焼成が重なった結果なのかもしれない。

I-288は脚高が3.3cmの低脚で一段二方向に切り込みが施されている。I-289は高杯の脚片で外面に厚く黄灰を被っている、二次焼成か。

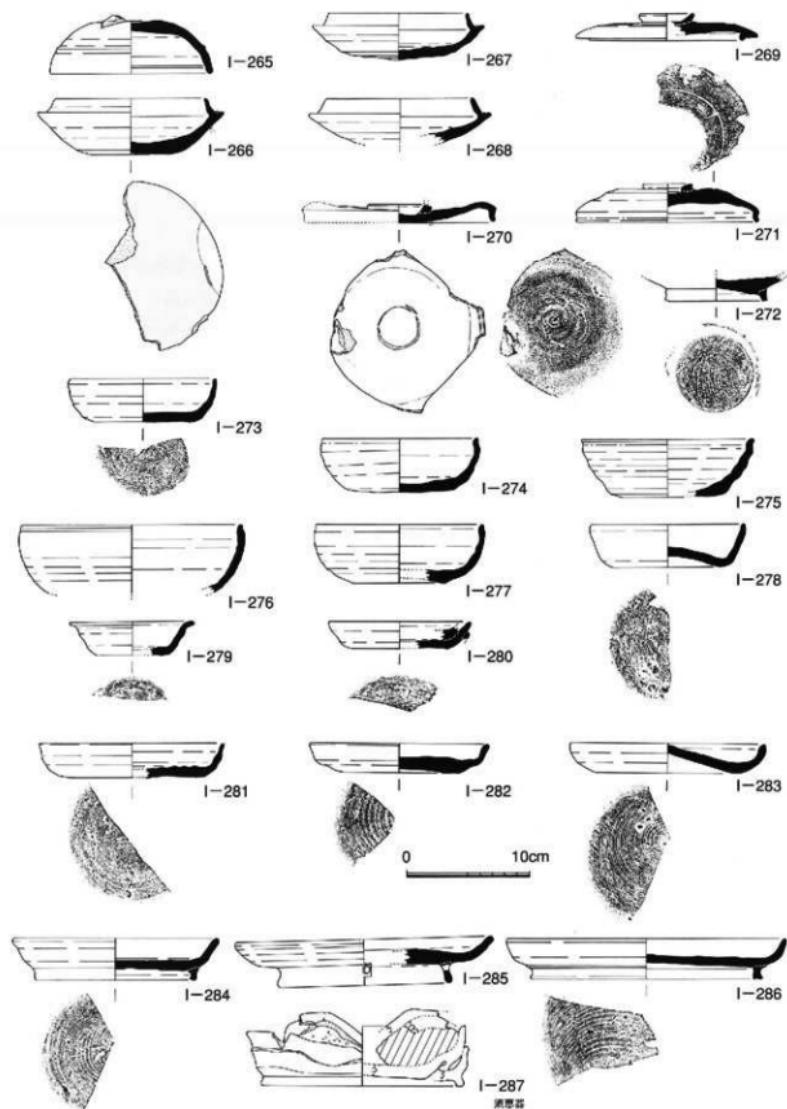
I-290~294は壺である。I-290は平底の底部で小型の壺であろうか、底部の切り離しは回転糸切りで、重ね焼きと思われる別の須恵器片の溶着が見られる。I-291は壺の底部である、高台が剥離しており、底部にはヘラ記号が施されている。I-292も壺の高台片で、体部はタタキ調整である、風化が著しく被灰している。I-293は壺の肩から胴部の破片、(復)肩径は24.2cmを測る、内外面はナデ調整である。I-294は壺の体部片で、回転ナデによるナデの凹凸が良く残っている。

I-295は獸脚である、欠損部が多いが残高3.4cm、最大幅2.2cmを測る。I-296は円面観か、細片で(復)口径12.2cm、器高1.1cmを測る、皿状の形態で、中央に陸部と思われる平坦面を有している、底部の切り離しは被灰のため不明である、山津窓跡近くの池ノ奥A遺跡に類例が出土しているが、池ノ奥例では海部外堤に小孔を穿っている。I-297は窓道具(焼台)で、外面は厚く被灰しており調整は不明(オサエ?)。

I-298は鉢、又は底部か、天地不明である、細片で焼成が甘く、非還元炎焼成の黄橙色を呈している。I-299は次帶と円形浮文を付した細片である、歪みが大きい細片な為焼成は不明であるが、子持壺であろうか。I-300は瓶の細片で把手を付している、内外面の調整はタタキであるが、内面には車輪文の当て具痕が残っている。

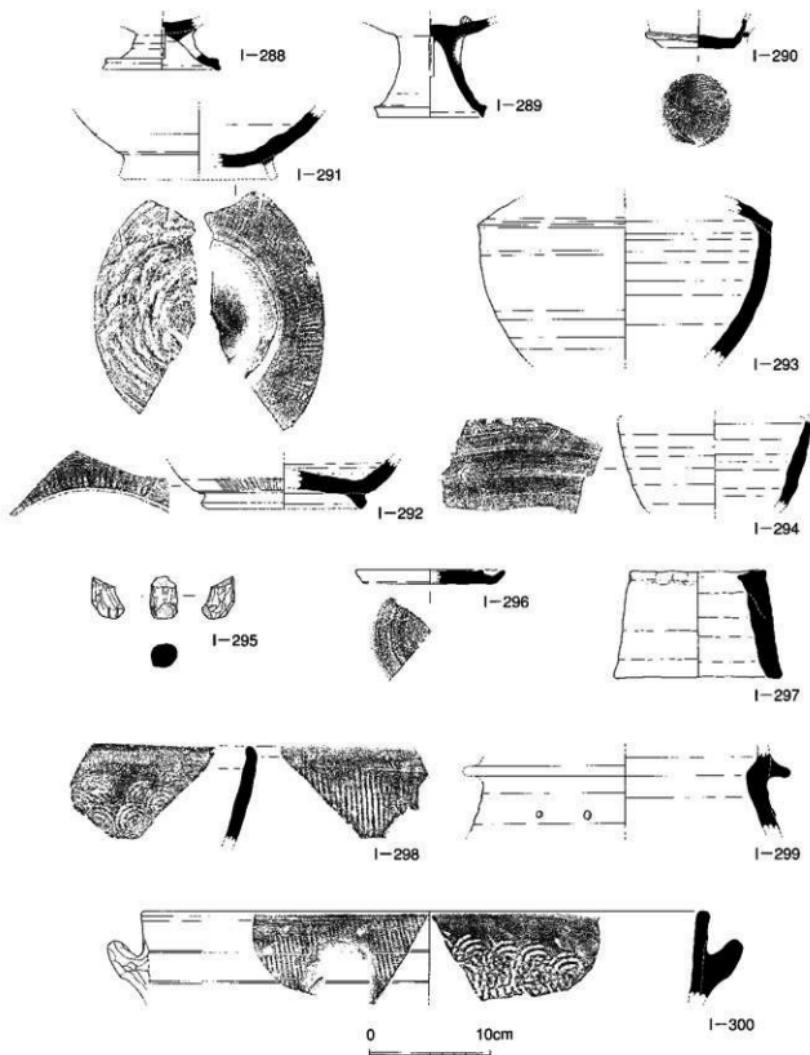
I-301~306は甕である。I-301・302は甕Cで何れも細片、体部はタタキによって調整されている。I-303は甕Aの細片、粗雑で粗い波状文を施している。I-304も甕の口縁として実測したが、細片のため天地は不明である。I-305は甕Aで波状文と沈線の他に竹箒文を施している。I-306も甕Aの口縁片で、波状文の他に円形の浮文を付している。

I-307は底部片である、(復)底径12.2cm、残高6.3cmを測る、体部と底部はナデによって調整を行っている。

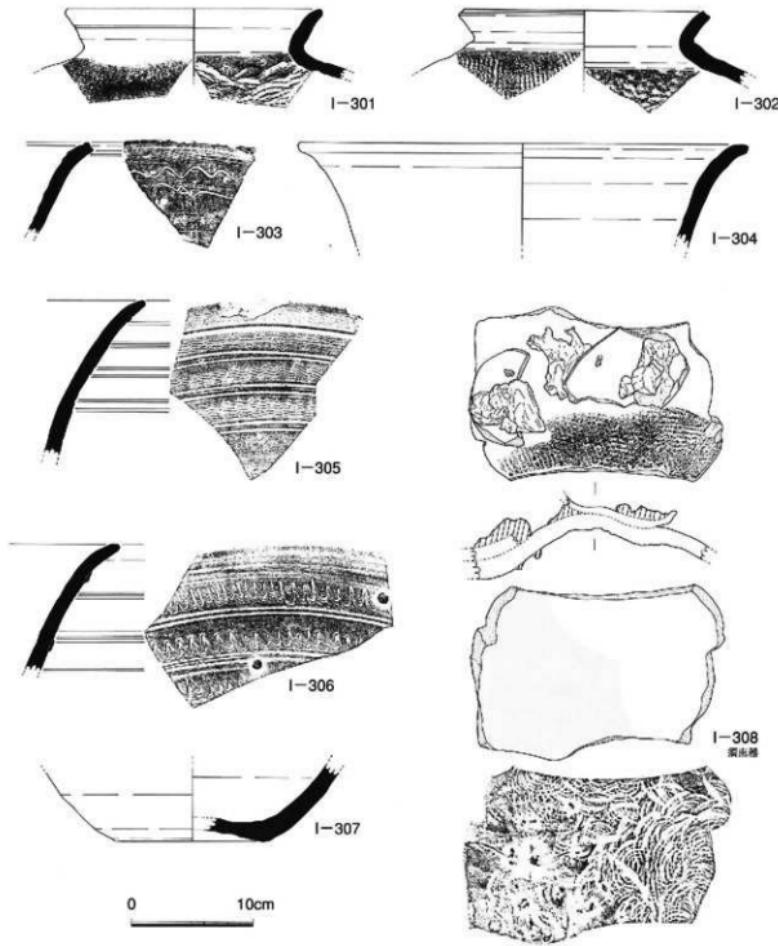


第234図 I区 包含層出土遺物①

トーン線：複灰

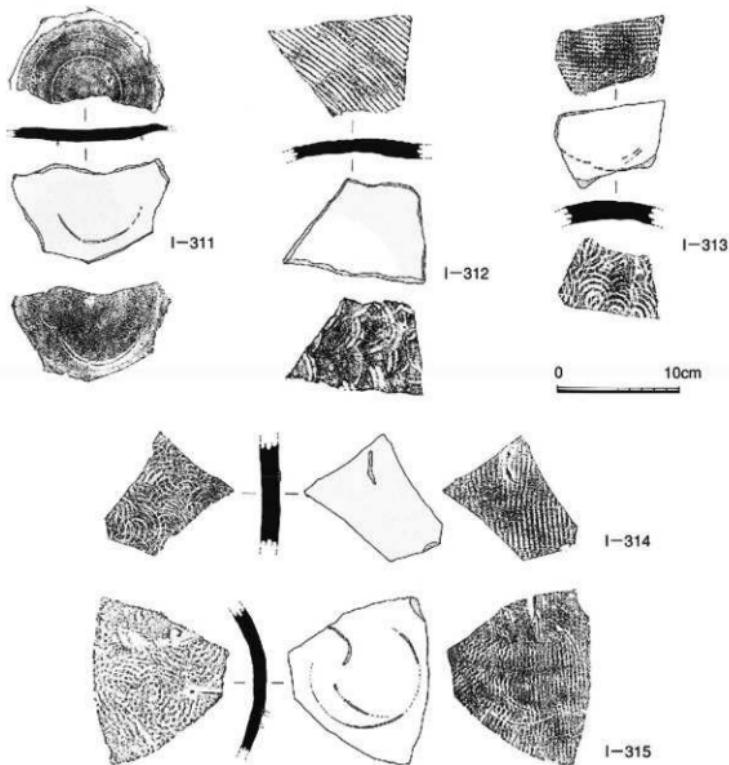


第235図 I区 包含層出土遺物②



第236図 I区 包含層出土遺物③

トーン液：被灰



第237図 I区 包含層出土遺物④

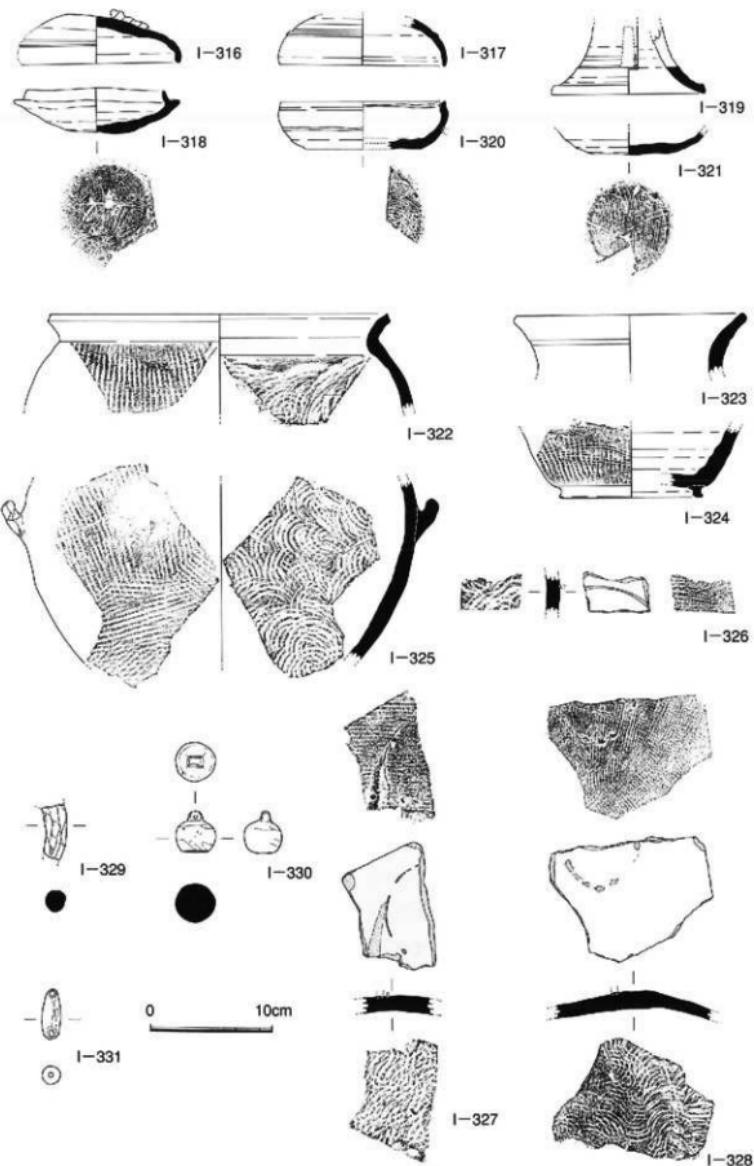
トーン淡:被灰

I-308は甕の溶着資料である。甕片に壊、又は皿状の須恵器片が溶着している、甕の（一時）焼成時の底部付近に須恵器片を置き、転倒しないようにした痕跡と思われるが、甕片の内面には被灰が見られるので転用（置台）した可能性も否定出来ない。

I-309～315は甕片転用の置台である。変色部分や被灰、円形の剥離痕などが見られるので、置台として転用していると考えられる。

I-316～331はI-3区・耕作土その他の出土遺物である。I-316～318は壺口で、I-316が40%残の蓋、I-317が20%残の蓋である、I-318は60%残の身で、底部に工具によると思われる条痕と×印のヘラ記号を記している、また外面の一部に白灰を被り風化が認められる。

I-319は脚片である。I-320は塊Aで、口縁内面と体部に重ね焼きの痕跡と思われる別須恵器の剥離痕が残る。I-321は底部の細片、底部の切り離しは静止糸切りで、糸切り方向とは別方向にも僅かに条痕が走っている。



第238図 I-3区 耕作土・その他出土遺物

トーン淡：黒灰

I-322~324は甕である。I-322は甕Cで体部の内外にタタキ調整を施す。I-323は微細片、甕の口縁片か、内外面に線釉が良好に被っている。I-324は高台付きの底部で、体部はタタキ調整である。

I-325は甕か、体部は通常の甕形土器と同じくタタキ調整を施すが、比較的小さな把手が付いている、また体部は丸みを帯びており焼成は非還元炎焼成で、色調は黄褐色を呈す。

I-326~328は甕片転用の置台である。I-326は円形の別の須恵器剥離痕が残り、I-327は円形剥離痕に被灰が厚く、二次焼成を受けていると思われる。I-328は被灰が見られないが、径5~6cmの円形の剥離痕が残っている。

I-329は脚片、須恵質の土馬の脚であろう。I-330は分銅である、須恵質で灰色を呈しており、中実の円形体部に紐孔部分を付している。

I-331は土師質の棒状土錐である。

J区 遺構

(江川幸子)

J区は畑として利用されていた低丘陵上平坦面と、水田として利用されていた低地とに大別される。

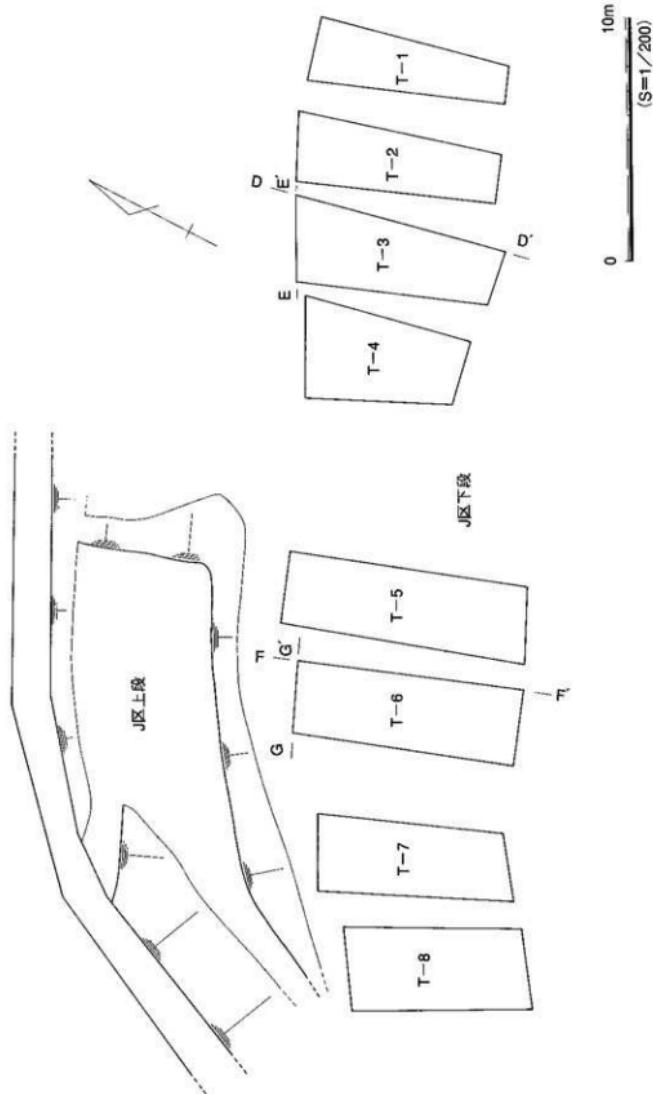
前者をJ区上段、後者をJ区下段として調査を実施した(第239図)。各々についてその報告を行う。

J区上段

J区上段は中海方向に張り出した丘陵の先端部(第240図)で、標高5mを測る。ここに畑の平坦地が作られたのは日無水の引水路設置工事が実施されてからで、この畑を作るために丘陵の高い方を約1mを削平し、東側周縁には盛土をおこなって面積の拡大を図っている。現地権者はその時のこと、「とても硬い場所で掘り難かったそう」と伝え聞いている。礫層が中心で、登り窓が存在した場所であるからまさにそのとおりであっただろう。

調査はまず表土(畑土)の除去から開始した。表土の厚さは10~15cmと非常に薄く、多量の須恵器の破片を包含していた。表土直下は硬い礫層で、その面で4号窓右壁にあたる被熟粘土の帶を検出した。(第241図)。窓体の外縁にめぐる被熟粘土の平面プランを出すため精査をおこなったが、幅5cm強の被熟粘土帶の長さは3.8m以上は検出できず、左壁に関しては全く検出することができなかった。この理解し難い事実を解明するため、窓中軸の想定ラインと直交する方向3ヵ所に畦を設定し、窓床面までの掘り下げをおこなった。その結果、Cラインでは窓の中に多量の土器片を包含した炭屑が左下がりに堆積し、非常に不自然な状況が観察された(第242図)。また、床面の還元部はC地点を中心に1m程度残存していたが、その東側には床面が無く地山が露出しており、この地山は本来であれば左壁が存在する方向に向かって高まっていた。

右側窓壁が3.8mでぶつかりと切れること、床面が一部しか残存しないこと、左側窓壁が存在しないことについて、中村唯史氏に地質の方面から意見をうかがった。中村氏は、Cラインセクションでは床面がせり上がった逆断層の痕跡が見られること、Bラインおよび全体の状況から、もともと北東の高いレベルの急傾斜地にあった窓の一部が何らかの原因ですべり落ちて現位置に移動し、左側窓壁等は原位置に現在もとどまっている可能性が高いことを指摘された(後述J区指導会復命書・第二章第



第239図 J区 調査範囲図（トレンチ配置図）

二節 中村報告)。4号窯は登り窯であるはずなのに、床面にほとんど傾斜が見られないこともこの指摘によってうなずけるものとなった。

4号窯が操業されていた時期については不明である。窯体内の炭層に8世紀前半の土器が大量に含まれていたことから、8世紀前半以前であることは確実である。ただ、4号窯右側窯壁が上方からすべり落ちたものだと考えると、窯体内の炭層は4号窯の灰原が入り込んだものである可能性も考えられ、そうであるとすれば8世紀前半の窯であるかもしれない。ちなみに、J区上段は表土中を含めて8世紀前半の土器しか出土していないことを挙げておきたい。

4号窯右壁の約4m西では、S字形(平面)の被熱粘土の帶を検出した(第240図)。被熱の帶の形状と南側に炭層が広がる事実から、窯の焚口付近と推察され、これを5号窯とする。被熱粘土の帶は右側のみの検出で、左側は存在するとしても調査範囲外にあるものと思われる。焚口南側の炭層からは8世紀前半の須恵器が出土しており、その頃迄操業がおこなわれたようである。

5号窯焚口から1.5m北東では、性格不明の土坑S J 101を検出した(第241図)。調査範囲外にかかっているため形状は不明であるが、深さは20cm前後を測る。若下の炭と須恵器片が出土した。

性格不明上坑S J 101から約2m北東では、性格不明の土坑S J 102を検出した(第241図)。一部が二段掘りの東西方向に細長い隅丸方形の土坑で、上端1.6×0.6m、下端1.3×0.2m、深さ約50cmを測る。この土坑の中央部上方からは多量の須恵器片、窓体片が出土したほか、下方からも若下の須恵器破片が出土した。出土した須恵器の時期はすべて8世紀前半であった。

J区下段

J区下段は比較的新しい時期の中海干拓により、水田として利用されていた場所である。標高は1mを測る。

低地で水はけが悪いため、調査はT-1~T-8の8本のトレンチを密に設定しておこなった(第239図)。いずれも同じような土層堆積状況であったので、ここでは2本のトレンチについて報告する(第243図)。T-3は濃灰色砂質土の上に砂礫層が堆積し、その中に波に洗われて割れ口が風化したような須恵器の破片が少々混入していた。その上は干拓によって客土された耕作基盤土、耕作土である。南側では砂礫層を切る灰色砂質土の落ち込みがあり、T-1からT-4にかけて存在していたことから、耕作時の水路ではないかと思われる。T-6も基本層序はほぼ同様である。ここでは、西側の淡橙色粘質土・淡灰色粘質土中に褐炭が観察され、古い時期の堆積層であることがわかった。

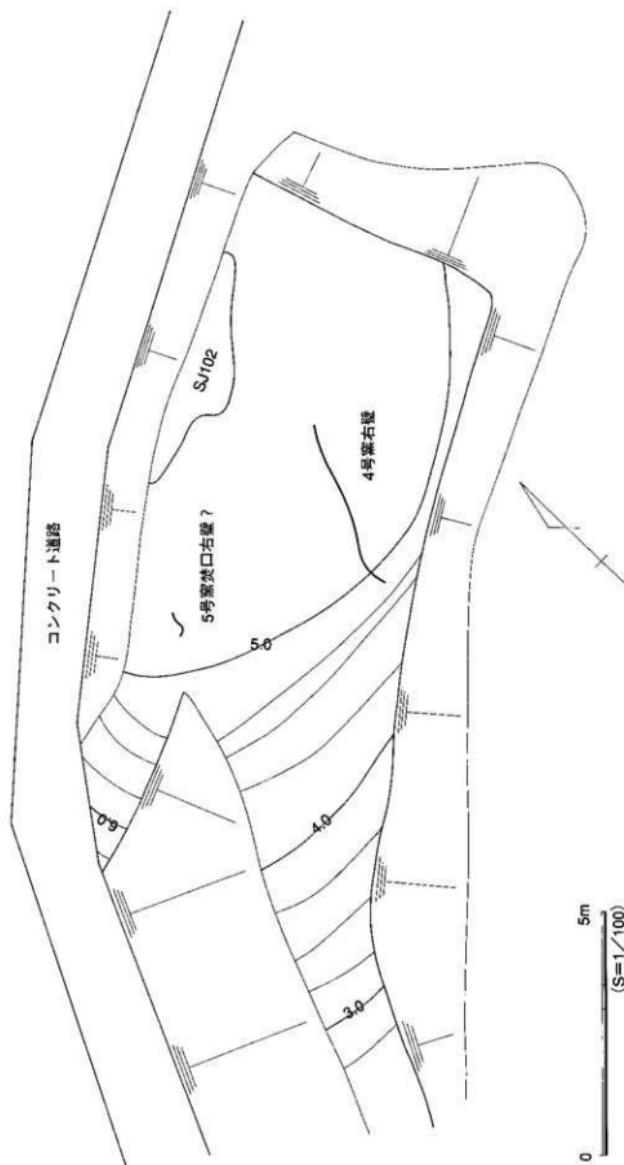
以上のように、J区下段の調査に関しては当時の汀線が検出できないかと期待したが、耕作土の客土をおこなう際に旧表面が削平された可能性が高く、確かな結果を得ることはできなかった。

付録 (J区の地質学的指導会の復命書)

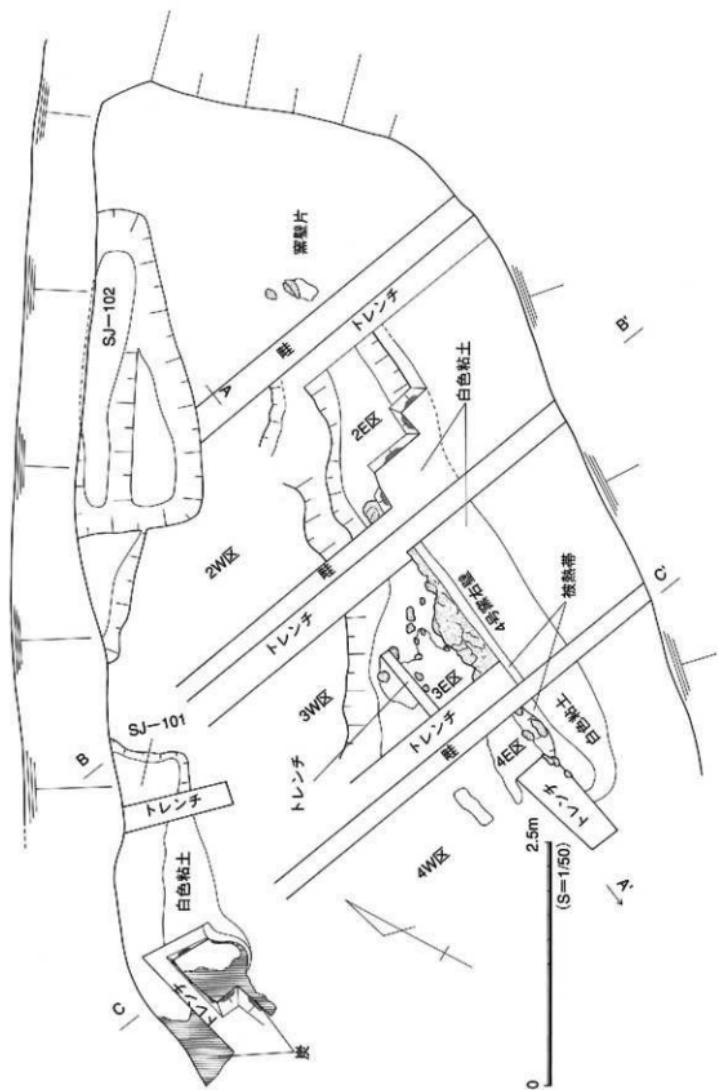
J区では平成15年2月14日に、三瓶自然館の中村唯史氏を招き、現地における指導を依頼した。その折の復命書をここに転載しておく。

「復命 J区について

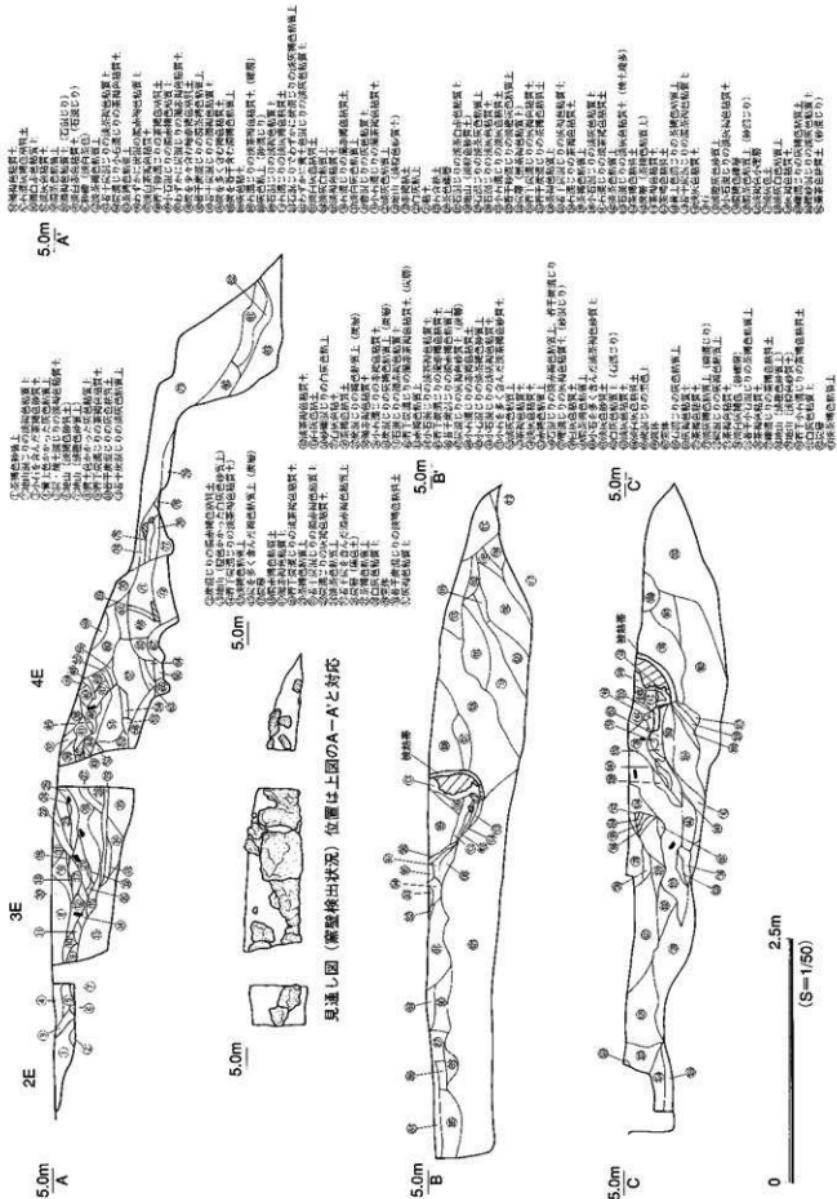
J区上段では4号窯が検出された。4号窯は右側窯壁の一部と燃焼室付近の床面若下のみが残存



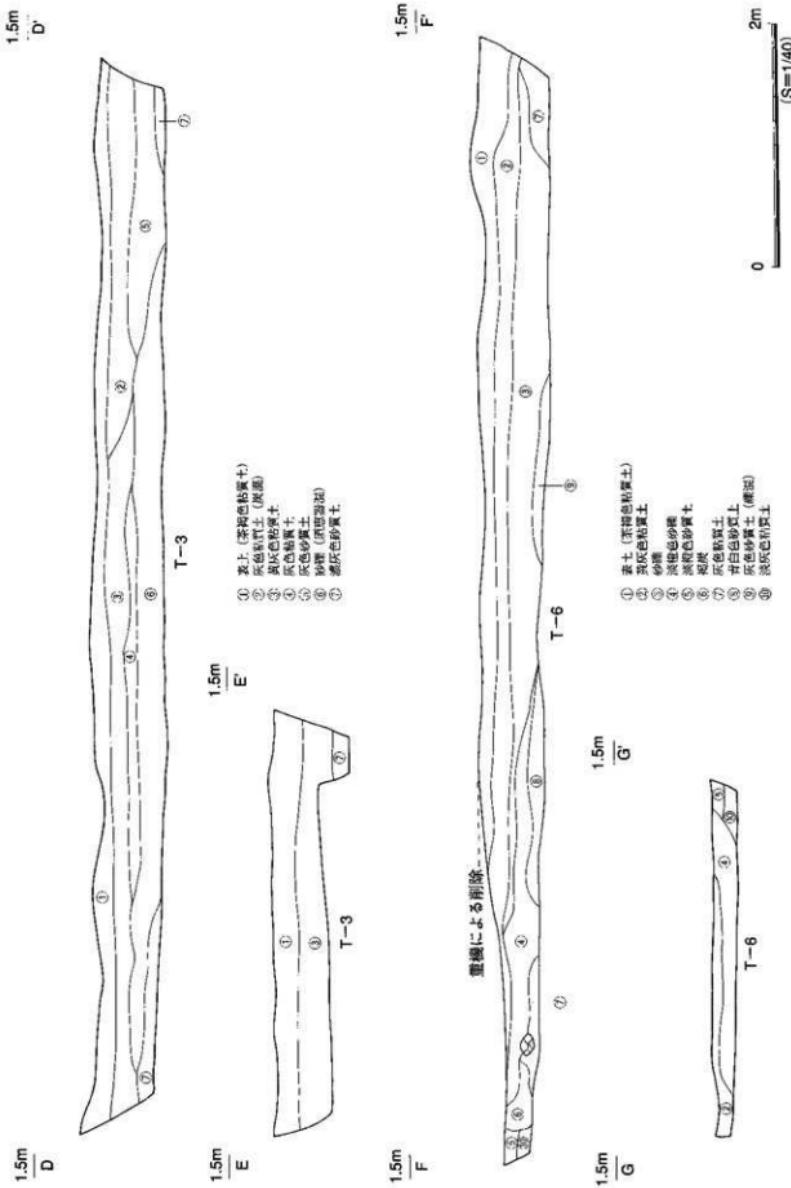
第240図 J区（上段） 調査前地形測量図



第241図 J区（上段）造構配置図



第242図 J区 山津4号塞断面図



第243図 J区(下段) T-3・T-6 土層断面図

している状況であった。そこで、左側窓壁、またはその痕跡を検出するため、推定主軸とその直角方向に二本のトレンチを掘って様子を見た。その結果、本来であれば左側窓壁が存在するはずの場所で、右側窓壁の下端より高いレベルの地山を検出したのである。

この事実は窓としてはあり得ない事であり、考古学の範囲では解釈不能であると判断したため、地質学の専門家、中村氏に指導を依頼した次第である。

指導内容

1 現地を觀察された結果、下記の①～④の点を指摘された。

- ① 燃焼室付近の窓体外側にある赤変粘土は整然とアーチ状に残っているが、床面付近の赤変粘土は上方にズレが生じている。
- ② 右側窓壁の内側には左下がりの厚い炭層が堆積しているが、この事は周辺の地形から考えて不自然である。
- ③ 焼成室と思われる場所では、右側窓壁から推測して本来、左側窓壁が存在すべき位置で、右側窓壁下端より20～30cm高い完全な地山を検出し、しかもこの地山は右壁の下に潜り込んでいる状況を確認した。
- ④ 焼成室の奥方向で、右側窓壁が残存していない場所で、窓体・赤変粘土・白色粘土が小さな一塊となって出土している。

2 以上の事から、下記のような事が考えられる。

I ①②より、燃焼室より手前は左奥側からのエネルギーを受けて逆断層を起こしている可能性が高い。

II ③④より、4号窓は本来、現位置よりも左奥高所の急傾斜地に存在していたが、エネルギーを受けて現位置まですべり落ちた可能性が高い。特に③の状況では、そう考える他に無い。ここで考えられるエネルギーとは、窓が存在する丘陵の南端が垂直に削れられているが（その時期は不明）、そのような上木工事でも十分起こり得る事である。以上のような結論を得たが、セクション等の積極的根拠となる事実が見つからないため、あくまでも推測の域を出るものではないとのことである。

以上

復命者 江川幸子」

J区 遺物

(藤原 哲)

J区では山津4号窓が検出されている。ただし、4号窓は造構の項目で報告しているように、地すべりによって崩落している窓である。その為、良好な須恵器窓の床面資料や、灰原資料としての取上げは出来なかった。

現場においては、現状の窓壁の位置に対応させてセクションを設け、A-A' と畔を境として窓壁の内側を2E区、2W区、3E区、3W区、4E区、4W区……と区分けして遺物を取り上げている(第241図)。これらの埋土は黒色の炭層で、元来は灰原と考えられる包含層である。しかし、窓自体が

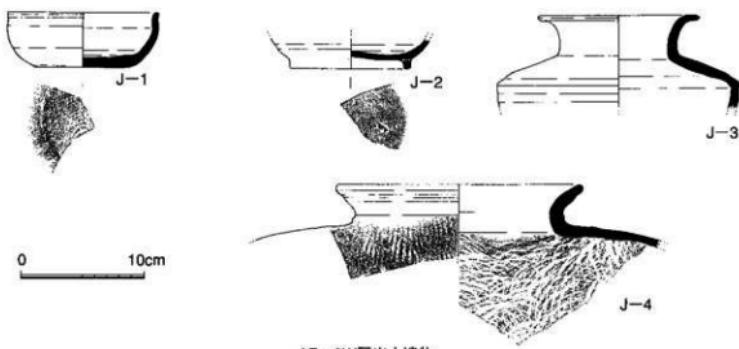
地すべりを生じているので、灰原白体も原位置を保っていない可能性が考えられる。

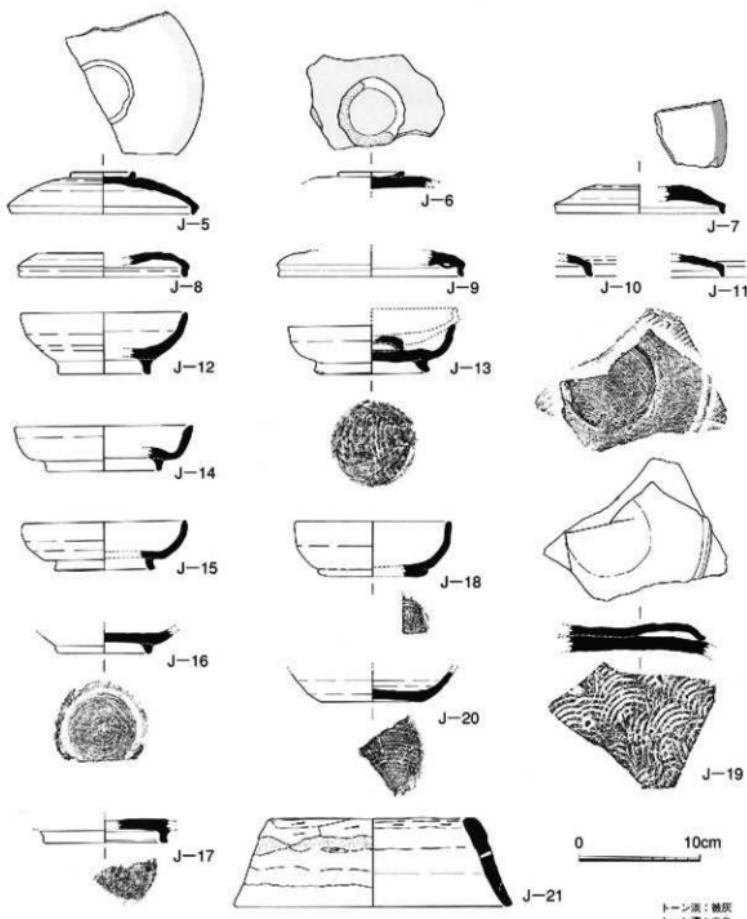
4号窯周辺に堆積している黒色炭層の出土遺物については、相対的に比較的まとまった時期のものと判断出来るもの、中には若干混入と考えられる遺物も出土している。現場担当者の調査地の所見では、黒色の炭層については3E区周辺が最もプライマリーな状況で残存が良好と考えられ、その他の地区には地すべりなどによる遺物の混入の可能性も考えられるということであった。

出土遺物については、J-1~102が山津4号窯と呼称された窯壁片周辺の出土遺物である。特に詳細な出土地点を第241図に即して言えば、J-1~4が2E区・2W区の地点からの出土遺物であり、J-5~21が3E区からの出土遺物である。J-22~33は3E区と3W区との間にある3区の中央畠からの出土遺物、J-34~68が3W区の出土遺物、J-69~83が4W区の出土遺物である。また、J-84~94は4W区の南西に位置する5W区の出土遺物である。以下、個々の遺物について概要を述べる。

J-1~4は山津4窯・2E・2W区の出土遺物である。2E・2W区は山津4号窯の右壁より北側に位置し(第241図)、出土遺物の量は少なかった。J-1は壺Cで25%残、底部の調整は糸切り→ナデで、口縁端部が僅かにくびれる。J-2は高台片である、底部の切り離しは静止糸切りと思われるが、切り離し後にナデしているので、やや不明瞭である。J-3は壺の口縁部分である、口縁部分は直口として端部で大きく聞く、肩部が強く張って稜角をなし、ほぼ直で下りているので壺Xの口縁部分と考えられる。J-4は壺Cで、体部の調整はタタキである。

J-5~21は山津4窯・3E区の出土遺物である。3E区は山津4号窯の最も残りの良い右壁部分の西側に位置し(第241図)、調査時の所見では、最も混人が少ないと考えられる出土遺物である。J-5~11は蓋で、壺Fの蓋と考えられる。J-5は50%残、(復)口径14.8cm、器高3.4cm、つまみ径5.4cmを測る、端部がやや内側に屈曲し、輪状つまみを付した壺Fの蓋で、天井の調整はケズリである、外面に重ね焼き痕と考えられる円形に沿った被灰が認められる。J-6は被灰と傷みが激しく、二次





3E区出土遺物

第245図 J区 山津4号窯出土遺物②

焼成を受けていると思われるつまみ片である。J-7は端部が屈曲する破片で、外面には重ね焼きと考えられる変色が認められる。J-8・9も端部が屈曲する破片で天井部の調整はケズリ、ただしJ-9は火彫れや傷があり調整痕は不明瞭である。J-10・11は端部が屈曲する蓋の微細片で、復径が不可能である。

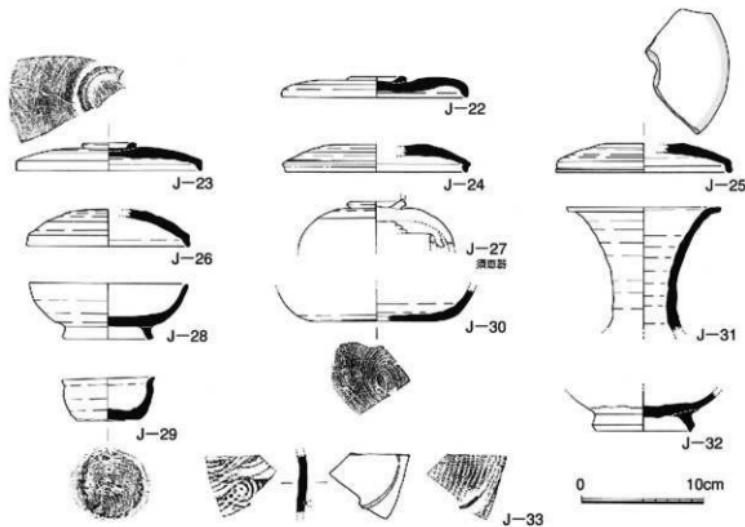
J-12~15は壺Fの身で、J-16・17も壺Dと思われる高台片である。J-12は30%残、(復)口径13.6cm、器高5.0cmを測る、底部の残存状況が僅かのため不明瞭であるが、底部調整はナデか、やや軟質な焼き上がりである。J-13は60%残で(復)口径13.6cm、器高9.5cm、高台径9.5cmを測る、底部の切り離しは静止糸切りで、糸切り後に単印のヘラ記号を記す、内面中央部に輪状つまみが逆さになつて溶着しているので、壺Fのセットで焼成した痕跡と考えられる、また、体部外面に被灰が見られる。J-14は10%残で、やや歪んでいる、底部調整は不明。J-15は25%残で(復)口径13.4cm、器高3.9cm、高台径8.2cmを測る、底部の残りが遡いため、底部調整は不明、焼成は良好で灰色を呈している。J-16は底部片で底部の調整は糸切り→ナデ、円弧状の痕跡がある、また底部に沈線が走るがヘラ記号か。J-17は高台の細片、二次焼成を受けているのか傷みが激しい、底部の最終調整はナデである。

J-18は塊である、底部は糸切り痕と思われるものが残るが、かなり粘土が柔らかい段階で切り離しているよう、底部の粘土が厚く盛り上がり、二段底のような形態になっている、15%ほど残のものを反転すると図のような(復)口径12.8cm、器高4.5cmの平底の塊になるが、小片のため詳細は不明とせざるを得ない。J-19は塊と慶片とが溶着した資料である、塊(図の上部)は完全に扁平に変形してしまっているが、底部は静止糸切りによって切り離されており、口縁端部がくびれていたことが観察出来るので塊Aであろう。

J-20は静止糸切り痕を残す壺、又は壺の底部である。J-21は焼台である、ケズリと回転ナデで調整されており、焼台としては比較的丁寧な作りである、空気抜けと思われる刺突による穿孔が一箇所認められる。

J-22~33は山津4窯・3区の中央畦からの出土遺物である。これは3E区と3W区とに挟まれた南北畦内(第241図)からの出土であり、調査時の所見おいては3E区に次いで混入が少ない地区と判断される。

J-22~27は蓋で、どれも壺Fの蓋と考えられる。J-22は壺F蓋の完形品である、端部がゆるやかに屈曲した輪状つまみを付した蓋で、口径15.2cm、器高1.8cm、つまみ径4.8cmを測るが歪みと火彫れが認められる、焼成はやや不良で、内面は黒赤色、外面は灰色を呈し、また外面に灰が被っている、外面の調整はケズリで、つまみ内はナデが施されている。J-23の蓋は20%残で(復)口径15.0cm、器高2.2cm、つまみ径4.5cmを測る、焼成は良く灰色を呈している、外面はケズリが施されており、つまみ内の調整は糸切り→ナデか。J-24~26は口縁端部が屈曲する蓋片で、つまみ部分は何れも欠損している(J-26は輪状つまみの剥離痕が残る)、また、外面はどれもケズリを施しており、J-25には重ね焼きと思われる円形の変色がある。J-27は蓋の溶着資料で輪状つまみを付す蓋の内面に、端部が屈曲する蓋と思われる須恵器片が付着し、更にその内面に蓋とセットに関係にあったであろう須



3区（中央アゼ）出土遺物

トーン法：被灰

第246図 J区 山津4号窯出土遺物③

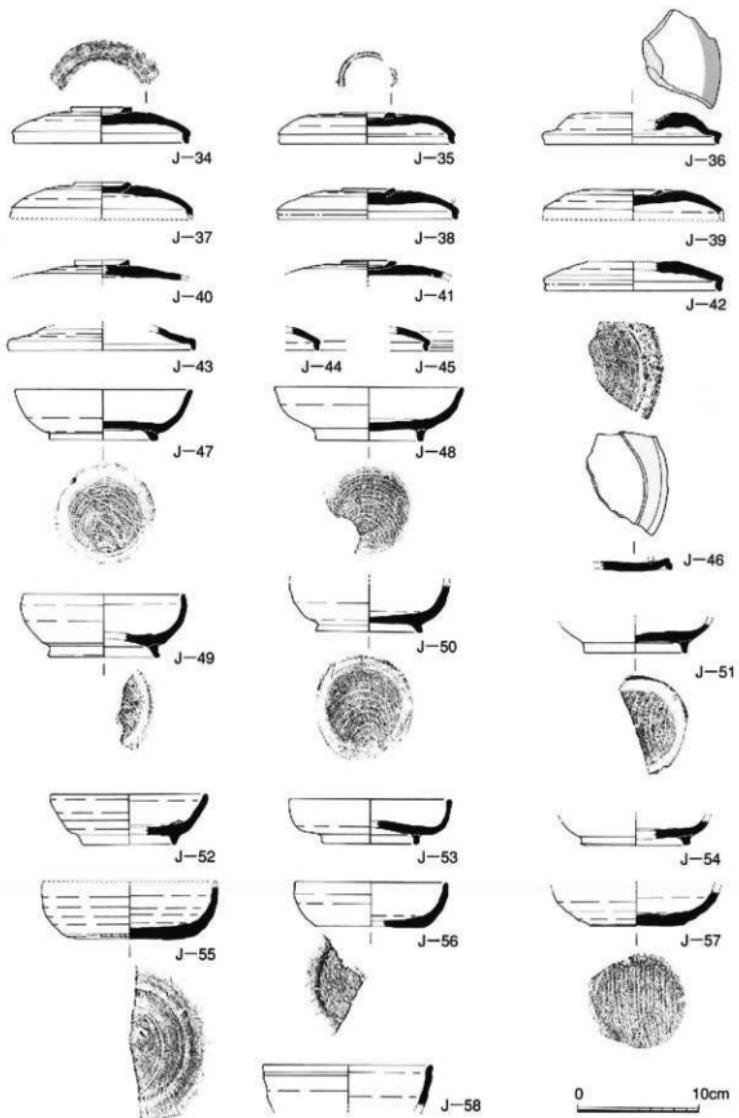
恵器片（坏Fか？）が溶着している。

J-28は坏Fの身である。30%残で（復）口径13.0cm、器高4.5cm、高台径7.4cmを測る、見込み部分に中央に向かった放射状の仕上げナデが見られる、被灰と傷みが激しく二次焼成か、底部の調整は被灰のため不明である。

J-29は小型の壺（壺E）である、90%残で口径7.5cm、器高5.0cm、底径3.6cmを測る、底部の切り離しは回転糸切りである、また内面に厚く被灰している。J-30は底部片の網片で、底部の切り離しは回転糸切りである。J-31は長頸壺の口縁か、口径12.6cm、残高10.5cmを測る。J-32は高台片で、高台の剥離痕が明瞭である、焼成はやや軟質で白灰色を呈している。J-33は菱片転用の置台で、円形の剥離痕と被灰とが見られる。

J-34～68は山津4窯・3W区の出土遺物である。3W区は3E区から向かって西側の、4号窯右壁と反対方向に位置し。この地点では窯壁は存在しなかった地点である（第241図）。黒色の炭層からは比較的大量的遺物が出土している。

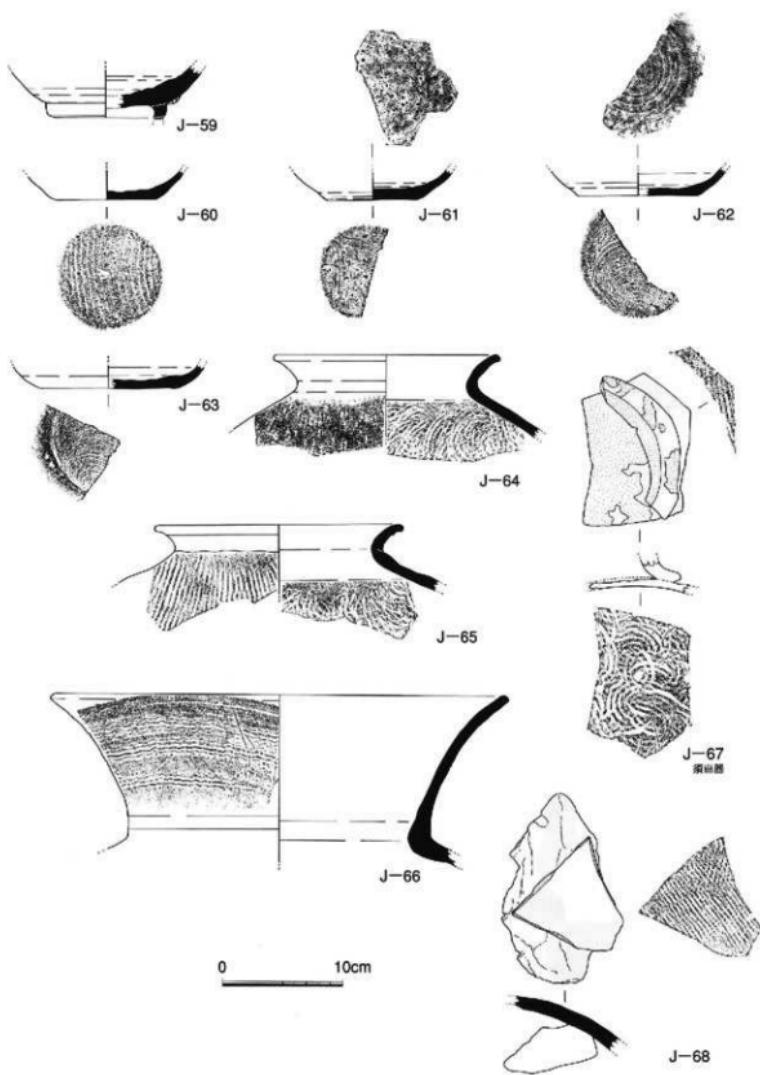
J-34～45は蓋で、何れも坏Fの蓋と考えられる。J-34は25%残で（復）口径14.4cm、器高2.9cmを測る、口縁端部が屈曲し、輪状つまみを付した蓋で、天井部に円弧状の沈線が巡っている。J-35は15%残、口縁端部が緩やかに折れ輪状つまみを付した蓋で、つまみ部の上面に凹みによる段を作っ



3W区出土遺物①

第247図 J区 山津4号窯出土遺物④

トーン淡：被灰
トーン濃：実色



3W区出土遺物②

トーン演：板灰

第248図 J区 山津4号窯出土遺物⑤

ている。J-36は端部の小片で歪み有り、外面に重ね焼き痕と思われる変色が見られる。J-37は20%残で口縁端部を欠損している、(復) つまみ径4.8cm、残高2.8cmを測る、端部が屈曲した輪状つまみを付す蓋である。J-38は80%残、口径14.8cm、器高2.5cmを測る。J-39は端部が欠損する輪状つまみの蓋である。J-40・41は輪状つまみを付した天井片で、外面調整はケズリ、つまみ内はナデを施している。J-42・43は蓋の端部片で、端部が下方に屈曲している。J-44・45は復径が不可能な蓋の微細片である。J-46は蓋片で、天井部に別の須恵器片とその外方に灰を被る、被灰が厚く歪みも生じてるので、一時焼成時(重ね焼き)のものか二次焼成時(置台転用)の痕跡なのかの判別は困難である。

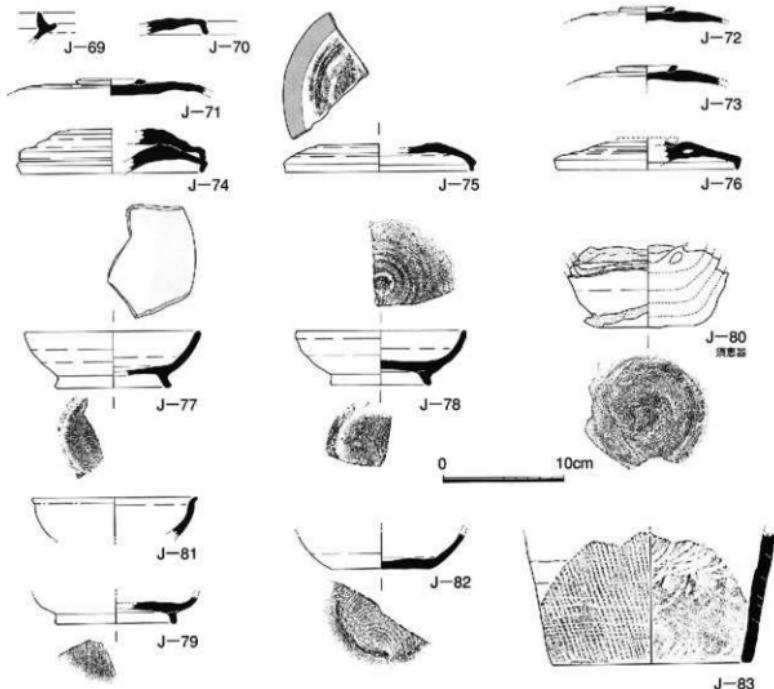
J-47~54は壺Fの身、又は高台片である。J-47は60%残で(復) 口径14.7cm、器高4.1cm、高台径9.9cmを測る。軟質で非還元炎焼成の黄灰色を呈しており調整は不明瞭、ただし底部の切り離しは(静止) 糸切りである。J-48は80%残であるが歪みが激しい、(復) 口径15.6cm、器高4.4cm、高台径9.0cmを測る、底部の切り離しは静止糸切りである。J-49は20%残、やや歪む、底部の切り離しは静止糸切りである。J-50は体部が丸みを帯びた(壺F)の高台片で、高台径8.8cm、残高3.9cmを測る、底部の切り離しは静止糸切りである。J-51も壺Fの身と考えられる高台片で、内外面に被灰しており傷みが見られる、底部の切り離しは静止糸切りである。J-52は30%残、(復) 口径13.0cm、器高4.1cm、高台径4.1cmを測る、内面に別の須恵器片が付着しており外面に被灰する、底部の切り離しはヘラ切りである。J-53は壺Fの身でやや歪むか、30%残で(復) 口径13.4cm、器高3.6cm、器高8.0cmを測る、底部調整はナデである。J-54の高台片は二次焼成を受けている、内外面に被灰しているので底部の切り離しは不明。

J-55~58は壺である、J-55は壺A、30%残で(復) 口径8.8cm、残高4.4cmを測る、底部の調整はヘラ切りか、底部には円弧状の沈線があり、底部周辺にはT字痕と思われる条痕が見られる。J-56は20%残の壺Aである、(復) 口径12.6cm、器高3.6cmを測る、底部調整は糸切り→ナデで、全体的に風化が認められる。J-57は底径7.8cmを測る底部片で、底部の切り離しは静止糸切りである。J-58は口縁端部の小片で端部がややくびれる。

J-59~63は壺や壺の底部片である。J-59は高台を付した厚手の壺底部で、(復) 高台径は9.5cmを測る、高台の接地面に剥離痕が残っている。J-60は底径8.2cmを測る底部片で、底部の切り離しは静止糸切りである。J-61は平底の底部片で、底部調整は静止糸切り→ナデ?である。J-62も底部片で(復) 底径10.0cmを測る、底部の切り離しは回転糸切りである。J-63は底部片、底部の切り離しは回転糸切りか。

J-64~66は壺である。J-64は壺Cで(復) 口径18.8cmを測る、体部の内外面はタタキ調整である。J-65も壺Cで(復) 口径20.6cmを測る、体部の内外面調整はタタキである。J-66は壺Aで、(復) 口径37.8cmを測り、波状文を施している。

J-67は壺片を転用したと思われる置台か、壺の体部片は剥離が顕著で、これに溶着している須恵器片は1.3cmと厚みがあり、その端部が丸みを帯びている。J-68は大型の自然蝶に壺片が溶着しており、壺片と蝶には黄灰を被っている。



第249図 J区 山津4号窯出土遺物⑥

トーン淡：黒灰
トーン濃：栗色

J-69~83は山津4窯・4W区の出土遺物である。窯壁残存の最も南に位置する4E区からは実測可能な遺物が出土しておらず、その西の4W区からは若干の遺物を検出している（第241図）。

J-69は壺Hの微細片である。J-70~76は蓋片で何れも細片である。J-70は復径が不可能な蓋の微細片である。J-71~73は輪状つまみを付した天井片で、何れの調整も外表面はケズリ、つまみ内はナデである。J-74は蓋の重ね焼きを示す溶着資料で、端部が屈曲する蓋片が二個体分溶着している、つまみ部分は欠損のため不明であるが輪状のつまみが付していたと思われる。J-75は細片、天井部の切り離しは静止糸切りか。J-76は30%残で歪み・火彫れが認められる、輪状つまみが付していたと考えられる。

J-77~79は壺Fの身である。J-77は25%残で（復）口径14.3cm、器高4.6cm、高台径9.4cmを測る、底部の切り離しは静止糸切りで、内面に白灰をかぶり、円形の重ね焼きと思われる痕跡が残る。J-78は25%残で（復）口径14cm、器高8.2cm、高台径8.2cmを測る、底部の切り離しは糸切りで、内

面に円形の凹みが見られる。J-79は高台片で底部には静止糸切り痕が残る。

J-80・81が塊、及び底部片である。J-80は塊Aの重ね焼きを示す溶着資料で、少なくとも五重の塊が重なっている、最も外側の底部の切り離しは回転糸切りである。J-81は端部がくびれてい、塊Aか、細片で風化が見られる。

J-82は平底の底部片で、底面に回転糸切り痕が残る、J-83は瓶と思われる細片で、残存部分には穿孔はなし、体部の内外面はタキ調整である。

J-84~94は山津4号窯5W区の出土遺物である。5W区は4W区の南に位置しており、4号窯右壁からみて西南西部分にあたる。

J-84は扁平な擬宝珠つまみを付した蓋の天井片である、体部は丸みを帯びており、焼成はやや甘く白灰色を呈している、内面にヘラ記号を記している。

J-85は塊Fの身である、60%ほど残で（復）口径14.7cm、器高5.4cm、高台径9.4cmを測る、底部の調整はナデ（ヘラ切り→ナデ？）である、口縁外面に沈線を施しており、風化が著しい。J-86~88は塊Fと思われる高台片で、J-86はヘラ記号を記しており、J-87は底部に静止糸切り痕を残し、J-88の底部調整はナデである。

J-89はⅢ、又は塊か、破片のため天地が不明である。J-90はⅢDで歪みがある、底部の切り離しは糸切りである。J-91は扁平な塊Aで口縁がくびれる、底部の切り離しは糸切りで、内面にヘラ記号を記す。

J-92は壺の高台片であるが、体部と高台部とは色調の具合が極端に異なっている、使用した粘土が異なるためであろうか。

J-93は瓶である、（復）底径5.7cm、残高4.9cmを測る、底部の切り離しは静止糸切りであり、穿孔部分の外面上には、孔に沿って粘土を貼りつけている。

J-94は瓶の口縁部を転用した置台で、被灰が激しく二次焼成が顕著である、径8.5cmの円形の剥離痕が残っている。

J-95~102は4号窯周辺の各種アゼ・トレンチから出土した遺物である。

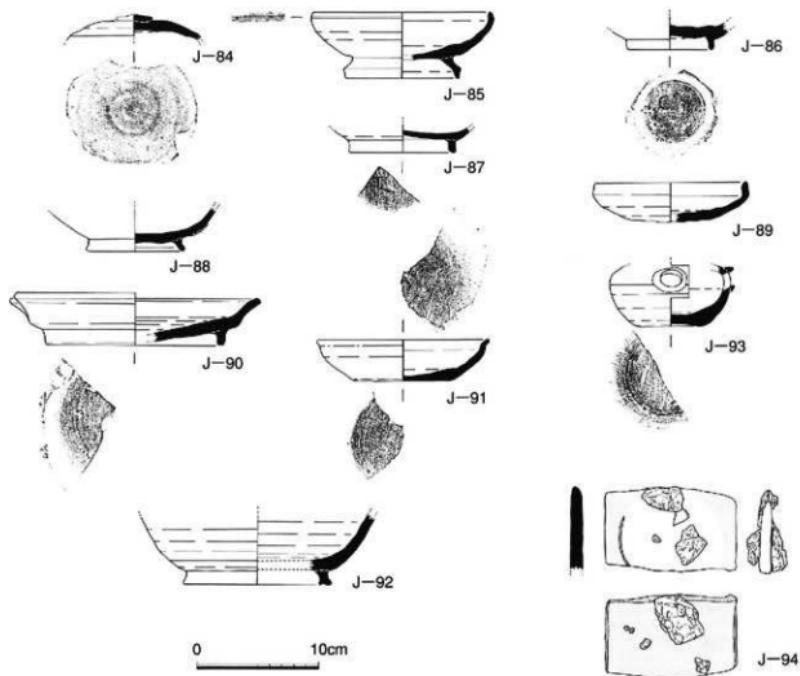
J-95は塊Fの蓋で25%残、（復）口径15.6cm、器高2.3cm、つまみ径6.6cmを測る、外面に重ね焼きと思われる円形の変色部分がある。

J-96~98は塊Fと思われる高台片である。J-96の底部の切離しは回転糸切りで、内面に重ね焼きと思われる円形の変色部分がある。J-97の底部調整はナデか、円弧状の沈線が巡る。J-98は被灰がある、二次焼成で転用しているのであろうか。

J-99~102は塊、及びⅢである。J-99は塊Aで底部の切り離しは静止糸切りである、口縁端部は沈線状の凹みがある。J-100は40%残の塊Aで、底部の切り離しは糸切りである。J-101は底部片で静止糸切り痕が残っている。J-102はⅢCの細片で、底部の切り離しは糸切りである。

J-103~106はJ区（上段）の南側ストロープ出土遺物である。これは山津4号窯の南に位置する斜面地帯（第240図）から出土した遺物である。

J-103は塊Aである、40%残で（復）口径13.7cm、器高4.0cm、底径10.6cmを測る、底部の切り離し



5W区出土遺物
第250図 J区 山津4号窯出土遺物(7)

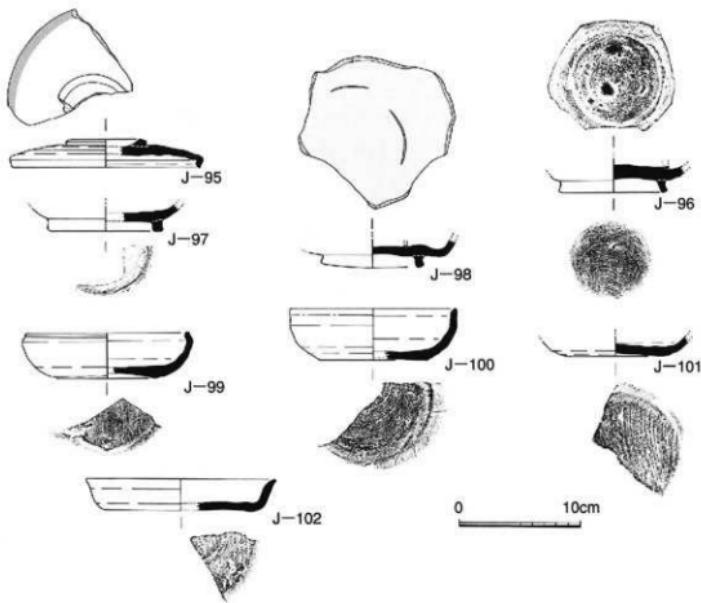
トーン添：被灰

は回転糸切りである。J-104は塊Aの溶着資料で、現存では少なくとも五重の重ね焼きが認められる、最も外側の底部には回転糸切り痕が残る。J-105は皿Fである。J-106は細片のため全形は不明、顕、又は焼台か。

J-107-113はS J 101出土上遺物である。S J 101はJ区上段の北西端に位置する土坑で、一部が測査範囲外にかかっているため形状は不明であるが、深さは20cm前後を測る。

J-107は蓋の細片で口縁端部が畳曲する。J-108は皿Fの蓋、25%残で内面に重ね焼き痕と思われる円形の変色が見られる、外面は黄灰を被っている。J-109は蓋片でつまみ部分は欠損のため不明、外面に薄く灰を被る。J-110も蓋片で、微細片なため復元が不可能である。

J-111は皿Fの身で40%残、(復)口径14.6cm、器高4.6cm、高台径9.2cmを測る、底部の切り離しは(静止の?)糸切りである。J-112は細片で口縁端部を欠く、底部調整はナデ。J-113は貼り付けの高台部分が剥離している、底部の調整はナデである。



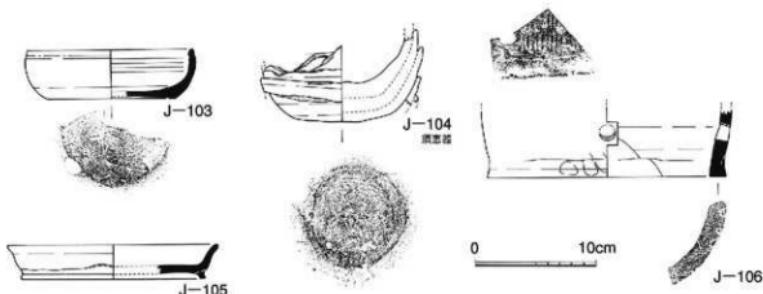
山津4号窯（周辺）・アゼ・トレンチ出土遺物

第251図 J区 山津4号窯出土遺物⑧

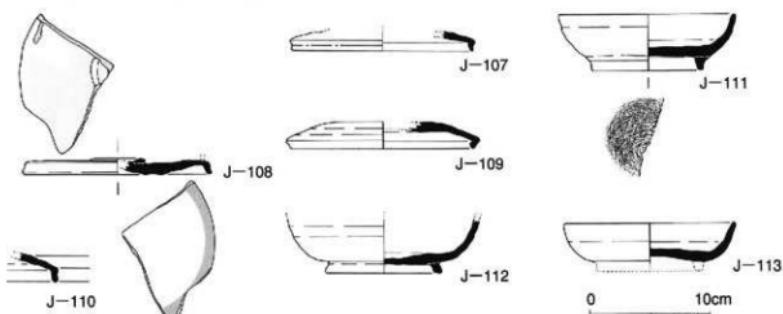
J-114～136はS J 102出土遺物である。S J 102はJ区北端で検出されており、一部が二段掘りの東西方向に細長い隅丸方形の土坑で、上端1.6×0.6m、下端1.3×0.2m、深さ約50cmを測る（第241図）。

J-114～120は蓋である、環Fの蓋と思われる。J-114は25%残、（復）口径16.4cm、器高2.1cm、つまみ径4.2cmを測る。J-115は25%残、端部が屈曲し輪状つまみを付した環Fの蓋で、外面はケズリ、つまみ内面はナデ調整である。J-116も同じく環Fの蓋、屈曲している口縁端部の外面には沈線を施したような段がある。J-117は輪状つまみを付した天井片で、つまみ径は5.0cmを測る。J-118も同じく天井片、天井部は回転ヘラケズリを施しており平坦である。J-120は口縁端部が屈曲する蓋片で、つまみ部分を欠損している。

J-121～128は環F、および高台部分である。J-121は環Fで30%残、（復）口径13.2cm、器高7.2cm、高台径7.2cmを測る、底部の調整はケズリで、風化が認められる。J-122は被灰が激しく二次焼成を受けていると思われる、底部の調整は被灰のため不明瞭である。J-123は歪みの大きい環Fの身で、底部の調整は糸切り→ナデか、ナデのため切り離し痕が不明瞭である。J-124は30%残の環Fの身である、底部の切り離しは糸切り→ナデである。J-125は高台片、底部調整はナデで内面（見込



調査区南側・スロープ出土遺物
第252図 J区（上段）出土遺物①



SJ101出土遺物
第253図 J区（上段）出土遺物②

トーン塗：焼成
トーン塗：変色

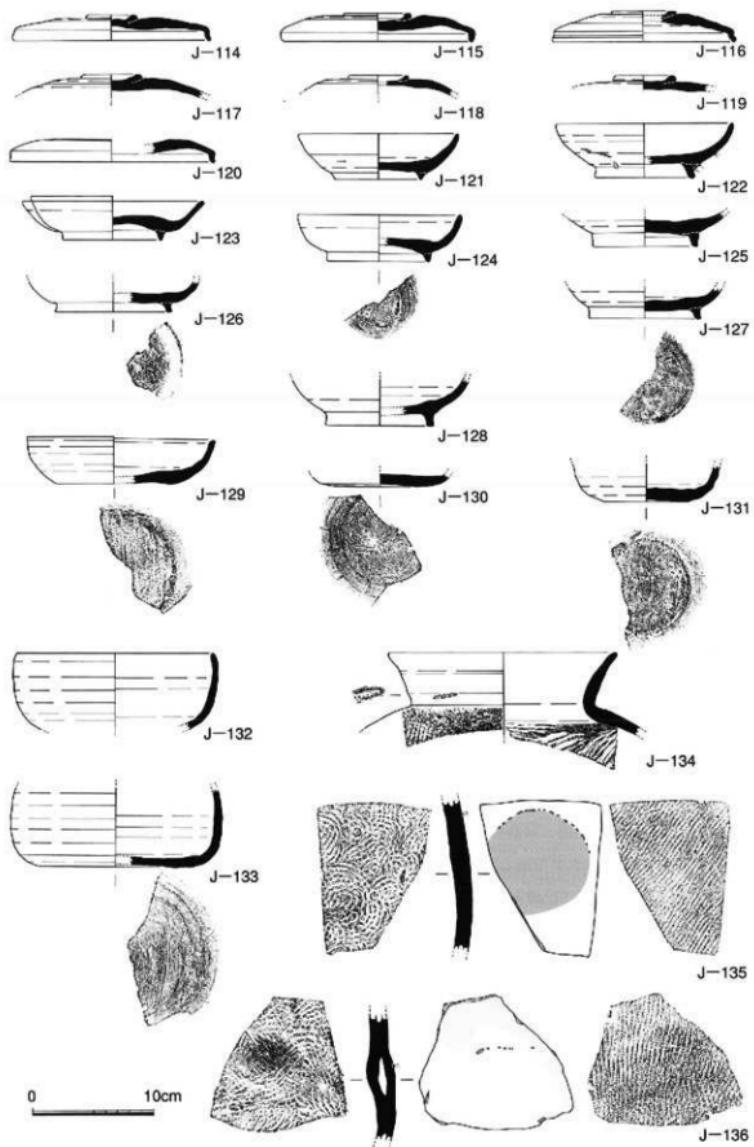
み）に被灰する。J-126も高台片で、（復）高台径9.5cmを測る、外面に被灰し傷みが激しい、二次焼成か。J-127は焼成が甘く赤褐色を呈している、底部の調整は糸切り→ナデである。J-128も高台片で底面に被灰する。

J-129～133は塊である。J-129は塊Aで、30%残であるが歪みが大きい、底部の切り離しは静止糸切りである。J-131は底部調整が糸切り→ナデと思われる。J-132は（復）口径16.2cmを測る大型の塊Bである。J-133も塊Bか、底部の切り離しは静止糸切りで、その周辺をケズっている。

J-134は壺Cで口縁の内外面に被灰する。J-135・136は壺片を転用したと思われる置台で、J-135は円形の剥離痕と変色、J-136は別の須恵器の剥離痕が残る。

J-137～140はJ区の下段・各トレンチの出土遺物である。トレンチから出土した遺物は僅かで、実測可能であったのはJ-137～140であった。このうち、J-137～139がJ区下段・T-1出土遺物、J-140がJ区下段・T-5出土遺物である。

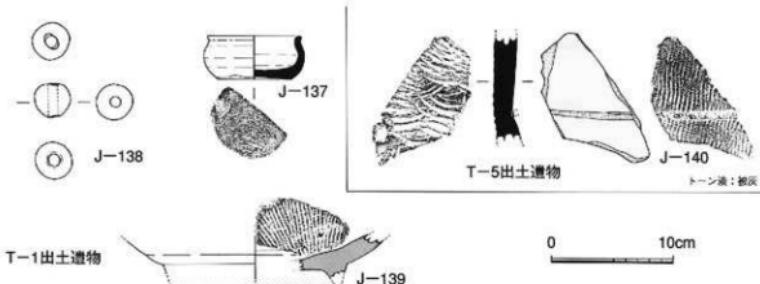
J-137は須恵器の小壺（壺E）で、底部には糸切り痕が残っている。J-138は土玉で長さ2.7cm、



SJ102出土遺物

第254図 J区（上段） 出土遺物③

トーン淡：桃灰
トーン濃：金色



第255図 J区（下段） トレンチ出土遺物

幅2.9cm、孔径0.8cmを測る、淡橙色を呈しており上師質と思われる。J-139は陶器の擂鉢である。

J-140はJ区下段・T-5出土遺物で、盤片を転用したと思われる置台である、別の須恵器片の割離と被灰が見られる。J-141～162はJ区のその他（表土・トレンチ）から出土した遺物である。

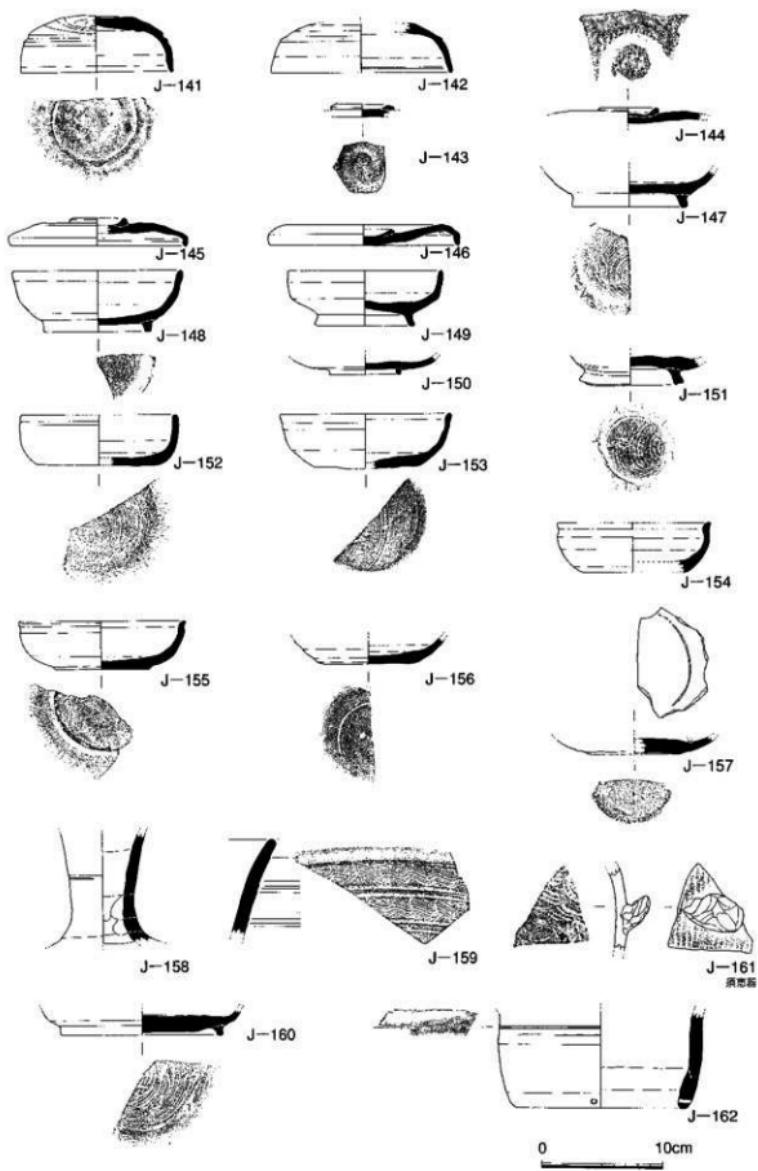
J-141・142は壺Hの蓋である、J-141は約50%残で歪みが大きい、内面に接合痕と思われる痕跡が残っている。J-142は壺H蓋の破片で（復）口径14.8cm、器高4.0cmを測る。

J-143～146は輪状つまみを付す蓋片で、壺Fの蓋と考えられる。J-143は輪状のつまみ片で、内面にX印のヘラ記号を記す。J-144は天井片で、底部の調整は静止糸切り→貼り付け高台で、つまみ周囲に糸切り痕が残る。J-145は端部が屈曲し、輪状つまみを付した蓋、20%残でやや軟質なため灰白色を呈している。J-146は25%残、（復）口径15.8cm、器高1.7cm、つまみ径5.1cmを測る、歪みで凹んでおり外側に被灰する、また内面に壺Fの蓋片と思われる剥離痕が残る。

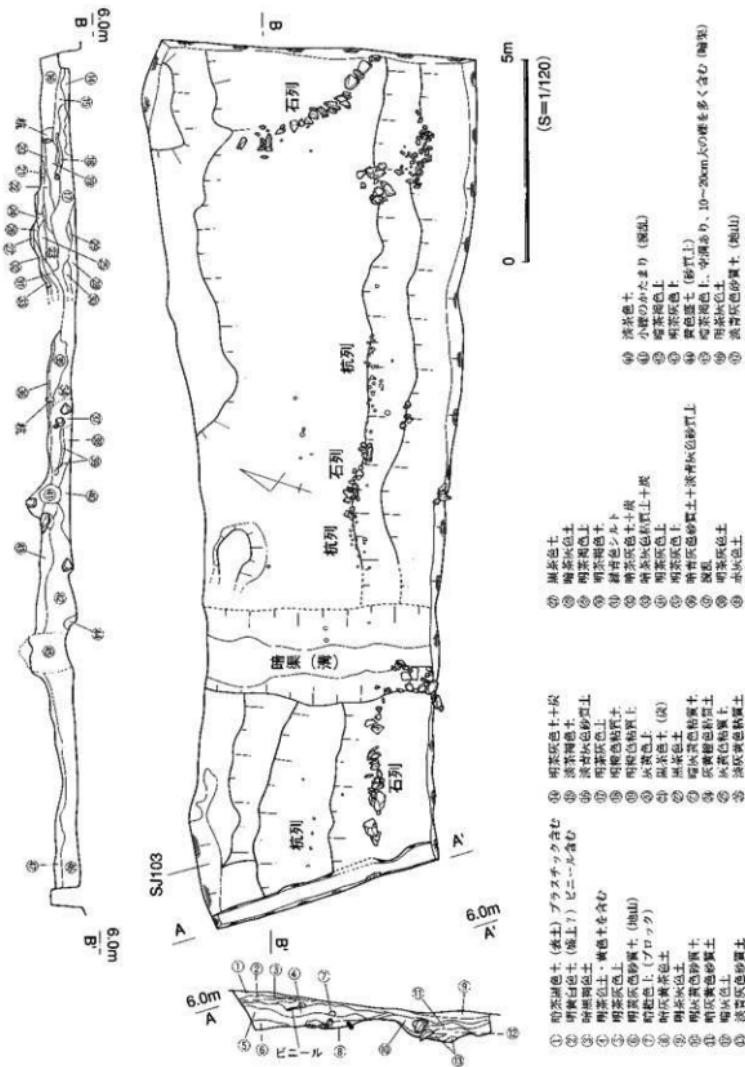
J-147～151は壺F、および高台片である。J-147は回転糸切り痕を残す高台片。J-148は（復）口径13.8cm、器高5.0cm、高台径8.8cmを測る細片で、底部調整は静止糸切り→ナデである。J-149は20%残、（復）口径12.8cm、器高4.5cm、高台径8.2cmを測る。J-150は0.5cmと低く小さい高台を付している、底部の調整はナデである、蓋の可能性もある。J-151は歪みがある、高台部分は完存で高台径は8.6cmを測る、底部には静止糸切り痕が残る。

J-152～157は塊A、及び底部片である。J-152は塊Aで30%残、（復）口径12.8cm、器高4.1cmを測る、底部の切り離しは回転糸切りである。J-153は30%残の塊Aである、底部には糸切り痕が残る。J-154は塊Aで、底部は欠損しているため切り離しは不明である。J-155の底部の切り離しは糸切り→ナデ、糸切りによって底部は二段底のような形態になっている。J-156は底部片である、焼成は軟質で橙褐色を呈している、底部の調整はナデである。J-157は底部の小片、切り離しは静止糸切り未調整で、内面には別の須恵器の剥離痕が見られる。

J-158は長頸壺（壺K）、J-159は塊A、J-160は皿の高台、J-161は須恵器の把手片、J-162は盤片である。



第256図 J区 表土・トレンチその他出土遺物



第257図 J-2区 平・断面図

J-2区はJ区上段の北東部に接した地点である。現地は急傾斜地帯であったため、表土から全て人手掘削にて調査を実施した。

J-2区の基本層序は以下の通りである。調査地は約20度の勾配を持つ傾斜地であり、表土の下に茶褐色の旧耕土や暗灰褐色土、又は黄褐色上の盛土などが堆積している。G.L.-40~80cmからは青灰色の良くしまったシルト層の地山が検出できた。地山面をカットするように、部分的に平坦面が2~3段ほど認めることが出来、その上に旧耕作土が堆積している。また、平坦面と斜面との間には石列や杭列などが検出できた(第257図)。

そのため、調査区内は段々畠状の旧耕作地が抜がっていたと考えられる。出土遺物は須恵器片を中心であり、僅ながら近・現代の陶磁器片が出土している。本調査地のすぐ西には山津4号窯があり、周辺は須恵器片の散布が著しいため、出土した多くの須恵器片は旧耕土や、造成時の盛土によって混入したと考えられる。須恵器片が多くローリングを受けていることから判断しても、客土による堆積の混入である可能性が高い。したがって、本調査区の杭列・石列は出土した陶磁器片から近・現代の耕地(段々畠)に関連した土留め等のものと判断したい。

これら近・現代の耕地の他には、調査区北西隅においてS.J.103を検出した(第259図)。これは須恵器片と小蝶とを敷き詰めたような状態にあり、遺物のほぼ全てが須恵器の甕片であるため、詳細な時期比定は出来なかった。併し、F区において同様の小道状の遺構(S.F.230)を検出しており、類似した機能であった可能性も指摘できよう。

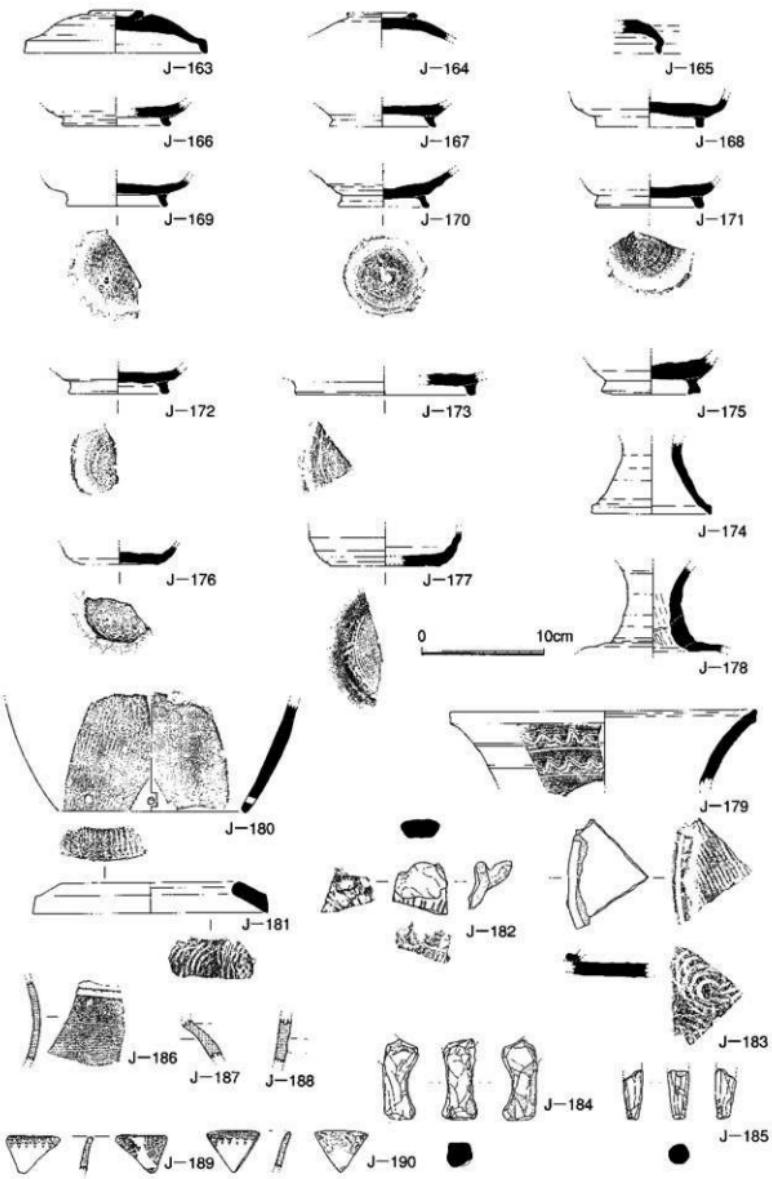
以上のように、J-2区では遺構の可能性の高いS.J.103を除いては、近・現代の耕作地であり、土留め等の石列・杭列が検出された段々畠状な景観が抜がっていたと考えられる。後述するK-M区の遺構密度の疎である状況を考慮すると、J-2区以東は、基本的に山沖遺跡(窯跡)の範囲からは外れると判断出来るであろう。

J-163~185はJ-2区の包含層出土遺物である。

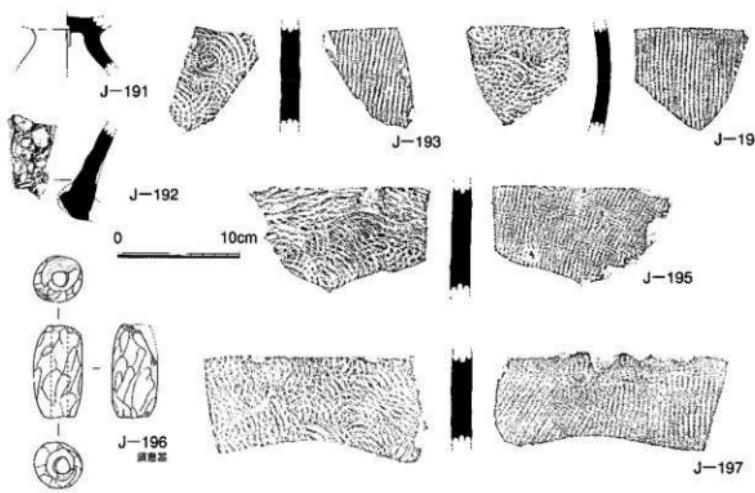
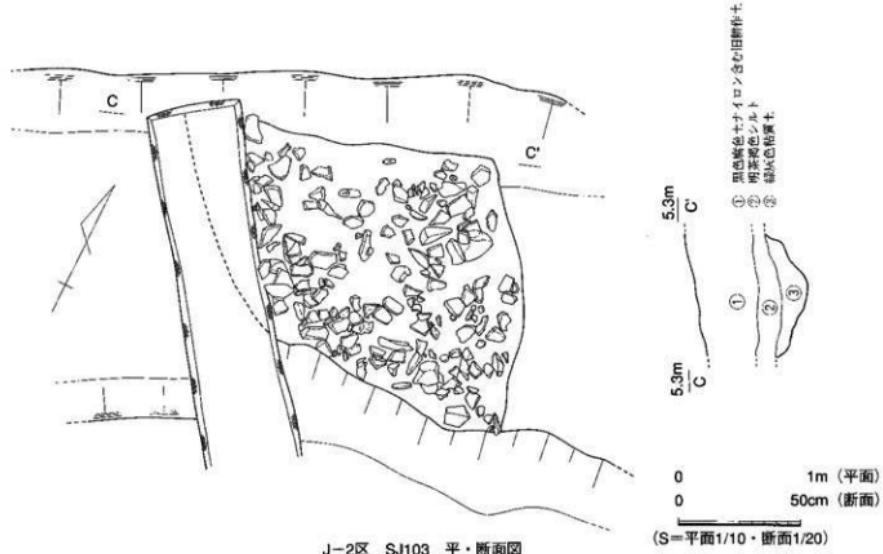
J-163~165は蓋である。J-163は60%残、端部が屈曲し輪状つまみを付す壺下蓋で、内面に重ね焼き痕と思われる剥離痕が見られる、外面はケズリでつまみ内はナデている、やや風化している。J-164は輪状つまみの小片で、外面に灰を被り傷みが激しい。J-165は蓋の微細片で、孔みが著しい。

J-166~175は高台片で、壺・皿類の器種が想定される。J-166は高台の高さが0.5cmと比較的低めである、風化が認められる。J-167は焼成がやや甘く明茶褐色を呈している、底部の調整はナデである。J-168は(復)高台径が9.0cmを測る、底部調整はナデである。J-169の底部調整は静止糸切り→ナデで、風化が認められる。J-170にはローリングを受け、剥離痕が目立つ。J-171は底部の切り離しが回転糸切りである、風化が著しい。J-172の底部調整は糸切り→ナデか、風化が認められる。J-173は皿の高台片である、底部調整は糸切り→ナデか、焼成が甘く黄褐色を呈している。

J-174は細片である、高壺の脚として実測したが、壺の口縁部である可能性も残っている、細片で全形は不明、風化が認められる。



第258図 J-2区 包含層出土遺物



第259図 J-2区 SJ103実測図・出土遺物

J-175は壺の口縁部片である、底部調整は糸切り→ナデで風化が認められる。J-176・177は無高台の底部片である。

J-178は長頸壺（壺K）の肩～頸部片である。風化が認められ、外面に薄く灰を被っている。J-179は壺Aで太く、荒い波状文を施している。J-180は壺の小片で小孔が一つ確認出来る。

J-181は器種不明で窯道具か、図の上端は丸みを帯び、下端は先尖である、内外面はタタキ調整で、やや赤茶褐色の焼成を帯びる須恵質の還元炎焼成である。J-182は須恵質の把手で、体部の内外面はタタキ調整である。J-183は壺の体部片に別の須恵器の溶着があり、壺片転用の置台と思われる。J-184は獸脚の脚部片で断面が矩形に近い。J-185は上馬の脚か、断面は円形である。J-186～190は陶磁器である。J-186は薄手の陶器で黒褐色を呈している。J-187は施釉陶器で、外面に青乳色の釉を被っている。J-188は内面に白色の釉薬をかける施釉陶器である。J-189・190は染付けで、J-180はコバルト顔料を用いている。

J-191～197はS J 103の出土遺物である。S J 103は調査区北西端で検出された遺構で、須恵器片が敷き詰められたような状況で検出された。出土遺物は全て須恵器で、器種としては壺の体部片が大勢を占める、他の器種としては高环片、號口縁片、須恵質上鍤がある。

J-191は高环の小片、傷みが激しく、切り込み状の透かし痕が残る。J-192は壺Aの頸～肩部分で、痛みが極端にひどく剥離による凹凸が顕著である。J-193～195・197は壺の体部片で内外面にタタキ痕が残る。J-196は須恵質の土鍤である、全長7.4cm、径3.9cm、孔径1.4cmを測る、体部はナデで仕上げられており風化が著しい。

K区 遺構と遺物

(石川 崇)

K区はJ区の東隣にあり、南側は田んぼ、北側は畑に使用されていた。そこで南側に2本(T-3・4)、北側に2本(T-1・2)、計4本のトレンチを設定して調査を行った(第260・261図)。

北側のT-1・2は2段になっており、上段部では耕作土の暗褐色土層・褐色土層が堆積していた。下段部では盛土に使った淡灰色土層(砂層)が堆積していた。上段部では表土を取り除くと直下は地山と思われる層が堆積していた。またT-1からは褐炭層と思われる黒色土層が見られた。

南側のT-3・4は耕作上の暗灰褐色土層の下に直径10cm大の礫を大量に含んだ黄褐色土層・暗灰褐色土層、その下には粘質で粒子の細かな暗灰色土層が堆積していた。この暗灰色土層は中海の海砂と思われ、この付近まで中海が進出していたと考えられる。

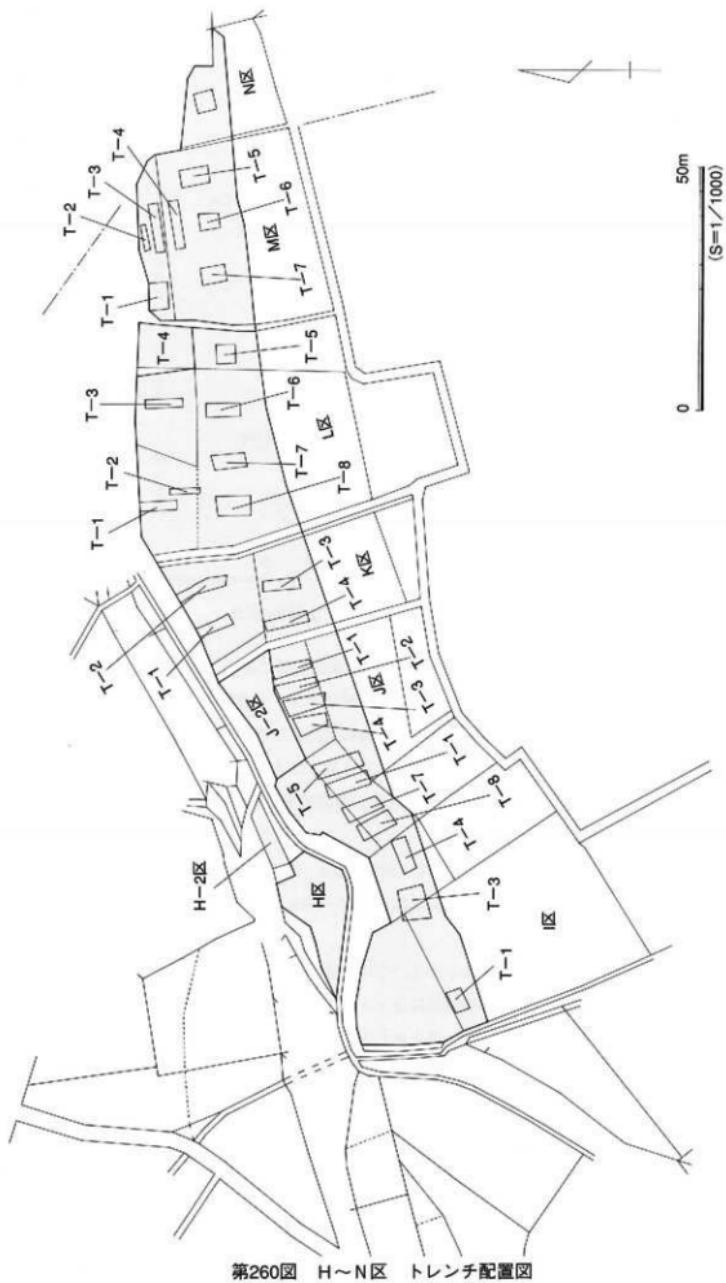
調査の結果、遺構を確認することができず、遺物も出土しなかった。

L区 遺構

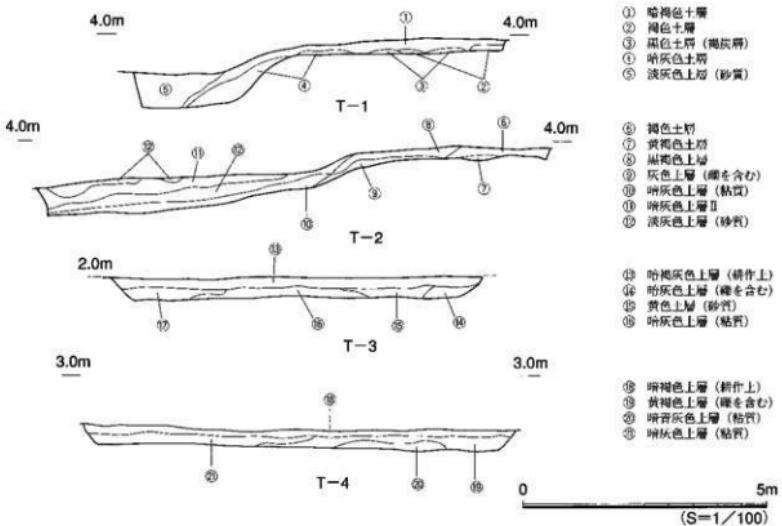
(石川 崇)

L区はK区の東隣にあり、K区と同じく北側の畑で使用された所と南側の田んぼで使用された所とに分けられ、北側に4ヶ所、南側4ヶ所、計8ヶ所のトレンチを設定した(第260・262図)。

T-1は深さ1m前後まで淡灰色の砂層が堆積していた。しかし砂層のため崩れやすく、危険と判断しT-1はそれ以上掘り進めなかった。この段階まで遺構は確認できなかった。



第260図 H~N区 トレンチ配置図



第261図 K区 トレンチ土層断面図

T-2は上下2段に分かれており、上段部は表土の暗褐色土層であり、その下は搅乱を受けていた。下段部は盛土に使われた砂層であり、ここから遺構は確認できず、遺物も出土しなかった。

T-3は表土直下地山であり遺構は確認できず、遺物も出土しなかった。

T-4は約10m四方の緩斜面であり、その東側は表土直下に大きな砾を含んだ淡赤褐色土層が堆積しており、その部分からは遺構は確認できなかった。西側はまばらに炭を含んだ層が堆積しており、そこから遺構が確認された（第263図）。

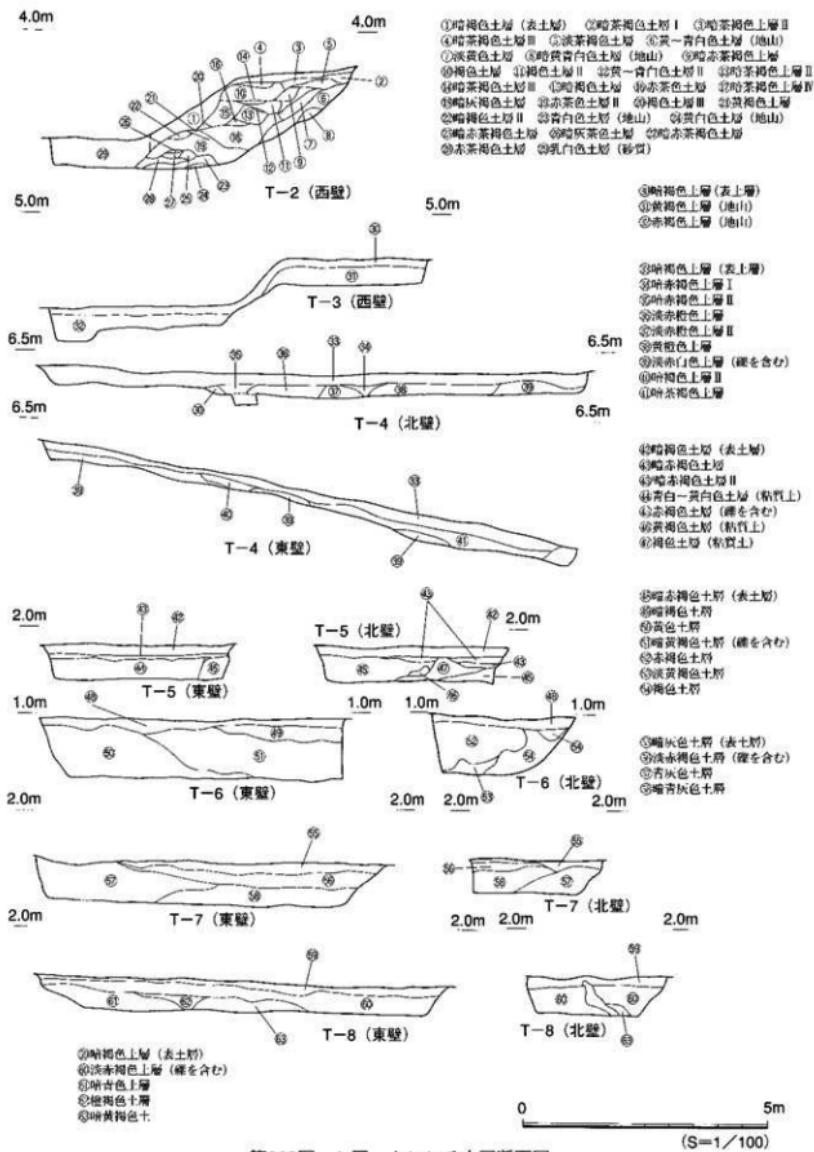
S L-101はほぼ中央から検出された土坑で、長軸140cm、短軸110cm、深さ30cmを測り、平面形は不整隅丸形を呈する。埋土の中から須恵器が数点、10~30cm大の石が多く出土した。用途に関しては不明である。

S L-102はS L-101の北側に位置し、S L-101を囲むように検出された。長さは4m以上、幅30cm、深さ10cmを測る。東南隅は円形の袋状になっており、何かを溜めるための機能を持っていた可能性がある。表土からは須恵器の破片が、埋土からも須恵器が数点出土した。用途に関しては不明である。

S L-101はS L-102を切り込むように作られているため、S L-101のほうが古いものと思われる。

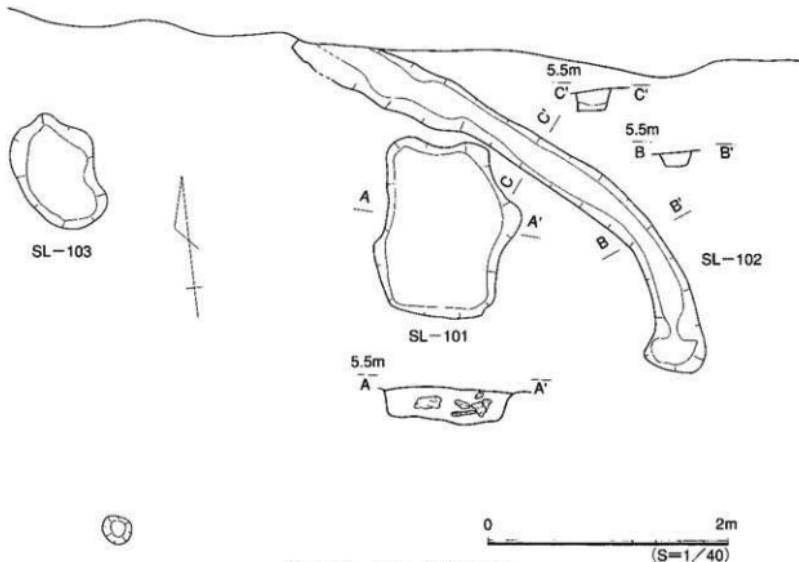
S L-103はS L-101の西2.5mのところから検出されたが、非常に浅く、窪んだところに暗褐色の土が入り込んだと思われる。埋土から須恵器が数点出土した。

T-5~8は表土の下に10cm以上の砾を含んだ層が堆積していた。T-7・8の下層に微粒子の暗青灰色の砂層が確認されたが、T-5・6には見えなかった。おそらくT-5・6付近の地形は舌状に丘陵が伸びていたと思われる。



第262図 L区 トレンチ土層断面図

(S=1/100)



第263図 L区 遺構平面図

L区 遺物

(藤原 哲)

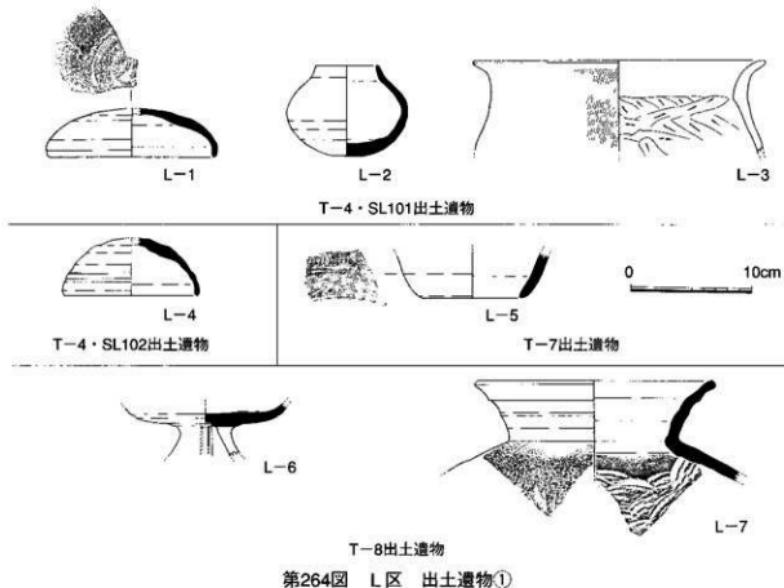
L-1~3はL区のT-4・SL101の出土遺物である。L-1は壺Hの蓋である、15%残で天井部の調整はナデ、天井頂部にT字によると思われる条痕と、ヘラ記号が記されている。L-2は小型の壺で90%残である、但し歪みがあり、口縁部を上から見ると楕円形を呈している。L-3は土師器の甕片で外面はハケメ、内面はケズリである。

L-4はL区のT-4・SL102出土遺物で、20%残の壺Hの蓋、(復)口径は11.0cm、器高4.7cmを測る、天井部の調整はナデである。

L-5はL区のT-7出土遺物で壺か。

L-6・7はL区のT-8出土遺物である。L-6は高壺の小片で壺～脚にかけての部分、残存部には二方向からの透かしがある。L-7は甕片で内外面に釉を被っている。

L-8~22はL区のT-4の包含層出土遺物である。L-8~14は壺Hの蓋である。L-8は30%残、天井部はその周辺部のみケズっており、稜には浅い沈線を施している。L-9は40%残、天井の調整はナデでヘラ記号を記している。L-10は40%残、(復)口径12.7cm、器高4.3cmを測る、天井部の調整は周辺ケズりで、口縁端部にオサエ状の痕?が残っている。L-11は40%残、外面に被灰し調整は不明(ヘラ切り→ナデか)。L-12は15%残、天井の調整はナデである。L-13は60%残、(復)口径11.8cm、器高4.1cmを測る、天井部の調整はナデである。L-14は40%残、壺Hの蓋として実測したが、天井部がやや平坦で壺Gの身かもしれない。



第264図 L区 出土遺物①

L-15・16は環Hの身である。L-15の底部の切り離しはヘラ切りで、周辺部をケズるが底部中央はナデている。L-16は50%残、(復)口径10.0cm、器高4.7cmを測るがやや歪みがある、底部の調整はナデである。

L-17~19は高環である。L-17は高環の環部で、環部の50%残、口径16.0cmを測る。L-18は細片で、环部の内面に×印のヘラ記号を施すが、内面には緑色の釉がかぶっている。L-19は环~脚の細片である。

L-20は脚片で子持壺、又は器台類の脚と考えられる。細片な為全形は不明である。外面の調整はタタキで内面はナデている。

L-21・22は甕である。L-21は甕Cで(復)口径22.1cmを測る、口縁の内外面と肩部とに被灰している。L-22は甕A、(復)口径52.7cmを測る大甕である。

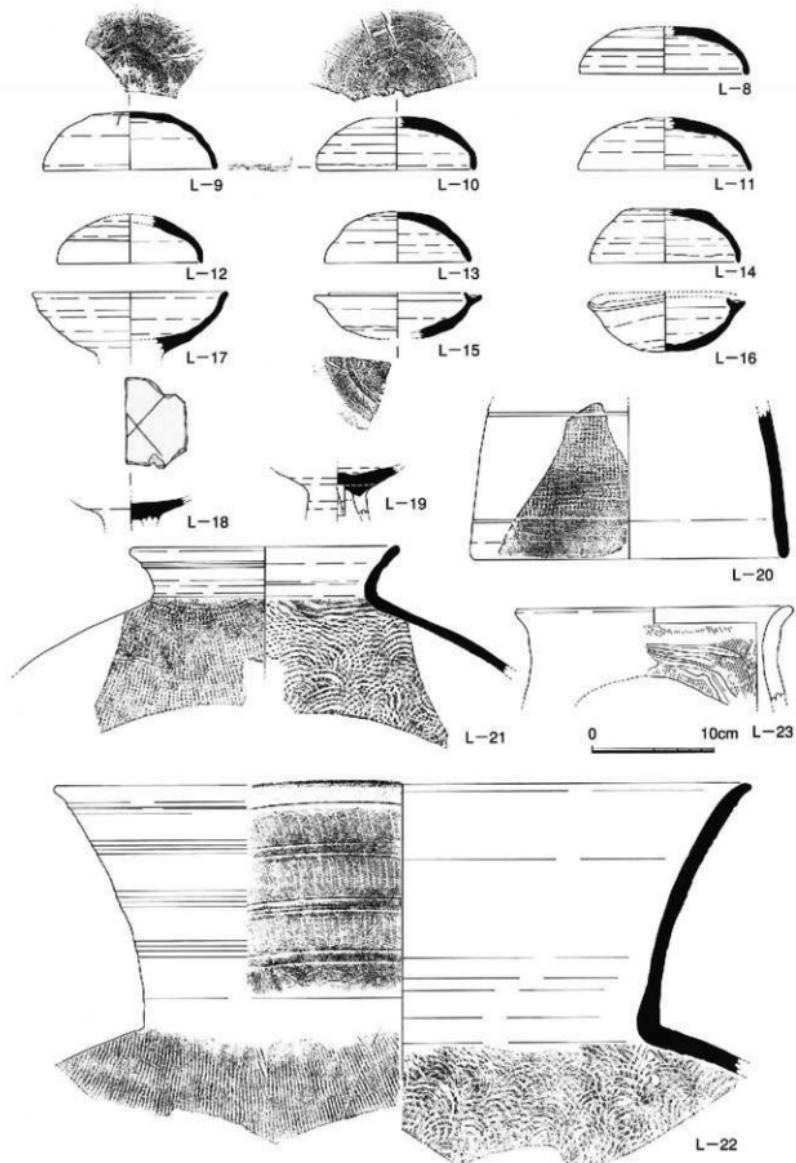
L-23は土師器の壺の細片である。

M区 遺構

(石川 崇)

L区の東隣に位置し、K・L区同様に北側の畑と南側の田んぼに分けられる。北側に4本、南側に3本、計7本のトレンチを設定した(第260・266図)。

T-1~4は畑に使用されておりここから遺構は確認できなかった。遺物は表土から須恵器片が出土した。T-4の下層からは微粒子の暗青灰色の砂層が検出されていた。おそらくはこの付近まで中



T-4出土遺物
第265図 L区 出土遺物②

トーン演：被灰

海が進出していたと思われる。

遺構は確認されなかつたが、第①層と③層から須恵器片が出土した。

T-5~7は表上の下は10cm大の礫を含む層が堆積しており、T-5・6は下層に微粒子の暗青灰色の砂層が検出された。しかしT-7から検出されなかつた。

このことからL区のT-5・6からM区のT-7まで海砂と思われる暗青灰色土層が検出されなかつたためこの付近の地形もL区のT-5・6付近と同様に舌状の丘陵になつてゐる可能性が考えられる。

遺構は確認されず、遺物は表上から須恵器片が出土した。

M区 遺物

(藤原 桢)

M-1~10はM区のT-1出土遺物である。M-1は壺Hの蓋、天井片で外面に沈線状の痕跡が残る、ヘラ記号か。M-2は壺Hの身で50%残、外面に厚い黄灰を被る。M-3は壺Fの蓋である、50%残で(復)口径11.8cm、器高2.9cmを測る、外面に重ね焼きと考えられる変色が認められ、内面にはヘラ記号が記されている。M-4は高台片、底部の調整は静止糸切り→ナデである。M-5も底部片で、底部の調整は回転糸切り→ナデである。M-6は塊Aか、口縁部がくびれる小片である。M-7は平底の底部片で、底部に×印のヘラ記号を施す。M-8は高台付きの小壺である、底部の調整はナデ。M-9も小壺と思われる無高台の底部で、底部の切り離しは糸切りである。M-10は壺片を転用したと考えられる置台で、外面(平行タキ側)に別の須恵器の剥離痕が残る。

M-11・12はM区のT-2出土遺物である。M-11は20%残の壺B、(復)口径16.2cm、器高6.7cm、高台径12.0cmを測る。やや軟質で黄褐色を呈している。M-12は50%残で(復)口徑13.0cm、器高3.2cmを測る、口縁端部がくびれるので塊Aと思われるが、現形は体部が低く皿状の形態を示す、底部の調整はナデである。

M-13~20はM区のT-3出土遺物である。M-13は壺下の蓋で20%残、口縁端部が屈曲し、輪状つまみを付す。M-14は輪状つまみを付した天井片で、M-15は宝珠つまみを付している。M-16・17は高台片で、M-16の底部には円状のヘラ記号?が見られる。M-18は無高台の底部片、底部の切り離しは糸切りで、その周辺はナデでいる。M-19・20は高片である。

M-21・22はM区のT-4出土遺物である。M-21は輪状つまみを付した蓋の大井片で、M-22は歪みのある高片である。

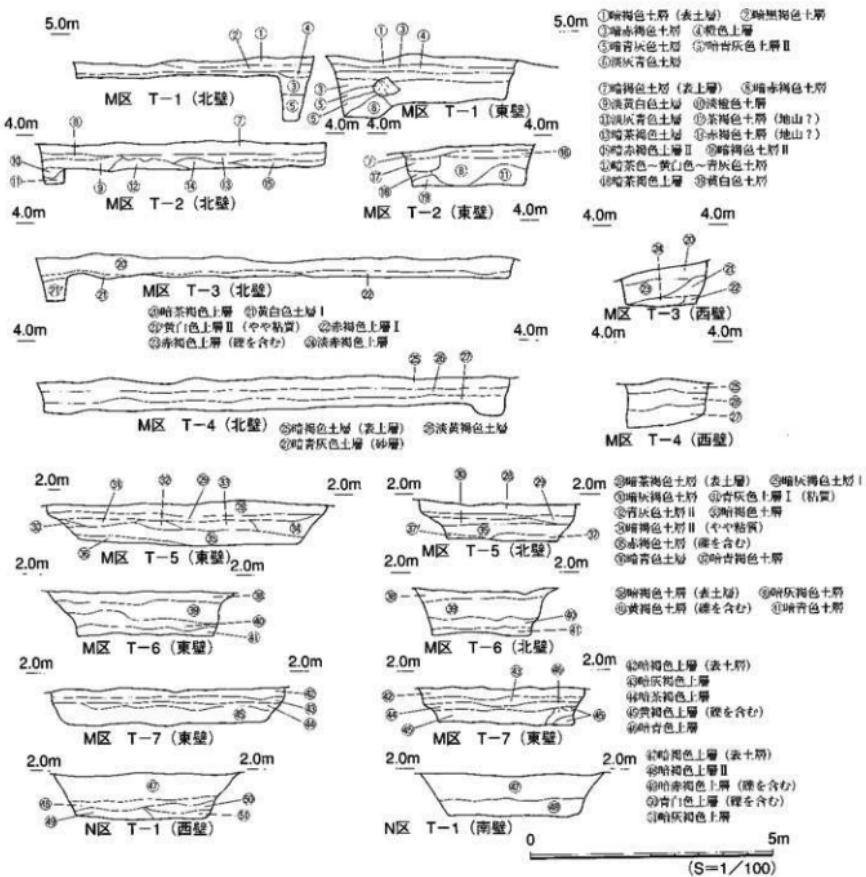
N区 遺構と遺物

(石川 崇)

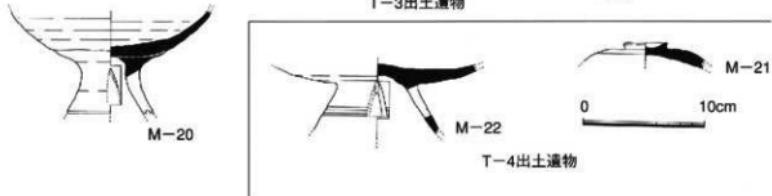
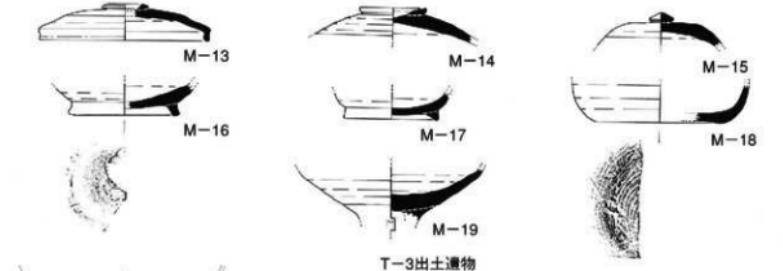
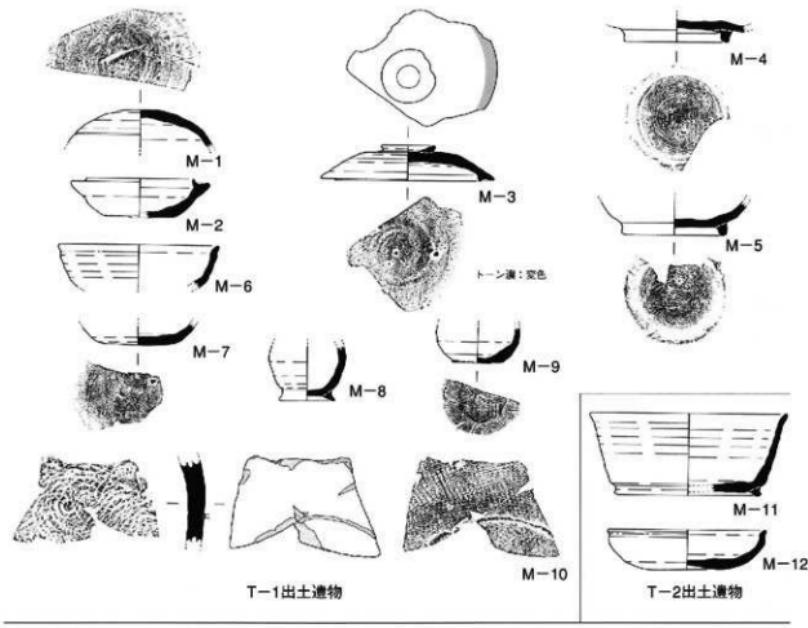
N区はM区の東隣に位置し、北側は道路のための法面であり、実際は田んぼの部分にトレントを設定した(第260・266図)。

表土の下は礫を含む層が堆積しており、それが中海に近いところほど厚く堆積していた。

遺構は確認されず、遺物も出土しなかつた。



第266図 M区・N区 トレンチ土層断面図



第267図 M区 トレンチ出土遺物

第二章 地形と環境

第一節 地質・気候と歴史的環境

(藤原 哲)

山津窯跡・山津遺跡は島根県松江市大井町に位置する。松江市は概ね北緯 $35^{\circ} 20'$ – $35^{\circ} 30'$ 、東経 $133^{\circ} 0'$ – $133^{\circ} 15'$ の範囲にあり、大井町はこの松江市の東部地域に所在している。大井町の北西には和久羅山に続く丘陵があり、南東は次第に平地が開け中海海岸に達し、北は大海崎、南は福富町にそれぞれ接している（第268図）。

調査の原因となった本庄福富松江線は、この大井町を中海沿いに走っている県道である。これを松江市側から大海崎側へ走る途中、中海大橋を北へ渡ってしばらく進むと、丘陵地域を越えて一面に中海が開ける絶好の眺望地点がある。松江市大井町768番地付近、この地点に山津窯跡は所在する。大井町周辺には、地質的にみれば中新統に属する和久羅山安山岩（又は角閃石安山岩、角閃石含有無斑晶質安山岩溶岩）が分布している（第269図）。これは松江市東部の和久羅山、及び嵩山を中心として半径3~5kmの地域に分布しており、発掘調査の土中においても和久羅山系の安山岩を多数見ることができた。

和久羅山安山岩は和久羅山、嵩山など2、3の山体に分かれているよう見えるが、岩質に違いはなく、もともとひとつのドーム状の火山をなしていたものがその後、開折されて分かれた可能性が高いと考えられている。嵩山と和久羅山を中心とした山体の西側斜面は急で、東側ではその頂部から中海方面に緩い斜面が延びている。こういった地形が形成された要因としては嵩山から和久羅山へ続く稜線のどこから噴出した溶岩が、主として中海側へ流れたためと考えられている（鹿野ほか1994）。

山津窯跡はこの和久羅山から派生する丘陵端部を利用して築かれた須恵器の窯跡である。現在の微地形においては、大井から大海崎へと通じる中海沿いには丘陵の急激な斜面が見られる。後述するように、発掘調査で検出された山津4号窯は地すべりを起こしていたが、これらの急激な斜面地帯は現在でも地すべりの危険性が非常に高い場所である。

さて、大井町の属する島根県は大きく見て日本海側の気候に属しているが、一般的な現在の島根県の気候は概ね次のようなものである（松江地方気象台1993）。

- 春 例年3月下旬から沿岸部は本格的な春となる。日本海側では低気圧が急速に発達して春一番と呼ばれる強風が吹くことがある。4・5月は移動性高気圧に覆われることが多く、天気は4~5日の短い周期で変わるようにになり、晴天の日が多い。また、この頃は晩霜の季節でもあり、5月には梅雨のはしりがあらわれることもある。
- 夏 6月は梅雨の季節、人梅の平均は6月10日である。梅雨前線の活動が活発となって島根県に雨を降らせるのは6月下旬から7月にかけてで、7月上旬~下旬の梅雨末期には度々大雨が降り往々にして水害を起こす。梅雨明けの7月下旬から8月にかけては、太平洋高気圧に覆われて暑い日が続く。



第268図 遺跡位置図 ($S=1/200,000$)

- 秋 9月は太平洋高気圧も次第に弱まり大陸からの移動性高気圧に覆われて爽やかな秋晴れ日が現れるが、雨の日が多くなる。9・10月は台風のシーズンで、毎年2~3個の台風が接近する。11月は冬の先触れである寒波に見舞われるようになりだし、初霜を観測するようになる。
- 冬 北西の季節風によって特徴づけられる。大陸からの寒気は日本海で水分の供給を受け、また下層から暖められて不安定になり、さらに中国山地に吹きつけ、上昇気流となって雪を降らし、時雨がちの天気が続く。北西の季節風は多くの場合、3日連続して強く吹き、その後3~4日間風の弱い日がある。こうして7日前後の周期で天気は変化し、1・2月の極寒の頃は山間部が雪で埋まる。

大井町の近く、大橋川流域の松江市西川津町1282番地には松江地方気象台があって昭和16年から観測が行われている。古代の窯業を知る上では、気候・風向きなどの情報は重要である。しかし、古代の気候を知る術は全く残っていないので、比較のため昭和16年から45年までに松江地方気象台で観測された気温・風速などを掲げておく（第2・3表）。もちろん、現代の気象がそのまま古代のものと考える訳にはいかないであろうが、自然現象としては1000年単位の変化であればあまり考慮する必要性はないのではなかろうか。これを見ると、松江市の最多の風向きはW（西）であり、平均的な風速は2.8m/sである（遠藤（編）1971）。

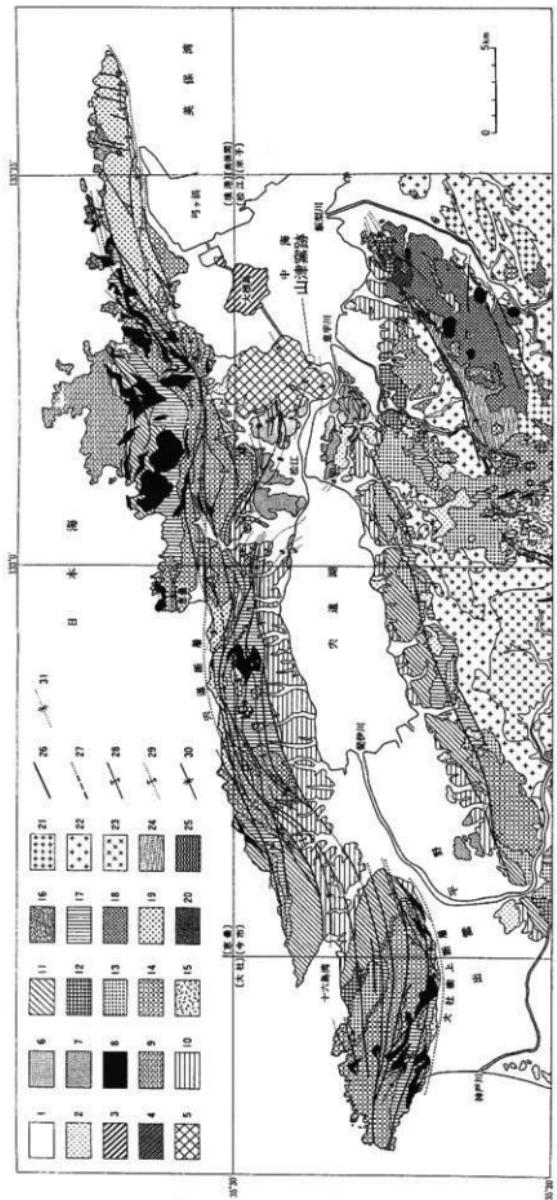
歴史的環境として、松江市大井町は律令制下では出雲国島根郡に属していた。町内には大井神社が鎮座しており、社前には大井と称する泉があって、清泉でどんな日照りにも湧出し、「大井」の地名もこれに由来するという。また、「出雲國風土記」には大井周辺の記述が残っている。中世には平浜八幡宮に属していたと見られ、近世は松江藩領の大井村であり、明治22年に島根郡朝倉村の大字となる。昭和14年の朝倉村の松江市編入に伴い、昭和15年に現行の島根県松江市大井町となった。

考古学的な環境（第270図）としては、山津遺跡の直ぐ西隣にある九日田遺跡（8）から縄文時代後期初頭のどんぐり貯蔵穴が23基検出されている。九日田遺跡の土器の大半は中津式と呼称されるもので、同じ九日田遺跡からは夜臼式併行の壺や、弥生中期の土器が出上している。

古墳時代に入ると、大井地区では唯一の石棺式石室を持つ「大井向山1号墳」（5）、「池ノ奥古墳群」（13）、「イガラビ古墳群」（43）などがあり、その他、朝倉型石室と称される小規模の石室を持つ古墳や横穴墓、須恵器を大量に出土した「薦沢A遺跡」（37）、「イガラビ古墳群」（43）、特殊な土器棺を出土した「池の奥C遺跡」（12）があり、須恵器工人集団の存在を伺わせている。また、大井町の考古学的な特質としては、大井窯跡群と称される多数の須恵器窯跡の存在が挙げられる。

引用・参考文献

- 遠藤二郎（編）1971『松江気象30年表』松江地方気象台
- 虎野和彦ほか1994『松江地域の地質』地質調査所
- 竹内理三（編）1979『角川日本地名大辞典 島根県』角川書店
- 浜山周作ほか 1988「中海の風と潮水の変動について」『島根県地質学会誌』3
- 平凡社地方資料センター（編）1995『日本歴史地名体系 島根県の地名』
- 松江市教育委員会 2003『山津窯跡発掘調査報告書』
- 松江地方気象台浜田測候所 1993『島根の気象百年』



第269図 松江及び周辺地域の地質図

1=新第三紀、53=山原層、202=吉第二系、24=吉第一系、25=吉第三系、26=吉第四系、27=吉第五系
 1'=新第三紀後期及び中期、54=山原層、28=吉第五系、4=所井川式、5=所井川式
 6=所井川式、7=所井川式、8=所井川式、9=所井川式、10=所井川式、11=所井川式、12=所井川式
 13=所井川式、14=所井川式、15=所井川式、16=所井川式、17=所井川式
 18=所井川式、19=所井川式、20=所井川式、21=所井川式、22=所井川式
 23=所井川式、24=所井川式、25=所井川式
 1'=新第三紀後期及び中期、53=山原層、202=吉第二系、24=吉第一系、25=吉第三系、26=吉第四系
 27=吉第五系、28=吉第五系、4=所井川式、5=所井川式
 6=所井川式、7=所井川式、8=所井川式、9=所井川式、10=所井川式、11=所井川式、12=所井川式
 13=所井川式、14=所井川式、15=所井川式、16=所井川式、17=所井川式
 18=所井川式、19=所井川式、20=所井川式、21=所井川式、22=所井川式
 23=所井川式、24=所井川式、25=所井川式
 1'=新第三紀後期及び中期、53=山原層、202=吉第二系、24=吉第一系、25=吉第三系、26=吉第四系
 27=吉第五系、28=吉第五系、4=所井川式、5=所井川式
 6=所井川式、7=所井川式、8=所井川式、9=所井川式、10=所井川式、11=所井川式、12=所井川式
 13=所井川式、14=所井川式、15=所井川式、16=所井川式、17=所井川式
 18=所井川式、19=所井川式、20=所井川式、21=所井川式、22=所井川式
 23=所井川式、24=所井川式、25=所井川式
 (西野他 1994 より抜載・一部加筆)

第2表 松江市の気象①

(1941~1970)

年	月	降水量												(1941~1970)															
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
昭和 16	1941	4.2	8.4	7.5	16.9	16.6	21.1	21.5	20.2	16.2	18.5	19.8	18.6	164.6	16.1	15.5	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0		
17	42	2.6	2.5	8.6	11.6	15.5	20.9	26.4	21.8	14.6	9.9	6.4	19.0	17	42	16.2	16.6	16.5	17.6	17.6	17.6	17.6	17.6	17.6	17.6	17.6	17.6	17.6	
18	49	1.9	2.8	6.1	10.6	16.7	20.8	34.0	26.0	22.6	16.0	10.1	6.9	10.0	43	12.7	14.4	12.7	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	
19	44	8.5	2.9	5.3	18.7	17.2	21.8	25.9	22.0	15.5	11.4	4.7	14.0	19	44	14.6	19.7	13.4	13.1	13.1	13.1	13.1	13.1	13.1	13.1	13.1	13.1	13.1	
20	45	1.2	1.5	6.3	12.0	14.9	21.0	23.0	27.0	21.9	16.1	16.7	5.3	15.4	20	45	16.1	17.1	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0
21	46	4.2	8.6	8.7	18.6	16.2	28.6	34.2	26.6	31.9	18.9	12.7	5.0	14.4	21	46	11.9	18.0	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2	15.2
22	47	4.9	0.8	5.2	11.4	14.9	18.9	22.5	25.8	21.7	14.7	8.9	3.7	13.1	22	47	20.6	23.1	16.2	16.2	16.2	16.2	16.2	16.2	16.2	16.2	16.2	16.2	16.2
23	48	8.5	4.8	6.3	18.8	16.9	21.4	34.8	25.8	21.8	18.7	11.2	8.5	14.6	23	48	18.4	23.1	16.2	16.2	16.2	16.2	16.2	16.2	16.2	16.2	16.2	16.2	16.2
24	49	4.5	6.2	5.4	16.0	17.9	19.7	24.0	26.3	22.1	16.2	10.8	6.5	18.9	24	49	18.2	24.5	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6	16.6
25	50	6.2	4.4	6.5	12.1	17.7	20.8	26.4	22.0	15.5	10.5	5.4	14.5	25	50	21.4	27.3	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	
26	51	3.5	6.1	6.5	11.5	16.5	20.8	25.1	21.5	15.7	10.5	5.4	14.5	26	51	21.4	27.3	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	
27	52	4.3	2.8	6.5	12.5	16.4	20.3	24.8	21.7	15.8	10.4	5.1	14.5	27	52	16.3	19.2	12.0	12.0	12.0	12.0	12.0	12.0	12.0	12.0	12.0	12.0	12.0	
28	53	5.9	4.1	8.1	11.2	17.0	20.6	24.8	26.0	32.1	17.3	11.0	8.1	14.6	28	53	22.8	28.4	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6
29	54	5.7	5.8	7.2	18.1	17.2	19.2	23.6	27.0	22.8	18.3	12.4	7.1	14.7	29	54	25.5	34.7	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6	19.6
30	55	8.4	5.8	8.4	18.0	17.1	22.6	25.6	22.8	17.6	14.9	7.6	14.9	30	55	14.2	24.6	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	
31	56	5.9	2.9	7.4	15.0	16.5	22.0	25.0	22.7	16.5	10.1	5.1	14.1	31	56	19.5	24.6	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	
32	57	4.5	8.2	5.2	12.8	16.6	20.0	24.1	26.2	18.4	11.8	7.0	14.9	32	57	22.2	24.4	12.7	12.7	12.7	12.7	12.7	12.7	12.7	12.7	12.7	12.7	12.7	
33	58	7.9	4.8	7.7	18.2	16.8	21.7	24.8	22.6	15.5	11.1	8.0	14.7	33	58	20.4	24.2	9.2	22.8	9.2	22.8	9.2	22.8	9.2	22.8	9.2	22.8	9.2	
34	59	3.4	5.3	8.7	18.6	15.6	21.0	24.0	23.8	23.0	17.0	12.8	7.8	15.3	34	59	16.5	21.1	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9	10.9
35	60	4.4	6.0	8.9	11.5	17.0	21.2	24.7	26.9	21.5	16.4	11.8	5.8	14.9	35	60	14.7	19.5	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8
36	61	4.8	7.4	7.0	12.6	17.1	21.1	25.2	26.8	21.7	16.1	11.0	5.8	15.0	36	61	18.6	23.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8
37	62	8.6	4.7	8.6	12.1	17.1	20.2	24.8	22.6	16.6	10.7	7.0	14.4	37	62	22.1	26.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	
38	63	0.5	1.9	6.3	12.9	17.2	20.4	24.9	26.1	21.2	15.3	10.4	6.7	14.0	38	63	20.8	26.2	10.6	10.6	10.6	10.6	10.6	10.6	10.6	10.6	10.6	10.6	10.6
39	64	5.4	2.9	6.6	15.0	17.6	20.6	26.2	26.1	21.0	16.1	10.8	6.7	14.9	39	64	18.3	23.2	10.4	10.4	10.4	10.4	10.4	10.4	10.4	10.4	10.4	10.4	10.4
40	65	8.5	2.9	5.1	18.1	16.8	20.4	24.6	26.6	20.2	15.4	10.7	5.7	18.7	40	65	21.7	26.7	9.7	17.7	9.7	17.7	9.7	17.7	9.7	17.7	9.7	17.7	9.7
41	66	8.4	6.7	8.4	12.3	16.4	20.2	24.7	27.4	21.8	16.5	10.5	5.0	14.4	41	66	19.5	25.0	9.4	17.9	9.4	17.9	9.4	17.9	9.4	17.9	9.4	17.9	9.4
42	67	8.6	4.6	7.7	12.9	18.1	21.3	24.6	27.2	22.0	16.1	11.1	8.7	14.4	42	67	21.8	25.8	10.4	17.6	10.4	17.6	10.4	17.6	10.4	17.6	10.4	17.6	10.4
43	68	8.8	1.4	7.2	12.5	16.0	20.8	24.8	26.6	21.6	15.1	11.3	8.2	14.0	43	68	21.8	25.7	10.4	17.6	10.4	17.6	10.4	17.6	10.4	17.6	10.4	17.6	10.4
44	69	8.9	4.9	5.9	12.4	17.4	20.3	24.6	27.3	23.1	15.3	10.1	4.9	14.1	44	69	18.1	20.5	10.5	17.6	10.5	17.6	10.5	17.6	10.5	17.6	10.5	17.6	10.5
45	70	2.5	8.1	4.3	11.2	17.8	19.6	26.2	26.7	21.1	16.5	9.9	4.1	14.1	45	70	16.5	19.0	9.0	15.0	9.0	15.0	9.0	15.0	9.0	15.0	9.0	15.0	9.0
46	71	3.6	8.7	6.3	12.0	17.0	20.6	25.5	25.3	16.6	10.5	6.1	14.2	46	71	17.8	21.1	10.5	14.5	10.5	14.5	10.5	14.5	10.5	14.5	10.5	14.5	10.5	
47	72	11.0	6.0	8.0	10.0	15.4	21.1	26.3	27.1	22.0	16.1	11.1	8.1	14.4	47	72	19.1	23.8	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8
48	73	8.6	2.8	6.3	12.1	16.8	20.7	25.2	26.5	22.1	16.0	11.1	6.3	14.3	48	73	19.8	23.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8
49	74	8.0	4.9	7.0	12.7	17.5	21.3	26.7	27.0	22.6	16.2	11.2	6.3	14.3	49	74	19.8	23.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8
50	75	8.6	2.8	6.3	12.1	16.8	20.7	25.2	26.5	22.1	16.0	11.1	6.3	14.3	50	75	19.8	23.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8
51	76	8.6	2.8	6.3	12.1	16.8	20.7	25.2	26.5	22.1	16.0	11.1	6.3	14.3	51	76	19.8	23.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8
52	77	8.6	2.8	6.3	12.1	16.8	20.7	25.2	26.5	22.1	16.0	11.1	6.3	14.3	52	77	19.8	23.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8
53	78	8.6	2.8	6.3	12.1	16.8	20.7	25.2	26.5	22.1	16.0	11.1	6.3	14.3	53	78	19.8	23.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8
54	79	8.6	2.8	6.3	12.1	16.8	20.7	25.2	26.5	22.1	16.0	11.1	6.3	14.3	54	79	19.8	23.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8
55	80	8.6	2.8	6.3	12.1	16.8	20.7	25.2	26.5	22.1	16.0	11.1	6.3	14.3	55	80	19.8	23.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8
56	81	8.6	2.8	6.3	12.1	16.8	20.7	25.2	26.5	22.1	16.0	11.1	6.3	14.3	56	81	19.8	23.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8
57	82	8.6	2.8	6.3	12.1	16.8	20.7	25.2	26.5	22.1	16.0	11.1	6.3	14.3	57	82	19.8	23.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8
58	83	8.6	2.8	6.3	12.1	16.8	20.7	25.2	26.5	22.1	16.0	11.1	6.3	14.3	58	83	19.8	23.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8
59	84	8.6	2.8	6.3	12.1	16.8	20.7	25.2	26.5	22.1	16.0	11.1	6.3	14.3	59	84	19.8	23.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8	14.5	11.8
60	85	8.6	2.8	6.3																									

第3表 松江市の気象②

(1841-1870)											
年	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
合計	16	1941	8.0	9.2	8.7	7.9	7.7	2.3	2.0	2.0	2.1
	17	43	4.1	5.1	2.8	5.0	2.6	2.5	3.1	2.1	2.6
	18	43	2.4	2.4	2.5	2.8	3.0	2.4	2.6	1.6	2.0
	19	44	2.4	2.5	2.6	2.8	3.0	2.4	2.6	1.6	2.0
	20	45	4.0	2.6	3.1	3.2	3.9	2.7	2.5	2.0	1.9
	21	45	2.7	3.0	3.0	3.1	3.0	2.1	2.5	1.5	1.9
	22	47	2.0	2.7	3.1	3.4	2.6	2.1	2.6	1.7	2.0
	23	48	2.0	2.3	2.8	2.3	2.1	1.9	2.5	1.7	1.7
	24	49	2.0	2.0	2.8	3.0	3.0	2.4	2.0	2.1	1.9
	25	50	2.0	2.8	3.5	2.9	3.4	2.2	3.1	2.7	3.6
合計	81.9	28.0	30.6	31.1	32.6	24.5	26.1	19.8	19.8	22.1	27.6
	36	51	3.4	3.7	3.6	3.4	2.7	8.0	8.1	8.2	8.1
	37	52	1.6	2.5	2.5	2.9	3.0	2.8	2.1	2.2	2.1
	38	53	4.2	3.3	3.4	2.7	3.9	8.0	3.7	3.0	1.8
	39	54	3.1	3.1	3.1	3.1	3.5	3.6	2.7	2.6	2.1
	40	55	4.8	3.5	3.6	3.0	2.4	2.1	2.1	2.9	3.1
	41	56	4.0	4.5	2.5	3.5	4.0	8.8	3.4	8.0	2.6
	42	57	3.1	4.3	3.7	3.4	2.6	8.4	3.1	2.8	2.3
	43	58	4.6	3.0	3.9	3.0	3.5	2.6	8.1	2.7	2.2
	44	59	4.5	5.0	3.7	3.3	3.8	8.0	3.5	2.9	2.0
	45	60	4.5	2.1	3.2	3.2	3.8	3.2	3.5	4.0	2.4
合計	49.0	34.5	35.6	35.6	35.8	32.0	30.0	38.8	36.6	32.5	35.0
	56	61	3.7	3.7	2.6	3.2	2.6	2.6	2.3	2.2	3.1
	57	62	4.6	2.4	4.4	3.0	2.3	2.6	2.4	2.1	2.7
	58	63	0.7	2.4	2.0	2.3	2.9	2.1	2.7	2.5	2.0
	59	64	2.6	2.9	3.0	3.1	2.8	3.8	3.6	2.4	2.7
	60	65	1.8	3.3	2.9	5.1	5.0	3.0	3.1	2.6	2.7
	61	66	1.8	2.0	3.9	2.9	2.6	2.5	2.1	2.2	2.6
	62	67	2.5	2.6	3.9	3.4	2.3	2.7	2.2	2.4	3.5
	63	68	1.7	2.7	2.1	3.2	3.2	2.6	2.3	2.3	2.6
	64	69	2.5	3.2	2.9	3.4	2.6	2.1	2.6	2.1	2.5
	65	70	1.9	3.5	3.5	3.3	3.1	3.0	2.6	2.1	3.1
合計	562.2	515.6	517.1	500.7	507.0	25.0	25.5	25.4	22.7	29.7	30.6
1 年平均	36	32.0	32.8	31.1	30.1	27.0	2.5	2.5	2.2	2.4	3.0



第270図 周辺の遺跡分布図

(S=1/5000)

1.山越古道（宝塚）	61.ハバタケ集落（高尾）	107.桃式遺跡（敷布田）	160.J-37号地（高尾）
2.山越古道（依佐地）	55.依佐山遺跡（依佐地）	108.芦川古道（依佐地）	161.J-35号地（高尾）
3.ジャバ古道（阪布地）	56.砂沢遺跡（阪布地）	109.和向山遺跡（古河）	162.J-35号地（古河）
4.丹崎遺跡（阪布地）	57.丹崎山遺跡（阪布地）	110.幸下遺跡（古河）	163.小松谷古道（古河）
5.大山向山古道（大坂）	58.北兵谷遺跡（大坂）	111.幸遺跡（阪布地）	164.J-97号地（大坂）
6.イズキ山古道（古河）	59.伊豆河遺跡（大坂）	112.J-14號跡（城跡）	165.三浦美谷久穴跡（城穴）
7.白湯八瀬溝（葉名地）	60.若沙神遺跡（船引）	113.J-16號跡（磐石地）	166.I-20號跡（磐石地）
8.久元遺跡（葉名地）	61.久元山古道（葉名地）	114.奥美谷跡（足利）	167.飯谷山遺跡（今須）
9.人谷遺跡（阪布地）	62.人谷寺跡（阪布地）	115.千早遺跡（磐石地）	168.J-25号地（大坂）
10.少壮遺跡（阪布地）	63.少壮寺水内遺跡（阪布地）	116.高畠遺跡（城跡）	169.I-27号地（御所）
11.八方針伝説内遺跡（阪布地）	64.野寺山古道（古河）	117.麻洞遺跡（古河）	170.I-19号地（阪布地）
12.鹿C古道（阪布地）	65.多賀町古道迹（古河）	118.麻山遺跡（古河）	171.江戸街道（阪布地）
13.鹿ノ古跡群（古河）	66.魚見町古道（古河）	119.河原山遺跡（阪布地）	172.猪ヶ谷当別村（阪布地）
14.佐瀬遺跡（葉名地）	67.五井遺跡（阪布地）	120.J-21号地（阪布地）	173.森所古道（古河）
15.北ノ丸A遺跡（牧之原）	68.北の丸古道（古河）	121.J-31号地（城跡）	174.坂ノ下遺跡（阪布地）
16.志久板遺跡（阪布地）	69.志久板上神社跡（行瀬）	122.船岡古道跡（城跡）	175.タムリ洋道跡（阪布地）
17.二所神社水内遺跡（阪布地）	70.西田寺遺跡（城跡）	123.栗原山遺跡（阪布地）	176.タルミ田道跡（阪布地）
18.木ノ谷遺跡（阪布地）	71.久久置遺跡（城跡）	124.東ノ丸遺跡（古河）	177.タルミ田道跡（阪布地）
19.鹿谷古道（古河）	72.伊豆山遺跡（阪布地）	125.御井ノ山遺跡（阪布地）	178.タルミ田道跡（阪布地）
20.鹿谷古道（阪布地）	73.九十九台古跡群（古河）	126.川内宿跡（武藏）	179.赤井向日家跡（秋田老）
21.里山古道（宝塚）	74.連合駅跡（横浜）	127.一ノ谷古跡（古河）	180.仙兵衛山古道跡（今須）
22.鹿池山古道第六番（横穴）	75.田原山古道（古河）	128.黒川古道跡（阪布地）	181.仏向山古道群（今須）
23.鹿池山古道第七番（古河）	76.鶴岡高校校門跡古跡（今須）	129.空堀山古道跡（城跡）	182.高砂山古道（古河）
24.大谷古道跡（今須）	77.油田町小学校旁古跡（古河）	130.貝子分賀池古道（古河）	183.山内古道跡（古河）
25.八千山古道跡（古河）	78.駒場駅跡（小学時代の遺跡）（阪布地）	131.高尾山遺跡（古河）	184.西日神山古道跡（阪布地）
26.八千山古道跡（阪布地）	79.御山山古道（阪布地）	132.高尾山遺跡（高尾駅）	185.道跡（市街地）
27.新庄山古道（城跡）	80.新庄山古道（阪布地）	133.高尾山遺跡（阪布地）	186.高井山古道（古河）
28.赤坂遺跡（阪布地）	81.西野遺跡（阪布地）	134.夷隅山遺跡（阪布地）	187.筑前鬼越跡（阪布地）
29.稚耐根六番（横穴）	82.親菅山古道（古河）	135.見丸山遺跡（阪布地）	188.須原遺跡（城跡）
30.鹿谷古道跡（古河）	83.梅雨山古道（阪布地）	136.J-32号地（磐石地）	189.保地古道跡（古河）
31.佐谷古道跡（古河）	84.佐谷古跡（阪布地）	137.柴山古道跡（古河）	190.J-14号地（高尾）
32.久我山神牛道跡（豊田山）	85.久我山古道（横穴）	138.山越古道跡（横穴）	191.上吉瀬跡（今須）
33.アロケ遺跡（阪布地）	86.幽古石古道（古河）	139.吾妻古谷古道（横穴）	192.所外古道群（古河）
34.西引山古道跡（阪布地）	87.西古谷遺跡（阪布地）	140.荒川高古石（古河）	193.荒美庵寺（中和町）
35.御前根神古道跡（阪布地）	88.草切古道（古河）	141.向山遺跡（横穴）	194.鷹共井跡（阪布地）
36.御前根古道跡（集落跡地）	89.灰川遺跡（高尾駅）	142.仁王谷古道跡（横穴）	195.鷹共井跡（阪布地）
37.越足古道跡（高尾駅）	90.御坂古道跡（古河）	143.J-18號跡（阪布地）	196.川内神社古道跡（阪布地）
38.高尾山古道跡（阪布地）	91.山辺遺跡（高尾駅）	144.八色谷古道跡（古河）	197.井川山古道跡（古河）
39.別所古道（古河）	92.別所山古道（古河）	145.川内古道跡（古河）	198.山代山古道（古河）
40.西浜古道跡（阪布地）	93.芦戸遺跡（阪布地）	146.芦戸二塚（古河）	199.B-11号地（古河）
41.明竹古道（今須）	94.明竹古道跡（阪布地）	147.坂口11号地（古河）	200.水久毛古道（古河）
42.芦久平道跡（今須）	95.志士山古道（城跡）	148.見附古道（横穴）	201.御前古道（古河）
43.イグリ古道跡（古河）	96.十二所神社山内遺跡（阪布地）	149.元治山遺跡（高尾）	202.江谷根大屋（横穴）
44.J-1号道跡（阪布地）	97.小堀遺跡（阪布地）	150.蒙の上古道（今須）	203.御用山古道（古河）
45.古荘遺跡（阪布地）	98.小沼山古道跡（阪布地）	151.J-50号地（阪布地）	204.瓦井遺跡（阪布地）
46.大井の原古跡（阪布地）	99.二ノ山城跡（城跡）	152.南山古道（今須）	205.片山古道跡（城跡）
47.井ノ丸遺跡（阪布地）	100.稻安城跡（永跡）	153.坂田古道（古河）	206.火尾遺跡（古河）
48.弓見遺跡（古河）	101.弓見古道跡（宝塚）	154.片山山城古道（生田山跡）	207.ドノ尾山古道跡（今須）
49.南平山古道（古河）	102.J-15號跡（宝塚）	155.之山古道（今須）	208.井川山古道跡（今須）
50.山越古道（今須）	103.至山古道跡（城跡）	156.井川山古道（阪布地）	209.B-11号地（阪布地）
51.山越古道跡（阪布地）	104.山越古道跡（阪布地）	157.川尾古道（古河）	210.B-12号地（阪布地）
52.御谷遺跡（古河）	105.造跡（祭祇遺跡）	158.J-35古道（今須）	211.B-10号地（阪布地）
53.アロケ山島跡（横穴）	106. - /各遺跡（城跡）	159.J-36号地（今須）	212.B-9号地（磐石地）

第4表 周辺の遺跡地名表①（番号は第270図と対応）

213.大原小学校北側跡(新市地)	268.西配祀遺跡(無名跡)	328.寺内若古墳(古墳)	378.中野山北跡(住居跡)
214.空ノ山(古跡)	269.丘ノ小牧跡(水泊跡)	329.泥川越六石(横穴)	379.大木根山(古墳群)
215.市役所跡(新市地)	270.上小次遺跡(水田跡)	330.安部谷根六石(横穴)	380.市役所跡(新市地)
216.2-26御跡(城跡)	271.大字漢波跡(無名跡)	332.通川北跡(横穴)	381.敷音遺跡(新市地)
217.B-21遺跡(新市地)	272.寺内古跡(無名跡)	333.新屋山塚跡(古墳)	382.毛比井跡(新市地)
218.B-18遺跡(新市地)	273.上竹火垂遺跡(古墳)	335.寺内北野古跡(古墳)	383.大才ノ仲野跡(新市地)
219.高瀬寺古跡(古跡)	274.下竹火垂跡(古墳)	336.船川塚跡(城跡)	384.ヤシ山南代跡(横穴)
220.市役所跡(新市地)	275.上竹火垂跡(新市地)	338.神子谷古跡(古墳)	385.市役所跡(横穴)
221.平子塚跡(古跡)	276.三日町遺跡(古跡)	339.三日町塚跡(古墳)	386.丘台塚跡(横穴)
222.从人冢古跡(古跡)	277.里子古跡(古跡)	342.高瀬寺北野古跡(横穴)	387.出當中学校附近遺跡(新市地)
223.伊勢神社参道遺跡(新市地)	278.十丁免耕穴跡(横穴)	343.應永古跡(古墳)	388.五反川塚跡(新市地)
224.孟宗竹跡(新市地)	279.米美塚跡(古墳)	344.人伏塚跡(水野跡)	389.更生古宇多学園東側遺跡(新市地)
225.下豆(古跡)(新市地)	280.主馬神社北行跡(神跡跡)	355.京内塚跡(古跡)	390.白糸跡跡(古跡)
226.B-25跡(新市地)	281.黑川浦古跡(古跡)	356.通草平塚跡(古跡)	391.穴門古跡(横穴)
227.山置山(新市地)	282.深谷遺跡(新市地)	357.平井八幡前遺跡(古跡)	392.高井1号古跡(横穴)
228.B-4遺跡(新市地)	283.久、川尻付近遺跡(新市地)	358.川置山(古跡)と豊田塚(古跡)	393.瓦庭川(古跡)
229.山置山(新市地)	284.久ノ島古跡(古跡)	359.日吉古跡(古跡・横穴)	394.岩室塚跡(新市地)
230.木林分跡跡(新市地)	285.奥内野跡(古跡)	360.竹矢古跡(淡石・雲跡)	395.鬼ノ谷古跡(古跡)
231.B-17遺跡(新市地)	286.河内平野跡(新市地)	361.足利山古跡(古跡)	396.猪子谷塚跡(古跡)
232.深川跡跡(新市地)	287.平道跡(古跡・雲跡)	362.A-28若跡(新市地)	397.猪子谷塚穴跡(横穴)
233.八反古跡(新市地)	288.千賀丘古跡(古跡)	343.さっつけ跡(新市地)	398.底田跡跡(新市地)
234.荒神社、後谷古跡跡(古跡)	289.八反山古跡(古跡)	344.通町弓張古跡(古跡)	399.越田古跡跡(古跡)
235.有吉古跡(古跡)	290.7.7道跡(無名跡)	345.久内丘古跡(古跡)	400.麻生遺跡(古跡)
236.有吉古跡(古跡)	291.予間古跡(古跡)	346.八幡宮下承久跡(横穴)	401.油免古跡跡(古跡)
237.有吉古跡(古跡)	292.山口古跡(古跡)	347.忍足遺跡(新市地)	402.萬葉谷古跡(古跡)
238.官山根穴跡(横穴)	293.麻山古跡(古跡)	348.竹寺小学校校庭遺跡(新市地)	403.水永古跡(横穴)
239.有阿跡跡(新市地)	294.高瀬寺跡(新市地)	349.八ノ山跡(新市地)	404.平賀山丘古跡(古跡)
240.寺山古跡跡(古跡)	295.鳥森遺跡(新市地)	350.安原古ノ山塚跡(古跡)	405.平賀古跡跡(古跡)
241.山芦塚跡(新市地)	296.山川後古跡(古跡)	351.阿万原古跡(新市地)	406.平賀御跡(新市地)
242.トトウガ丘古跡(古跡)	297.2-25遺跡(新市地)	352.志山半野寺豊前御跡(新市地)	407.鶴岡村古跡(古跡)
243.高井古跡穴跡(横穴)	298.7.7古ノ古跡(古跡)	353.寺貝遺跡(新市地)	408.鶴田塚跡(古跡)
244.小谷穴(横穴)	299.寺内古跡跡(古跡)	354.通路跡(新市地)	409.寺子屋跡(新市地)
245.穴瓢古跡跡(新市地)	300.越吾と豊跡(新市地)	355.八ノ山古跡跡(新市地)	410.海丘古跡(古跡)
246.山岸古跡(古跡)	301.大平通跡(無名跡)	356.大野塚跡(古跡)	411.須田の古跡(古跡)
247.神山古跡(古跡)	302.竹矢穴1号跡(古跡)	357.以下川北岸通跡(新市地)	412.馬鹿山(古跡)
248.上空古跡(新市地)	303.武持高尾・古跡(古跡)	358.山下古跡(古跡)	413.水呑古跡(古跡)
249.伊豆後古跡(古跡)	304.7.7古跡(無名跡・新市地)	359.八ノ山古跡跡(新市地)	414.水鳥(安政)古跡(古跡)
250.洞庭山古跡跡(古跡)	305.6.6.6.6後高尾跡(横穴)	360.志山古跡(横穴)	415.石野古跡(古跡)
251.11.11道跡(新市地)	306.竹矢古跡跡(古跡・横穴)	361.古志山古跡跡(古跡)	416.夷人坂(古跡)
252.馬井跡跡(船跡)	307.2.2.2.2行跡(古跡・古跡)	362.小川通跡(古跡)	417.鶴丸通跡(新市地)
253.小糸通跡(新市地)	308.出雲國分寺跡・寺古跡(寺跡跡)	363.須山川寺跡と通跡(古跡跡)	418.高木空室跡(古跡)
254.御宿古跡(古跡)	309.御宿跡(古跡)	364.古志山通跡(古跡跡)	419.まろつら山(古跡)
255.人伏跡跡(新市地)	310.大字古跡(工作跡)	365.古谷山通跡(古跡跡)	420.今成山裏跡(古跡)
256.市役所跡(新市地)	311.大字御宿跡(古跡跡)	366.御谷古跡(横穴)	421.川雲山削跡(古跡)
257.市役所跡(古跡)	312.赤木古跡跡(古跡)	367.川山川通跡(古跡跡)	
258.山之塚跡(新市地)	313.通井堺穴跡(横穴)	368.佐谷古跡跡(古跡)	
259.大字往々北遺跡(新市地)	314.和田梗穴跡(横穴)	369.鹿谷古跡跡(古跡)	
260.市震古跡(古跡)	315.人伏古跡跡(古跡)	370.荒井古跡跡	
261.山代高尾古跡跡(古跡)	316.八幡山古跡(古跡)	371.長瀬塚古跡(横穴)	
262.真乘井古跡(古跡)	317.大内寺(古跡)	372.大通跡(新市地)	
263.大谷梗穴跡(横穴)	318.寺内山古跡跡(古跡)	373.朝倉氏御跡(城跡)	
264.野芦古跡(新市地)	319.東山腰古跡跡(古跡)	374.長野古跡(古跡)	
265.古道跡(古跡)	320.古天神古跡(古跡)	375.山口古跡跡(古跡)	
266.移山古跡(古跡)	321.大字豊名古跡跡(古跡)	376.御敷通穴跡(横穴)	
267.神山古跡(工作跡)	322.大字古跡古跡(古跡)	377.寺子屋跡(古跡・往々跡)	

第5表 周辺の遺跡地名表②(番号は第270図と対応)

第二節 山津窯跡の自然史的景観

(鳥根県立三瓶自然館 中村唯史)

1. 地形・地質的特徴

山津窯跡は中海の西岸にあり、背後には嵩山・和久羅山系の山塊が迫っている。中海は全国5番目の水域面積を持つ湖沼で、砂州によって湾の一部が海から隔てられた潟湖（海跡湖）である。嵩山・和久羅山系は、およそ500～600万年前（鹿野ほか、1994）に形成された火山岩（和久羅山安山岩）からなる山系で、中海から宍道湖、出雲平野まで連なる低地帯を狭窄する形で存在している。

今回の調査範囲の地形は、その中ほどに北から南へ延びる尾根があり、西側には小規模な谷底平野が広がり、東側は山すそに中海が迫っている。尾根部分について、調査範囲は尾根が南北に分断された形の鞍部になっていて、西側の谷底平野との比高は数mしかない。人為的な切り通しのようにも見える地形だが、後で述べるように、この部分で2万7,000年前頃の湿地的な堆積物が確認されており、自然地形であることは確かである。

地質的にみると、尾根部の上部には和久羅山安山岩が分布し、その下位には1,000万年前頃に形成された松江層の砂岩がある。調査範囲は、後者の砂岩の分布域で、尾根の東側（中海岸）では表土の直下にその風化部が露出している。尾根部には上記の湿地的な堆積物の下位に、その西側では疊を主体とする扇状地堆積物の下位に砂岩が分布している。

2. 自然史的事象について

（1）姶良Tn火山灰層

尾根部にあたる調査区（山津遺跡F区）では、遺物包含層の下位に泥質の地層が確認された。この地層は灰色～暗灰色の泥層と、有機物を多含する暗茶～黒褐色の層が互層している。有機物質の層準には材片が多く含まれる。これは、層相（地層の特徴）から、基本的に湿地的な条件で堆積した地層（以下、湿地堆積層という）とみられ、特に暗色部は組織の残存状態が良好な材片が多いことからみて、ほとんど乾燥を受けない環境で形成されたと判断できる。この地点は、鞍部ではあるが尾根の一角で、調査範囲で最も高い場所である。そこに湿地的環境が形成されていたことについては次のように考えられる。

南北に延びる尾根を横断する形で谷（鞍部）が形成された。その谷の出口付近には北側の山地から流れ出た土砂によって形成された扇状地が発達し、谷を閉塞した。それによって谷は水が滞留しやすくなり、湿地的環境となった。

湿地的環境の形成はこのように解釈できるが、鞍部の形状自体も変則的である。蛇行河川による穿窓はまず考えられない地形条件で、尾根を横断して直線的な深い谷が形成されていることは、単純な浸食作用では説明が困難である。この鞍部の東側延長上には、約1kmにわたって直線的な急傾斜の湖岸が続く。谷の北側斜面も同様の急傾斜地で、一連の直線地形（リニアメント）と判断できる。このような直線地形は断層運動の結果形成されることが多い。すなわち、この鞍部は断層上にあり、その運動と断層破碎帯の浸食によって形成された可能性が考えられる。

次に、湿地堆積層に挟まれる火山灰層について述べる。湿地堆積層の上部に、厚さ約15cmのガラス質火山灰層が挟まる。火山灰層は、色調と粒度の違いから2ユニットに区分でき、下部ユニットは乳白色で細粒砂～極細粒砂サイズの粒子からなる。上部ユニットは明灰色で中粒砂サイズから細粒砂サイズまで上方へ細粒化する構造が認められる。この火山灰は大部分がバブルウォール型と呼ばれる形状で無色透明の火山ガラスからなり、その特徴から始良カルデラ（鹿児島湾付近）が約2万7,000年前に起こした巨大噴火によって供給された始良Tn火山灰（AT）と判断できる。本地域周辺で陸上堆積層中にATが存在する場合、黄色い風化色を呈していることが普通である。当地では、湿地堆積層に挟まれていたため、ほとんど風化せずに新鮮な色調を示していたが、これは稀な例といえる。

(2) 扇状地堆積物・段丘堆積物

尾根より西側の調査区（A～D区）では、礫を主体とする扇状地性の堆積物が確認された。約10cm程度までの角礫～亜円礫を主体とし、斜交層理が認められた。トレンチで確認された範囲において、その大部分は最終氷期最盛期（1万6,000年前）以降の堆積物とみられるが、C区の一部で未固結の礫層の下位に、風化色と地層の固結の程度から段丘堆積物とみられる地層が認められた。地形的にみると、尾根の裾に沿って、一段高い平坦面がある。C区の北側からD区は、地形的にはこの平坦面上にある。この面は最終氷期最盛期以前（最終間氷期か？）に形成された低位段丘に相当すると考えられる。出口部に段丘が残存していることは、AT降灰以前の段階（2万7,000年前以前）で尾根部に形成された谷の出口が閉塞気味になっていたという上記の推定と調和的である。それは以下のことによる。

氷期中に相当する2万7,000年前後は、一般的には海面低下に伴って陸上では浸食作用が卓越する。したがって、主谷（ここでは扇状地堆積物の分布域）に合流する支谷（ここでは尾根鞍部の谷）の出口が閉塞される確率は低いと推定される。しかし、支谷の出口に段丘が存在していれば、谷の地形勾配は緩やかだったことになる。その場合、谷の出口部分に斜面崩壊などによって土砂が堆積することで、支谷は容易に閉塞し得ると考えられる。

(3) 地滑りによる窓跡の変形

J区では、窓が不自然な形状で検出された。その詳細は、本文317～324ページに述べられている。この不自然な形状について、窓の下方に円弧滑りの末端で形成されたとみられる小規模な断層が認められ、側方にも水平方向にずれているとみられる箇所があることから、窓の検出部分は地滑り上塊とともに上方から移動してきた可能性が高い。

J区付近は、上記のように松江層の砂岩が分布している。この砂岩の風化部は表層の地滑りを起こしやすく、その分布地の斜面は地滑り地域に指定されていることが多い。松江層の分布域に限られるわけではないが、本地域周辺では、発掘調査で地滑りによって変形した遺構が検出される例がしばしばある。例えば、田和山遺跡では環濠が地滑りによってずれている箇所が認められている。

施野和彦・山内靖喜・高安克己・松浦浩久・豊 達秋（1994）松江地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）、地質調査所、126p.



挿図写真1 山津遺跡F区の堆積層

下部の暗色部に材片と腐植を多含する。



挿図写真2 A T火山灰層の產状

山津遺跡F区で確認されたA T火山灰層。ねじり錘の長さは約25cm。

第三節 山津遺跡における花粉分析 (文化財調査コンサルタント株式会社 渡辺正巳)

はじめに

山津遺跡は、島根県東部の松江市大井町地内に位置する。本報は、渡辺(2006)をもとに本発掘報告書に併せて書き直したものであり、考察内容は変わらない。また、本報で扱った花粉分析結果、AMS年代測定結果は、島根県教育委員会(島根県古代文化センター)が「風土記事業に伴う歴史景観復元調査」の一環として、財團法人松江市教育文化振興事業団の協力の下、文化財調査コンサルタント株式会社他に委託して実施したものである。

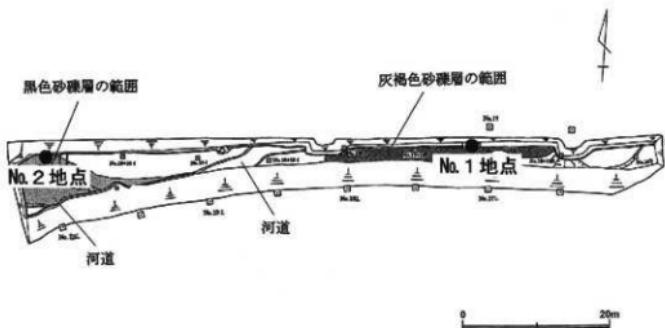
分析試料について

第271図の平面図中、山津遺跡E区のNo.1, No.2地点において分析用試料を採取した。各地点の模式柱状図および試料採取層準を第272、273図の花粉ダイアグラム中に示している。

分析方法

花粉分析は島根県教育委員会(島根県古代文化センター)より文化財調査コンサルタント株式会社に委託され、同社の渡辺(著者)が行った。分析処理は渡辺(1995)に従って行っている。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また、イネ科花粉を中村(1974)に従い、イネを含む可能性の高い大型のイネ科(40ミクロン以上)と、イネを含む可能性の低い小型のイネ科(40ミクロン未満)に細分している。

AMS年代は島根県教育委員会(島根県古代文化センター)よりBeta Analytic Inc.に委託され、測定された。また、INTCAL98が校正曲線として使われている。



第271図 試料採取地点の位置 (山津遺跡 E 区)

地点	試料No.	測定年代 (yrBP±1σ)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C (yrBP±1σ)	暦年代 ^a (cal y.)	測定番号 (Beta-)
No.1地点	7	22480±160	-28.4	22420±160	-	175434
	10	24400±200	-28.9	24340±200	-	175431
	11	25220±210	-28.9	25160±210	-	175432
No.2地点	8	7420±40	-29.4	7350±40	BC6250-6090	175433

^a: 2 sigma, 95% probability

第6表 AMS 年代測定結果

分析結果

花粉分析結果を、第272、273図の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として、各分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示した。また右端の花粉総合ダイアグラムでは木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、それぞれの分類群毎に累積百分率として示した。

AMS 年代測定結果を各ダイアグラム中に表したほか、詳細なデータを第6表に示した。

局地花粉帯の設定

花粉組成の特徴および、各層準の推定堆積年代、AMS 年代測定値を基に、以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料Noも下位から上位に向かって記した。

- (1) V 帶 (No.1 地点試料No.13～7)
ハンノキ属、コナラ亞属が卓越傾向を示すほか、トウヒ属、マツ属（複維管束亞属）などの亜寒帯（亜高山帯）要素が安定して出現する。
- (2) IV 帶 (No.2 地点試料No.9)
トチノキ属が卓越するほか、ニレ属—ケヤキ属を伴う。
- (3) III 帶 (No.2 地点試料No.8～6)
アカガシ属、ムクノキ属—エノキ属が増加傾向を示す一方で、トチノキ属が減少傾向を示す。
- (4) II 帶 (No.2 地点試料No.5、4)
アカガシ属が卓越する。
- (5) I 帶 (No.1 地点試料No.6～1、No.2 地点試料No.3～1)
マツ属（複維管束亞属）、スギ属、アカガシ亞属、コナラ亞属が卓越する傾向にある。
卓越種の出現傾向および推定堆積時代から、I 帶をさらに c～a 亜帶に細分した
 - ① c 亜帯 (No.1 地点試料No.6～4、No.2 地点試料No.3～1)
卓越種の内、スギ属が特に顕著に出現する。
 - ② b 亜帯 (No.1 地点試料No.3、2)
スギ属が低率になり、マツ属（複維管束亞属）、コナラ亞属がやや高率になる。

③ a 亜帯 (No.1 地点試料No.1)

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、スキ属を伴う。アカガシ亜属、コナラ亜属はほとんど検出されない。

古環境推定

前述のように、各地点のダイアグラム左に出上遺物から推定される堆積年代、およびAMS年代測定値を示してある。各花粉帶との関係を整理するとV帶はおよそ25000~22500年程前、IV帶はおよそ7400年前以前、III帶はおよそ7400年前、I帶 c 亜帯は8~9世紀頃、I帶 a 亜帯は近代~現代ということになる。

以下では花粉帶毎に、遺跡周辺の古植生を中心とした古環境を推定する。

(1) V帶期 (およそ25000~22500年程前)

AMS年代測定値がいずれも最終氷期の年代を示す。野尻湖花粉グループ（1993）などで示されるように、氷期の間でも気候条件は頻繁に変化し、植生の変化があったことが明らかである。しかし、今回の分析精度（試料の数、間隔）が粗いために、花粉帶（亜帯）細分の判断が出来なかった。また、最終氷期の堆積物は当地域ではほとんど認められておらず、花粉分析が成された意義は大きい。ハンノキ属花粉が高率を示すことと腐植に富む層相から、調査地近辺にはハンノキ類の繁茂する湿地が分布していたと考えられる。またコナラ亜属が卓越することから、近辺の山々はミズナラなどを主要素とする冷温帯林で覆われていたと考えられる。また、代表的な亜寒帯針葉樹種であるトウヒ属、マツ属（単維管束亜属）に加え、（同じく針葉樹ではあるが）温帯から亜寒帯までと分布域の広いモミ属、ツガ属が、中国山地あるいは北山山地高所に亜寒帯（亜高山帯）針葉樹林として分布していた可能性がある。

一方、草本花粉は湿地内あるいは湿地近辺に成育していた草本類からもたらされたと考えられる。湿地内にはイネ科、カヤツリグサ科の他、ユリ科やワレモコウ属などが成育していたと考えられる。

(2) IV帶期 (およそ7400年前頃以前)

上位の試料No.8層準から 7350 ± 40 yr.BPのAMS測定値が得られており、これ以前に堆積したと考えられる。

トチノキ属が卓越し、ニレ属一ケヤキ属を伴うなど、調査地近辺で渓谷林が発達していたことが解る。また、現在トチノキ属は冷温帯を中心に日本で成育しているが、暖温帯においても生育可能である。優占種で気候を明確に示す種類がなかったことから、花粉組成から気候を論じることは出来なかった。

また近辺の開放地には、カヤツリグサ科やイネ科の草本が繁茂していたと考えられる。

(3) III帶期 (およそ7400年前頃)

最下部の試料No.8層準から出土遺物から 7350 ± 40 yr.BPのAMS測定値が得られており、このころ

に堆積したと考えられる。

前時期から一変してトチノキ属が急減し、さらに減少傾向を示す。またアカガシ亜属、ムクノキ属—エノキ属が急増し、さらに増加傾向を示している。

繩文海進に伴う雨量の増加および温暖化によりカシ類を主要要素とする照葉樹林が拡大し、遺跡周辺の山地を覆うようになったと考えられる。またトチノキ属やニレ属—ケヤキ属の成育した渓谷内は土壤の流出、土砂の流入などにより荒廃し、バイオニア植物であるムクノキ類が目立つようになったのではないか。

(4) II帯期（およそ7400年前頃以降、6000～4000年前頃）

下位のⅢ帯が示す7350±40yr.BP以降の堆積であると考えられる。大西ほか（1990）、渡辺ほか（2003）の結果と比べると、アカガシ亜属とシイノキ属—マテバシイ属の出現傾向からカシ亜帶あるいはシイ亜帶に対応する可能性が指摘され、6000～4000yr.BP頃に堆積したと考えられる。遺跡周辺はカシ類を主要要素とする照葉樹林で覆われていたと考えられる。

(5) I帯期（8～9世紀頃以降）

出土遺物から、c亜帯期が8～9世紀頃に堆積したと考えられる。また、この時期は隣接する山津窯の操業時に対応している。前述のようにc亜帶はスギ属で特徴付けられ、大西ほか（1990）、渡辺ほか（2003）のスギ亜帶に対比される。マツ属（複維管束亜属）、スギ属の出現率およびソバ属の出現傾向からNo.2地点が、No.1地点の下位に対応する可能性が指摘できる。またこのことは断面図からも読み取れるが、出土遺物では両地点でのc亜帯期の堆積時期を明確に分ける事ができない。b亜帶ではスギ属が低下し、マツ属（複維管束亜属）あるいはコナラ亜属が微増することから、大西（1990）のカシ・ナラ亜帶に対比される。a亜帶は近代までの耕作土であると考えられ、マツ属（複維管束亜属）、スギ属が特徴的であることからマツ・スギ亜帶に対比される。

① c亜帯期

イネ科（40ミクロン以上）が高率を示すと共に該当層準が水平堆積を示す傾向にあり、調査地点に水田が存在したことがほぼ明らかである。また同時にソバ属も検出され、休耕田、二毛作、あるいは畦を用いたソバ作が推定される。

一方遺跡近辺の山々はカシ類を主要要素とする照葉樹林に覆われていたと考えられるが、谷斜面にはスギの分布が推定される。また山津窯操業、あるいは生活のために、一部の山ではアカマツ類や、コナラ類を要素とする薪炭林が分布していた可能性もある。

② b亜帯

引き続きイネ科（40ミクロン以上）が高率を示し、該当層準も水平堆積を示す傾向にあることから、引き続き調査地点に水田が存在したと考えられる。またc亜帶同様にソバ属も検出され、休耕田、二毛作、あるいは畦を用いたソバ作も継続されたと考えられる。

遺跡近辺の山々では照葉樹林、スギ林が減少し、アカマツ類や、コナラ類を要素とする薪炭林に

変わつていった可能性がある。

③ a 亜帯

引き続きイネ科（40ミクロン以上）が高率を示し、該当層準も水平堆積を示す傾向にあることから、引き続き調査地点に水田が存在したと考えられる。またc、b亜帯同様にソバ属も検出され、休耕田、二毛作、あるいは畦を用いたソバ作も維続されたと考えられる。一方、水田雜草と考えられる種類（例えばサジオモダカ属、カヤツリグサ科、イネ科（40ミクロン未満）など）の出現率は激減する。このことは、b亜帯からa亜帯の間で、より集約的な耕作（稻作）が行われるようになつた結果と考えられる。

遺跡近辺の山々には、アカマツ類を要素とする薪炭林やスギ植林が広がつていた可能性がある。

まとめ

山津遺跡で花粉分析を行い、以下のことを考察した。

- (1) 花粉分析結果、推定堆積年代をもとに、V～I帯の5花粉帯を設定した。さらに、I帯をc～a亜帯の3亜帯に細分した。
- (2) 花粉分析結果をもとに、遺跡周辺の古環境を推定した。特筆すべき点は、以下の事柄である。
 - ① I帯 c 亜帯期とした8～9世紀以降、遺跡内で水田が分布したことに加え、ソバが栽培されていたことが明らかになった。
 - ② またこの時期の遺跡近辺の山々は、主にカシ類を主要素とする照葉樹林に覆われ、一部の山ではアカマツ類や、コナラ類を要素とする薪炭林が分布していた。また谷斜面にはスギが分布していると推定される。
 - ③ 中海宍道湖地域では分析例の少ない、最終氷期の花粉組成が得られた。
 - ④ 最終氷期には、現在の平野部にはミズナラ林が広がり、中国山地にはモミ類や、トウヒ類、ゴヨウマツ類、ツガ類からなる亜寒帯林に被われていたと考えられる。

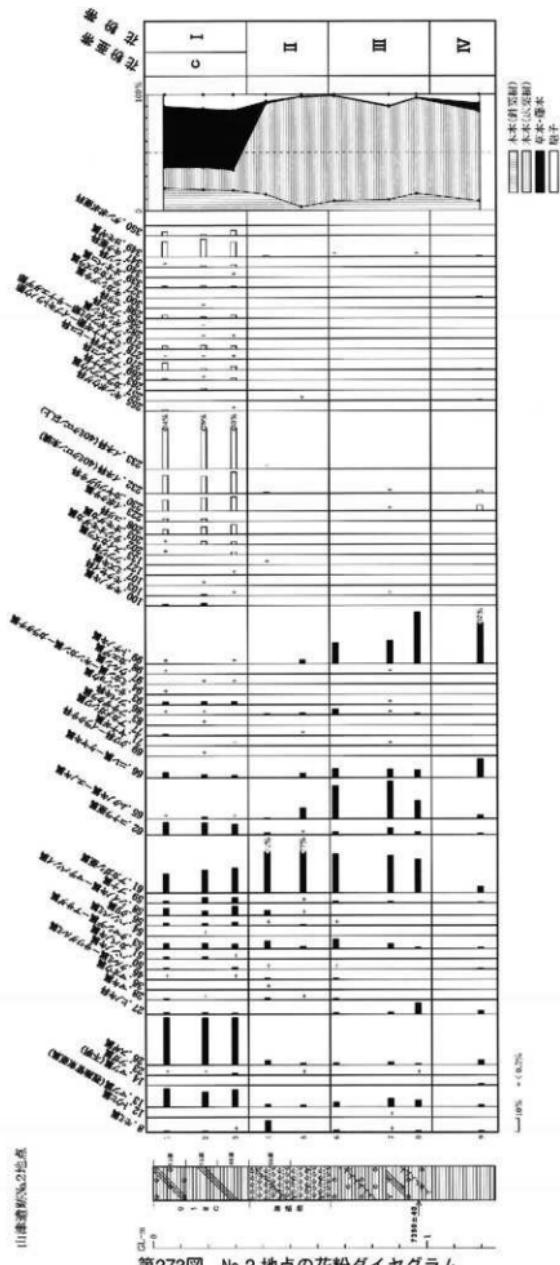
引用・参考文献

- 大西郁夫・下場英樹・中谷紀子（1990）宍道湖底下完新統の花粉群、鳥根大学地質学研究報告、9、117～127.
- 中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究、13、187～197.
- 野尻湖花粉グループ（1993）野尻湖底ボーリングN J 88試料の花粉化石群集と古環境変遷、中部日本における最終氷期の古環境—野尻湖底ボーリングのコア分析一、地図研専報、41、39～52.
- 渡辺正巳（1995）花粉分析法、考古資料分析法、84、85、ニューライフ・サイエンス社.
- 渡辺正巳・佐伯純也・平木裕子（2003）日久美遺跡発掘調査における花粉層序の成果、鳥取地学会誌、7、1～9.
- 渡辺正巳（2006）島根県松江市山津遺跡における花粉分析、古代文化研究、14、81～86、鳥根県古代文化センター.

※ 本報告分は鳥根県古代文化センターの了承を得て、「古代文化研究」14号の渡辺論文を一部改変・転載したものである。



第272図 №1 地点の花粉ダイヤグラム



第273図 No.2 地点の花粉ダイヤグラム

第四節 山津遺跡出土の種実遺体

(中村 亮仁)

1. 試 料

試料は主に旧河道や溝状構造から出土した種実類で、いずれも発掘調査中に取り上げられたものである。これらの種実遺体はタッパーの中に水浸の状態で保管されていた。種実遺体のほとんどが、山津遺跡C区の古墳時代中期の旧河道3・SC201から出土しており、今回は堆積地周辺の古環境を推定するために分析をおこなった。

2. 同定結果

結果は、イヌガヤ・コナラ属・ヤツツバキ・モモ・エゴノキの5分類群が同定された。結果は第7表に示し、以下に分類群の形態的特徴を記す。

一記載一

a. イヌガヤ *Cephalotaxaceae harringtonia* K.Koch 種子

種子は黒褐色～茶褐色で、狭倒卵形を呈する。表面には微細な突起が分布し、全体として粗い。長さ19.9～21.5mm、幅9.9～9.6mmである。

b. コナラ属 *Quercus* 堅果

堅果は黒褐色で、梢円形～長卵形を呈す。下端に基部があり、表面にはやや光沢がある。長さ16.8mm、幅8.4mmである。未成熟の個体も確認されている。

コナラ属としたものにはコナラやナラガシワといったコナラ亜属やイチイガシやウラジロガシなどといったアカガシ亜属が含まれる。ただし、堅果のみであるため同定には至っていない。

c. ヤツツバキ *Camellia japonica* L. 果実

果実は茶褐色～黒褐色で、卵形を呈す。表面は平滑である。長さ33.1mm、幅24.3mmである。基部に短い柄が残存している個体や、やや未成熟と思われる個体も見受けられた。

d. モモ *Prunus persica* Batsch 核

核は茶褐色で、平面は先端がとがる卵形を呈する。側面に縫合線が巡り、表面には特有の隆起がみられる。長さ21.7～27.4mm、幅18.7～23.0mm、厚さ16.0～18.3mmである。齧歯類による食害を受けた個体が見受けられた。

e. エゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc. 種子

淡褐色～黒褐色で、卵形を呈す。表面に3本程度の縦方向の溝が走る。下端では大きなへそがある。長さ10.2～13.5mm、幅7.1～7.9mmである。

3. 所 見

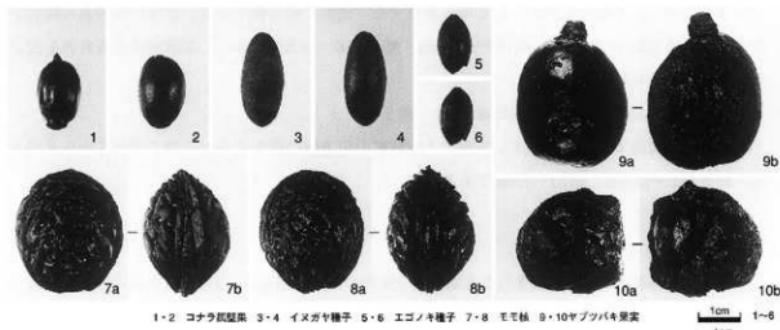
ここでは、種実遺体が多く検出された古墳時代中期のC区・旧河道3・SC201周辺の古環境を推定してみる。ただし、発掘調査中に目に付いたものを取り上げた種実遺体群なので偏った試料であること、同定された種実遺体の量が少なく具体的な古環境の推定に限界があることをあらかじめ断っておく。

現在の遺跡周辺もしくは後背地の嵩山から派生する丘陵では一部を除きアカマツを主体とする二次林が成立している。しかし、本来はシイ類やカシ類などの常緑広葉樹から構成される照葉樹林が占有していたと考えられている。検出された分類群で照葉樹林の要素となりうるのはイヌガヤ・ヤブツバキで、夏緑広葉樹としてはエゴノキがある。エゴノキは沢沿いなどの水分条件の良い場所にしばしば生育する種類である。コナラ属としたものには照葉樹林を構成するアラカシやイチガシなどのアカガシ亜属やコナラ・ミズナラなどの落葉広葉樹林を構成するコナラ亜属の両者が含まれる。

今回検出された分類群からは、明らかに人為的に利用されたとみられる種子や果実はモモ以外確認されていない。このためモモ以外の分類群については遠隔地から利用目的で人の手によってもたらされた可能性は低いと考えられる。つまり、検出された分類群の多くが旧河道の上流もしくは堆積地周辺に生育していたものからもたらされた可能性が高いと考えられる。また、イヌガヤとヤブツバキといった照葉樹林の構成要素となる分類群が確認されているものの旧河道周辺に豊かな森林である照葉樹林が分布していたという積極的な根拠としては乏しい。しかし、少なくともイヌガヤやヤブツバキ、エゴノキが旧河道周辺や遺跡周辺に生育していた可能性が高いと考えられる。なお栽培植物としてはモモが同定されているが、祭祀に関与していたかどうかについては不明である。

地区	遺構	層位	日付	分類群 和名 / 学名		部位	個体数
				種子(半分)	種子片		
C区	旧河道3	黑色粘土層	011010-011011Z	イヌガヤ	<i>Cephaelisaurus harringtonia</i> Sieb. et Zucc.	種子(半分)	2
				ヤブツバキ	<i>Gaultheria japonica</i> Linn.	種子片	2
				コナラ属	<i>Quercus</i>	葉実	3
	SO201-旧河道3	-	010826	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch	葉実	2
				エゴノキ	<i>Syzygium japonica</i> Sieb. et Zucc.	種子	1
				ヤブツバキ	<i>Gaultheria japonica</i> Linn.	種子片	13
D区	-	包合層	0201	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch	葉実(半分)	1
E区	-	地山直上	050601	モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch	種子片	4
				エゴノキ	<i>Syzygium japonica</i> Sieb. et Zucc.	種子	10
						種子片	2
						半分	1

第7表 山津遺跡出土種実遺体一覧表



挿図写真3 山津遺跡出土種実

古墳時代の古環境については、島根大学構内遺跡の調査において古墳時代の自然流路の花粉分析が実施されている。その結果からは周辺の丘陵や北山山地には、カシ類やシイ類を中心とする照葉樹林が分布し、部分的に二葉マツ類やコナラを中心とする二次林の存在が推定されている。今後とも遺跡周辺の古環境を含めて、データを蓄積し、再検討する必要があると考えられる。

引用・参考文献

- 渡邊正巳 1997 「島根大学構内遺跡第7次調査（橋本地区2）の花粉分析」[島根大学構内遺跡第6・7次調査（橋本地区1・2）] 島根大学埋蔵文化財調査研究センター

第五節 山津窯跡・山津遺跡をめぐる古環境

(中村亮仁)

ここで、山津窯の操業と周辺環境がどのように関わっていたかを、花粉分析・樹種鑑定・種実遺体分析の結果と考古学的に得られた知見をもとに考えてみる。まず第二章第三節・渡辺報告での花粉分析結果をみると8~9世紀以前では草本に比べ木本が優占する。また、木本はアカガシ亞属（カシ類）が優占し、シイノキ属-マテバシイ属が伴うことから、自然度の高い豊かな照葉樹林が分布していたと考えられる。8~9世紀になると、木本に比べ草本が卓越していることがみてとれる。また、草本の中でもイネ属タイプが優占している。これらのことから、周辺の植生は森林がやや後退し、草本が卓越する植生となる。特に平野部ではイネ属タイプが優占することなどから水出が広がっていたことが推定される。また、木本ではスギやマツ属複雑管束亞属、コナラ属コナラ亞属などの二次林の要素の高い分類群が増加していることから、丘陵地を中心に照葉樹林に代わってマツ属複雑管束亞属（二葉松）やコナラ属コナラ亞属、スギ属などの二次林が拡大したことが示唆される。

次に第五章第四節・渡辺報告での山津窯1号窯の操業による灰原中の炭化材15点について樹種同定結果をみてみる。山津窯は6世紀後半~8世紀もしくは9世紀まで須恵器生産を操業していた窯跡である。山津窯1号窯は考古学的形式から6世紀末~7世紀初頭に比定されている。樹種同定の結果は、クリ・シイノキ属・シイノキ属・アカガシ亞属・クスノキ科の5分類群の樹種と樹皮が確認されている。これらの中で照葉樹林の主要構成要素となるのはシイノキ属・アカガシ亞属・クスノキ科である。窯の操業に供される木材などの燃料は遠方から運搬された可能性も否定できないが、基本的には窯周辺に生育している木本を中心に使用されていたと考えるのが妥当であろう。このことは、窯の操業時の周辺には、シイノキ属・アカガシ亞属・クスノキ科などを伴う自然度の高い照葉樹林が分布していたことを示している。なお、AMS年代測定結果はAD390~645（第五章第四節・渡辺報告）、AD540~665（第五章第三節・小林ほか報告）という結果が得られている。

第二章第四節（中村報告）での種実遺体分析では古墳時代中期の川河内3からイスガヤ・コナラ属・ヤブツバキ・モモ・エゴノキの5分類群が同定されている。検出された分類群で照葉樹林の要素となりうるのはイスガヤ・ヤブツバキで、夏緑広葉樹としてはエゴノキがある。コナラ属としたものには

照葉樹林を構成するアラカシやイチガシなどのアカガシ亜属（カシ類）やコナラ・ミズナラなどの落葉広葉樹林を構成するコナラ亜属（ナラ類）の両者が含まれる。また、照葉樹林の構成要素となるイヌガヤとヤブツバキといった分類群が確認されているため、イヌガヤやヤブツバキ、エゴノキが旧河道周辺や遺跡周辺に生育していた可能性が高いと考えられる。

以上のことをまとめると、窯の操業以前については、丘陵地において縄文時代以降から古墳時代（6世紀後半）に至るまでアカガシ亜属（カシ類）やシイノキ属を中心とする自然度の高い照葉樹林が広く被い、平野部でも部分的に分布していたと考えられる。旧河道3周辺についても照葉樹林が広がっており、林内にはカシ類に加え、イヌガヤやヤブツバキなどの常緑樹が生育していたと考えられる。また、旧河道沿いには夏緑広葉樹のエゴノキも生い茂っていたと考えられる。窯が操業し始めると、周辺に生育していたシイノキ属・アカガシ亜属・クスノキ科などの常緑広葉樹は燃料材として伐採されはじめる。伐採によってシイノキ属・アカガシ亜属・クスノキ科などを中心とする照葉樹林の分布範囲が後退していく。特に、丘陵地の伐採された場所では二葉松やナラ類などが生育し、二次林的要素のつよい森林に変容していったとみられる。平野部でも窯の操業以前まで残存していた照葉樹林はより一層後退したと考えられる。8～9世紀に至ると、度重なる窯の操業に伴い丘陵地ではさらに二次林化が進む。平野部では森林が姿を消し、水田が被う景観が広がり、木本はあっても孤立木程度に分布していたと考えられる。

第三章 生業

第一節 「大井浜」世界の復元

(関 和彦)

はじめに

天平五年、西暦七二三年に編纂された『出雲國風土記』の嶋根郡条に次のような記載がある。

大井濱 則ち海鼠・海松あり。又、陶器を造る。

僅か二十文字程度の小文であるが、古代社会における生産の様相を物語る貴重な記述である。この「大井浜」の遺称地は松江市大井町として現在も残されている。『出雲國風土記』嶋根郡条末記載の神社項によれば同地に「大井社」と呼ばれた神社が鎮座していた可能性が高い。確かに情報量としては少ないが、周辺地域とのかかわりの中で改めて当該資料を読み込むと古代出雲世界において「大井浜」に形成された地域社会が重量な役割を果していたことが浮かんでくる。本稿では「大井浜」の発掘で明らかにされた成果をふまえ、文献から想定される地域社会像を当てはめながら、具体的に「大井浜」の古代世界を描くことを課題とする。

慶応二（一八六六）年に『出雲國風上記』にみえる神社を巡り、「風土記社參詣記」を著した小村和四郎重義は「大井浜」の「大井社」を訪れ、「神の代はとほしといふと遠からず大井の清水今も流るる」と『出雲國風土記』の時代に思いを馳せている。その和四郎が見た古代の清水を、今、私も眺め、手に掬い、直接的に古代世界に身を浸してみたい。

I 「即ち海鼠・海松あり」考

「大井浜」に関していち早く言及した岸崎時照の『出雲國風土記抄』（天和三年・一六八三）は「大井浜」の地域比定を行い「朝南の東、大井村の海濱」とする。以後、横山永福の『出雲國風上記考』も同様の見解をとり、現在『出雲國風上記』研究の指針となる加藤義成氏の『出雲國風土記參究』、秋本吉郎氏の『風上記』（岩波古典文学大系）も現在の大井の海岸としており、異論はない。

この「大井浜」は古代においては嶋根郡朝的郷域内であったと推定されている。勿論、「郷」の前身である国郡里の「里」は本来的に「五十戸」という人為集団であり、理論上は領域を持たないものであるが、少なくとも「里」制施行三十年余を経過しており、「郷」は人為集団の広がりを背景に郷域を含む小なる地方行政体と化していたと思われる。

その朝的郷内の「大井浜」の有り様に関する注目すべきは、風土記時代では現在とは異なり汀線がより陸地に入り込み、袋状の入り江の様相を呈していたと考えられることである。大井地域の字名でいえば、瀬・客ノ本・客原・岩崎の地点が後世の堆積・埋め立てであることは容易に想像できる。現に『大井区誌』が載せる「出雲新聞發地ノ変遷ノ口碑」によれば大井神社の南の字・九日田を北限にして客浜一帯まで中海であったという（第274図）。

尚、大井より東の大海崎への海岸は満潮の際には徒歩交通不能であったらしい。現に慶応二年に現地を訪れた小村和四郎重義はその日記「風土記社參詣記」で大井から山道をのぼり、迷いながら大海崎に到着したとの苦労話を残している^(注1)。

現・大井地域を訪れると、大井神社を水田の要として扇形に広がっているのが見えるが、その殆どは古代において中海の海域内であった。古代の大井地域の風景は中海の汀線が丘陵の麓にまとわりつく形であったと想像され、そこに田地の存在を見いだすことはできないのである。これは後述するように古代の大井社会を考える上で貴重な知見となろう。

ここで大井浜の説明にみえる「則ち海鼠・海松あり」の記述について一瞥しておきたい。この記述に関して加藤義成氏は「海鼠」はナマコの古名、「海松」はミルで「浅海の岩石に着生する緑色藻類の一種で食用に供される」とし、ともに大井では「今はとれない」としている。この説明に関して動植物学的に教えられることははあるが、やはり森田喜久男氏のように『川雲國風土記』が「海鼠や海松のことを特記していることを重視すべき」とする歴史的な問い合わせが必要である^(注2)。

森田氏は『古事記』の天孫降臨神話にみえるアメノウズメの伝承に注目する。アメノウズメが「諸の魚」を皆集めて「天神」への忠誠要請を行ったところ、海鼠だけが拒否したので、その口を縫いたというのである。氏によれば「鳥の連賛貢納の起源」神話に海鼠が登場することは海鼠が重要な祭祀の場で活用された反映であり、「大井浜」の場合は熊野大社への貢納に係わったのであろうとする。

確かに鋭い分析であり、その可能性は否定できない。そこから大井浜における漁業的生業の側面が引き出され、大井浜の性格の一面が浮きだされてくる可能性もある。

しかし、大井浜に関する記述には「又、陶器を造る」との貴重な説明もあり、より慎重に「則ち海鼠・海松あり」の記述に対応すべきではなかろうか。すなわち「海鼠・海松」の記述に関しては別の観点から再検討する余地がある。『川雲國風土記』鳩根郡条の島根半島南岸に関する記述には一つの流れがある。今、一覧表にまとめると次のようになる。

南は大海なり。(西より東に行く。)	
側面保戸瀬	大きいくらの魚
南北の二浜	白魚を捕る
大井浜	海鼠・海松あり
栗江崎	崎の西は入海の堺
	南の入海
	入鹿・和爾・鰐・須受枳・近志呂・
	鶴仁・白魚・海鼠・鰐・海松
栗江崎	崎の東は大海の境
輝石島	海藻生へり
宇治比浜	志昆魚を捕る
益造浜	志昆魚を捕る
御山比浜	志昆魚を捕る
加労夜浜	志昆魚を捕る
美保浜	志昆魚を捕る

『出雲國風土記』がはたして熊野大神の祭祀の獻上のみで海産物を特記したというわけではなく、中海と日本海を分岐する栗江埼を海産物の種類を分ける「促戸（海峽）」と意識しての叙述の結果とみなすべきではなかろうか。この一覧表で奇異に感じるのは「南北の二浜」では「白魚を捕る」、また宇由比浜から美保浜までも「志昆魚を捕る」と表記されているにもかかわらず、大井浜では「海鼠・海松あり」という存在を示す表記に止まっている点であろう。また鯉石島でも「海藻生へり」という存在表記に終始している。

問題を解く鍵は『出雲國風土記』が、島根半島の北岸に面する船越・秋鹿・橋瀬・出雲・神門郡の海岸描写において「○○を捕る」という表記を「もとらず、生へり」「あり」で表記を済ませている点にある。「捕る」と「あり」では全く表記が異なるのであり、岩などに着生している海藻類などは「捕る」・「あり」の表記は可能であるが、宇由比浜に「志昆魚あり」とはならないであろう。人海を泳ぐ志昆魚（鮎）の居所を浜で表記することは不可能である点をおさえれば、宇由比浜「志昆魚を捕る」、美保浜「志昆魚を捕る」とはそれぞれ宇由比浜、美保浜の住人が鮎漁を行い、「志昆魚を捕」っていたことを物語っているのである。

大井浜の「海鼠・海松あり」はその観点からみると大井浜の住人が採集していたというのではなく、袋状の入り江の様相を呈していた浜が「海鼠・海松」の生息に適していたという報告として受け止めることができる。当時の漁業権、採集権に関する研究は十分になされていないが、『出雲國風土記』の当時は未だ漁業権、採集権は十分に確立はしていなかったようである。

森田氏は何故、『出雲國風土記』が「陶器を造る」よりも「海鼠・海松あり」の記述を先にもってきたのか、その点が重要ともするが、その点に明確な答えを示されていない。それは海岸描写で重要なのは海産物であること、「海鼠・海松」は大井浜に付随して書かれているが、その自然の恵みは中海周辺の人々（漁民）全体にもたらせるものであったことが、「陶器を造る」よりも「海鼠・海松」の記述を前に持ってきた理山であろう。大井浜の住人が独占的に「海鼠・海松」の採集をしていたのではなく、中海周辺の人々が大井浜付近で「海鼠・海松」の採集に勤しんでいたものと思われる。この理解は次の「陶器を造る」記述の重要性を更に増すことになる。

Ⅱ 「陶器を造る」考

「陶器を造る（造陶器）」の記述は貴重である。このように上器生産の場所を明記する古代史料は類を見ない。此の大井浜一帯における「陶器」生産は発掘によって裏付けられており、考古資料と文献史料が整合する。

すでに大井浜における「陶器」、すなわち須恵器編年に関しての研究は山本清・柳浦俊一氏によってなされており、その成果を活かしていきたい^{〔註2〕}。

今までに確認されている遺跡としては寺尾窯跡・廻谷窯跡・勝田谷窯跡・明曾窯跡・池ノ奥窯跡・山津窯跡がある。また大井の谷から少し離れた南側の谷（『出雲國風土記』がいう「南北の二浜」の一つ、北浜にあたる）に岩沙窯跡とババタケ窯跡があることも注目しておきたい。この列挙した八箇所に及ぶ窯跡が大井浜の「陶器を造る」遺跡として注目され、取り扱われてきたのである。

この大井浜の須恵器生産に関しては六世紀後半頃から八世紀後半にかけて展開し、出雲全体にその製品は流通したとされている。しかし、注目すべきはその八箇所の窯が同時操業ではなく、それぞれ微妙に時期がずれている点であろう。論者によりことなるが、ここでは山本・柳浦両氏の須恵器編年によりその動向をグラフで素描してみたい。

〔山本編年〕

	I期	II期	III期	IV期
山津				
寺尾		■	■	■
廻谷	■	■	■	■
池ノ奥		■	■	■
明曾			■	■
勝田谷			■	■
ババタケ		■	■	■
岩汐			■	■

〔柳浦編年〕

	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期
山津			■	■	■	■	■	■	
寺尾		■	■						
廻谷		■	■						
明曾				■	■	■	■		
勝田谷						■	■		
ババタケ		■	■	■	■	■	■	■	
岩汐			■	■	■	■	■	■	

問題は『出雲国風土記』が編纂されたのが大平五年、西暦七三二年であり、その当時大井浜では須恵器生産が盛んであったという事実である。柳浦編年・山本編年とも上器形式によるものであり、相対的なものであるが、大略にみて『出雲国風土記』編纂段階において窯が開業していたのは柳浦編年で6から8期、山本編年でIV期に当たる。

『出雲国風土記』編纂に携わった鳴根郡郡司らが認識した窯は明曾・勝田谷・ババタケ・岩汐・山津窯の中にある筈である。すでに大井の岸に近い寺尾・廻谷の窯はその使命を終え、その周辺部へと新たなる原料である粘土、また燃料である薪をもとめて散在的に広がっていったものと思われる。『出雲国風土記』が大井浜の項で「陶器を造る」と明記したのは丁度その頃のことであり、大井浜の提点付近はすでに開発の跡地となりつつあったと思われ、「出雲国風土記」があえて大井浜としたのは、その海浜に管理・流通にかかる「陶器を造る」の拠点的な施設が継続的に存在したからではなかろうか。

この大井浜須恵器生産に関して最も重要な問題は須恵器の生産のあり方である。この点に関しては

柳浦氏の研究が注目される。柳浦氏の論の特色は、大井地区の須恵器の生産が国都の統制のもとになく、比較的主体的の統率者のもと、地域の工人集団が生産、そして流通に携わっていたとするところにある。しかし、一般に「工人集団」という用語を使用する時点でその実態解明の道が閉ざされてしまうのである。

問題を解く鍵は「工人集団」と大井浜との密着度に求めることができる。この地域に関するならば「陶器を造る」場として認知される以前の大井浜の状況を想定することが肝要である。農業生産の場としては田地が少なく、また漁業にしても「海鼠・海松あり」として中海周辺の人々による草刈り場的な所であり、大きな集落の存在を想定することは困難である。大井浜地域に地域集団の長としての墳墓が造成され始められるのは山本編年でいうⅣ期の山巻占墳、そして池ノ奥占墳が早い方である。それは山本編年における寺尾塚の操業時期とも重なり、当該地域における須恵器生産の一民族的な「工人集団」の長として姿を表しているのであろう。廻谷、そして寺尾へ生産拠点を移し、須恵器生産の向上・流通を扭い、地域首長としての財をなしたものと思われる。

但し、律令制が施行され、国都里制が確実に出現地域に展開する中で大井浜の須恵器生産は大きく変化し、また「工人集団」のあり方を変容せざるを得なかったと考えられる。大井浜の拠点である廻谷・寺尾塚が開発で「陶器を造る」環境でなくなると、必然的にその開発は周辺地域の勝田谷窯跡・明智窯跡・池ノ奥窯跡・山津窯跡などの地域へと拡大する道を取るようになった。その全体を包む地域的空間は1キロ四方にも及ぶものであり、国都との関わりなく勝手に山野を開発し、窯を構築し、樹木を切り、「陶器を造る」ことは不可能になったと思われる。そのことは大井浜の須恵器生産の大きな転機をもたらしたのであろう。(第275図)

『出雲國風土記』時代は山本編年Ⅳ期、柳浦編年6・7・8期に対応すると考えられ、大井浜に須恵器生産に携わる人々が生活していたことは確実である。大井神社の北側の丘陵の谷口に位置するイガラビからは七世紀中頃から九世紀にかけて土器を出土する遺跡が確認され、掘立柱建物一棟を伴う生活跡が確認されている。またその北の萬町A遺跡では竪穴建物六棟、掘立柱建物八棟が確認され「工人集団」の住居との想定がなされている。その中には『出雲國風土記』時代に相応する建物も存在した可能性もある。

問題はこの「須恵器生産に携わる人々」がはたして五十戸・一里(郷)の構成員として編入されていたかどうかである。この素朴な疑問を公に発した研究を管見の限り知らないが、古代社会史全体を見直す上でも誰かが問題を提起する必要があろう。戸籍の編成の目的は一般には班田収授であるとされているが、大井浜の古代の地理的様相、そして生業をみると、班田収授を行える環境になく、また須恵器生産の「工人集団」を農民化することは国家的にも、地域社会にとっても全く意味をなさないからである。例え戸籍されていたとしても、漁民と同じく口分田の支給は最小限のものであったであろう。

「工人集団」の集団のあり方についても基本的に考え方がある。それは鹿沢A遺跡で確認された「竪穴建物」がはたして住居なのかという問題である^⑩。住居とは「家族」の日常的な生活拠点を示す用語であり、その住居で生活する「工人集団」は家族全体として生業を須恵器生産にしていたと

いうことになる。それは、律令制下において大井浜から地域周辺に生産拠点が散在していく中ではそのような旧態依然の生産状況ではなく、須恵器生産を専業とする「工人」が国・郡から派遣される体制になっていたと思われる。その場合、「堅穴建物」は家族が暮らす「住居」でなくして、「飯場」的な共同生活拠点としての「建物」と見るべきであろう^{註4}。

『日本靈異記』下巻第十三話に次のような伝承が残されている。

美作國英多郡の部内に、官の鉄を見る山有り。帝船安倍天皇の御世に、その国司、使六十人を召し發げて、鉄山に入れ、穴に入れて鉄を堀り取らしめ。

これは美作國の官営の鉄鉱山の採掘における坑夫の徵発に関する記述であるが、坑夫は一人一人が徵発され、労働に従事していることがわかる。伝承の後段では「役人」の家族は母村で生活していることが判明する。想像するに「役夫」たちは単身赴任であり、堅穴建物で男子のみ共同生活を送っていたのであろう。そうであるならば、彼らは母村で編戸されており、大井浜においては別の形で掌握されていたものと思われる。その実態については現状においては検証すべき手段はないが、史料上、特記される「陶器を造る」に関しては尚その点を含めて再検討の余地があるといえよう。

Ⅲ 「大井社」考

現在、大井地区には大井神社が鎮座しており、一般に『出雲国風土記』嶋根郡条にみえる「大井社」とされている。しかし、この点に関しては大きな問題が秘されているのである。『出雲国風土記』の写本に関しては現在平野卓治氏により詳細な検討がなされており、嶋根郡条の神社記載に関しては多くの脱落、補訂（復元）の跡が確認されているのである^{註5}。

本来の『出雲国風土記』原本においては嶋根郡には「在神祇官社」十四社、「不在神祇官社」四十五社が記載されていた筈であるが、現在伝えられている最も古いとされる細川本には僅か「不在神祇官社」が五社、大槻社・大椅社・大崎社・朝酌下社・努那弥社・棕見社しかみえず、「在神祇官社」十四社にいたっては全く姿をみせないのである。当然、大井の「大井社」の社名も確認できない。

しかし、その欠落を補おうとした『出雲国風土記』諸本の存在も見逃すわけにはいかない。『出雲国風土記』の注釈書である岸崎時照の天和三年（一六八三年）に成立した『出雲国風土記抄』では見事に脱落していた神社の中、「在神祇官社」十四社の全て、そして「不在神祇官社」四十五社の内、実に二十五社の社名が補訂されているのである。この補訂に関して加藤義成氏は風土記の編纂の督促がなされた延長三年（九二五）頃を想定しているが、平野卓治氏がいみじくも明らかにしたように岸崎時照の手になるのであろう。

問題は岸崎が脱落し僅か五社しか見えなかった社名をどのような方法で復元したかである。また岸崎の復元が正しかったかどうかの検証も必要である。この検証に関しては別に論じたところであり、ここでは「大井社」に限定して論を進めることにする^{註6}。

「大井社」は脱落していた「不在神祇官社」で補訂された二十五社の中で最初に名を残している。その補訂を行ったと思われる岸崎時照の『出雲国風土記抄』で岸崎は補訂された「大井社」を「朝酌郷

大井村七社大明神。いわゆる出雲御大三崎ハ此處の東の辺に在り。この社は則ち大國主神を祭る」としている。また弘化三年（跋文）の岡部春平の手になる『出雲神社考』は「大井村にあり、祭神は御井神なり大國主神、稻羽之八上比賣神に御合坐して所生給る木俣神、因々に井を穿て民の利をなし給へるより、御大井神と称す」とし、横山水福はその著『出雲国風土記考』で「朝酌郷内大井村にて、七社大明と申〔其ハ俗人云天神七代を祭れりといふて、社にも其事を記したり〕、あらぬことにて、祭れり神ハ稻葉八上姫を御妻として生ませる、御名ハ木投神、又御名は御井神と申て、井を守り玉ふ神なり〔ここに冷水の出るも妙なる事ならずやも〕」とする。また享保二年に編纂された地誌の『雲陽誌』には「大井〔風土記〕に大井社あり、大國主命を祭」とするが、その〔風土記〕とは補訂風土記のことである。

岸崎時照は、『出雲国風土記』の原本に「大井社」があったかどうかさえ不明であるにもかかわらず、何故、そして何を根拠に「大井社」なる神社を島根郡条を補訂する際に入れたのであろうか。岸崎時照が『出雲国風土記』の調査を兼ねて村々の差出帳簿を精査した頃、大井地区のその神社は「七社大明神」として祭られていたのである。その後、横山の報告にある通り幕末まで同社は確實に「七社大明神」として信仰されていることも判明している。しかし、江戸中期に『雲陽誌』が、その神社は『出雲国風土記』の「大井社」に当たるのではないかという見解を持っていたことも事実である。それは岸崎時照が多分、目の前の「七社大明神」を『出雲国風土記』時代の忘れ去られた神社の一つと考えたことの延長での理解であろう。

岸崎は『出雲国風土記抄』の序において「予既に三十餘二年、四季に國中をめぐり（略）神社仏閣の旧跡」を訪ねたといい、その神社仏閣の由来を精査したことがうかがえるのである。岸崎は七社大明神を訪れ、社司に会い、神社に伝えられている棟札などを実見したのである。『朝酌郷土誌』によれば写しであるが、七社大明神（現・大井神社）の古い棟札は天正六年に遡り、そこには「大井大明神」とあり、また慶長年間のそれには「大井社」と書かれているという。岸崎がその棟札の現物をみた可能性は高いであろう。彼は島根半島における「浜」などにみえる「神社」記載などを参考にし、また大井浜の冷水に隣接する七社大明神を参拝し、その前代の中世における社名が「大井」であることを知り、自信を持って風土記社として補訂したものと考えられる。この岸崎の補訂は島根郡の「不在神祇官社」数、そして『出雲国風土記』から認識できる「浜と社」の対応関係、そして井の存在からして支持できるであろう。大井浜の神社は『出雲国風土記』時代に「大井社」、江戸時代に「七社大明神」、そして明治になり再び「大井神社」になったのである。

神社といえば祭神であるが、大井神社の祭神は江戸時代においては大國主神、そして妻の八上比売、その御子神の木俣神（御井神）が祭られていたようである。それには大井の「井」の存在が大きかったと思われる。はたして須恵器生産の中心地として栄えた地域の要に鎮座する「大井社」の祭神は古代においてもその三神であったのであろうか。

そこで注目されるのが大井神社の裏手のイガラビ遺跡から出土した土馬・ミニチャーチ・土製支脚・小塙など祭祀にかかる遺物である。土馬は河川を通路とする神を水辺で迎える為の祭祀に使われる祭具と思われる。イガラビ遺跡も確かに小さな谷の入り口に当たり、その事例の一つともみなしが

できるが、別の要素も見い出せそうである。

馬の手綱を手で操ることを「たく」というが、手で薪をくべて火を「たく」行為も同じく「たく」であることに注目したい。手でものを操ることを「たく」と古代びとは言っていたらしい。現に船の檣を漕ぐことも「たく」というのである。

東京都稲城市の大丸遺跡の瓦谷戸窯跡の内部の壁に五頭の馬の絵が描かれていたとの1998年の報道はまだ記憶に新しい。誰もがその窯と馬との組み合わせに関心をもち、かつて馬と火に何らかの民俗的なつながりがあったのであろうといわれたが、その検証は困難とされそのままに終わっている。筆者は「馬と火」にはともに「たく」という行動で共通性があり、走る馬を窯内に描くことにより火の燃焼の高揚を願う祭祀的行為があったと推測している。その馬と火を命とする窯の周りを想定するならば発掘された「土馬」はそのような意味合いで作られた可能性も想定できるであろう。それ以前に馬は神の乗り物、神馬である。イガラビ遺跡の住人がいかなる神を大井地域に招こうとしていたのか、それがまさに「大井社」の祭神だったのであろう。

おわりに

松江市教育委員会と財団法人松江市教育文化振興事業団により大井浜の新たなる発掘が行われ、大きな成果を得たと聞いている。本稿はその報告作成と同時に執筆しているものであり、その成果を組み込んだものではない。今後、その報告書に組み込まれた新たなる成果に本稿で述べたことが少しでも色付けできたらと思っている。『出雲国風土記』に残る「大井浜」の記事は僅かであるが、光の当て方により七色の光を発することも見えるのである。多くのそのような史料が眠っている中で今回の発掘が大井浜の古代の歴史に貴重な光を当てたと確信している。筆者も拙論と一緒に世に出る新たなる発掘成果を更に受け止め、再度『出雲国風土記』の「大井浜」の記事に別の角度から光を当てるなどを胸に秘し、筆をおきたいと思う。

注

- (1) 摘書『古代出雲への旅』(中央公論新社)。
- (2) 森田喜久男「朝御郷の景觀と生業」(『出雲国風土記の研究Ⅱ』島根県古代文化センター)。
- (3) 山木清『出雲の古代文化』(六興出版)。柳浦峻一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」(『松江考古』三)・『風土記の考古学3 一出雲国風土記の卷一』。
- (4) 摘著『風土記と考古社会』(培文房)。
- (5) 摘著『日本古代社会生活史の研究』(校文書房)。
- (6) 摘論「古代びとの禮物仕様」(『住まいと住まい方』)。
- (7) 平野卓治「島根郡条本文の検討 一写本からのアプローチー」(『出雲国風土記の研究Ⅱ』島根県古代文化センター)。
- (8) 摘論「『出雲国風土記』の元本性」(『国語と国文学—風土記研究の現在—』)。